

絶望の魔法

黒野真琴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【第1章】

死んだ30代のおばさんが別世界線の15歳の自分に乗っかって、見滝原から神浜に行つてマギウスとして世界を救う話。

魔女を操つて結界を作つて、イブとワルプルギスの夜を近づけさせないようにするのが最終目標。

おばさん視点でマギレコのストーリー準拠で壊していくのがやり方です。

【第1. 5章】

おばさんもガキも消えて天使になった怪物が、自分の役割をまっとうしながらかき乱して遊ぶ物語。

愛や円環の理を大切に思つて守りたいと思う。それでも、前と違って魔法少女以外はみんな死んでほしいと思うようになってしまった。

そんな天使が恋人にした鬼と共に、見滝原、神浜といった場所をロボロにしながら楽しく生きていく。

オリジナルストーリーで色んな人の場面で展開されます。

【第2章】

消えた街を探す2人組と天使達が手を組んで、その街を探し出しに行くオリジナルストーリー。

神浜の後に奇跡を起こした街で起こった事件に、天使達がいつも通りに力で解決しに行く。

ただ、全ての裏にはインキュベーターがいる。そいつのせいで血が

流れる最悪の事態になる。

目次

第1章 運命の改変者

第1話	あの世の出会い	1
第2話	病院で知る事実	4
第3話	最初の魔女はみんなのトラウマ	8
第4話	運命と魔女システムと私	11
第5話	衝撃の神浜デビュー	14
第6話	奇跡的なウワサの対面	17
第7話	ウワサの実験と最悪の出会い	20
第8話	マジウスからの危険な勧誘	23
第9話	マジウスと最高な対面	26
第10話	自分がすべきことを見つめ直して	29
第11話	イブの支配と災厄の確認	32
第12話	初めまして、みかづき荘の皆さん	35
第13話	講義後の処理の準備	38
第14話	運命の変化とお遊び	42
第15話	ウワサの破壊と激おこマジウス	45
第16話	裏しかないお茶会	48
第17話	私の活躍の時間到来!	51
第18話	災厄の捕獲と害悪の登場	54
第19話	鳥栖理論なんてクソくらえ!	57
第20話	ジ・エンド	60
第21話	最後の仕事	63
第1・5章	休憩時間	
第22話	舞い降りた聖なる者	66

第23話	新しい住居と同居人	69
第24話	円環の信仰者	72
第25話	見滝原から見る神浜	75
第26話	何かがおかしい愛の始まり	78
魔法少女ストーリー	真由子	81
第27話	奇跡も拒絶される『ルール』	84
魔法少女ストーリー	こよみ	88
第28話	怯える鬼と神浜を滅ぼす者	91
第29話	第一回神浜滅亡会議	94
第30話	悪夢と神浜合戦	97
第31話	アリナのニューアート	100
第32話	神浜への救済と逃走劇	103
魔法少女ストーリー	ゆかり	106
第33話	準備完了	109
第2章		
第34話	新たな問題の予感	112
第35話	死神襲来!	115
第36話	アリナのスランプとお嬢様	118
第37話	走馬市への侵入作戦!	122
第38話	神浜の問題は大きなものだった	125
第39話	助っ人マミ!	128
第40話	走馬の天才魔法少女学者	131
第41話	走馬の眼帯女剣士	134
第42話	走馬の腹黒お嬢様	137
第43話	中央のボスの戦闘タイム	140

第44話	天使の目的達成への一歩	143
第45話	半魔女は魔女無き世界の悪夢	146
第46話	全てが片付いて解放される	149
最終話	マギアレコードを聴く者	153

第1章 運命の改変者

第1話 あの世の出会い

私はある日突然死んだ。

そして、何故か目の前にキュウベえがいる。

死人の前にこいつがいること自体おかしいことなのだが、私がいた世界にこいつも魔女も魔法少女も存在しなかった。

だから、最初のうちは30歳のニートで死んだから、神様が馬鹿にするためにキュウベえになって現れたんだと思っただけで、よく見ると違った。

よくある輪っかがこいつの上にあつた。ついでにジャージでボサボサ髪の私の上にも。

「僕と契約して、魔法少女になってよ」

いつも通りのそのセリフをこいつは死んだおばさんに対して言いやがった。

「はっ？あんな、死んだって自覚ないわけ？それに、私はもうおばさんなんだけど」

クマのできた目で上から見下ろす形でそう言った。

それに対してキュウベえは、いつもの営業BGMが流れてそんな感じで驚きのことを言った。

「確かにあの世界の君は死んだね。でも、こっちの世界の君は若くして死にかけてる状態なんだ。15歳で生死の境を彷徨ってるから、今なら君が僕と契約することでその体に入って生き返ることができるんだ」

あのキュウベえが普通の動物のように転がったり顔を撫でたりしながら、私の度肝を抜くのに十分ないくつかのことを言ってみせた。

『まずは、その世界では私がまだ15歳の少女であること』

『次に、家の階段で足を滑らせて死んだ私と違って、そっちではまだ助

かる可能性があること』
『さらに、キユウベえに願いを叶えてもらった状態でその体に乗っ取れるということ』

そこまで理解して、あることに気づいた。原作のキユウベえは色んな時間軸で殺されてきたけど、一度も死者を魔法少女にしたことは無かったんだ。

「ねえ、あんたはいつから死人を魔法少女に出来るようになったの？」
「今頃になってようやく自分があの世にもいることに気づいたんだ。そしたら、次元も超えてそんなことができるようになっていいることに気づいたんだ」

つまり、スペアの体に記憶をリンクしてる時に、あの世にもその体があることに気づいて、動かしてみたらあの世ではそんな力が使えることに気づいたってことだ。

「それなら、いいんだけどさ」

「それで、僕と契約して魔法少女になってくれるのかな？」

キユウベえが何故死人を魔法少女に出来るのかということの力作りは全て分かったわけじゃないけど、生き返れる可能性が成功率と一緒に高いのであれば、やってみる価値はあるかも知れない。

しかも、キユウベえが今頃と言ってたから、初めてするのが私なのかも知れない。それなら、失敗をさせないようにするだろうから成功率はかなり高くなるに決まってる。

怖がることはない。

私はゴミのような人生を送ったのだから、願いも迷うことなく言うてしまえばいい。

「やってやる！あんたの実験台になるのだとしても、生き返れるならやってやるさー！」

「それはよかった。そう言ってくれるなら心置きなく最初の生き返りの魔法少女にできるよ」

やっぱり、私が最初だった。それでも、もう後悔したって遅いんだ

から突っ走るまでよ！

私は震えながらそう思った。

「さて、それじゃあ。君の願いを言って欲しいんだ。ここでならある程度無茶な願いも叶えられるよ。さあ、言ってごらん」

ゆっくりと深呼吸して、何の役にも立たずに死んだゴミ人生への別れをした。そして、多分体から追い出すことになる子供の自分にも謝った。

それから目をはつきりと見開いて言った。

「私の願いつてのは『歳を取らないで魔女を操ること』なんだよ！」

その願いにキュウベえは一瞬驚いたような反応をした。多分、魔女のことを知っているのに驚いたんだろう。

原作で知ってるから、なんて言えないけどね。

「君はきつと大きな運命を動かすことになるよ。それは何人もの魔法少女に影響を与えるような運命だ」

運命を動かすということと言われて、どういふことなのかと聞きたくなった。

「それって…」

聞こうとした途端に光に包まれて、私はそのまま意識を失った。

第2話 病院で知る事実

光の中から暗闇に変わって、目を覚ますと病院のベッドの上にいた。

生死の境を彷徨っていたと聞いていたので、ゆっくりと首だけを動かして周りを確認した。

右を向くと、近くにはテレビや薬を置く棚があつて、その先には窓があつた。窓の外には春の見滝原市と思われるものが広がっている。

アニメで見覚えのある建物とかがあるから多分間違いないだろう。

左を向くと扉と廊下が見えた。その距離が近いことからここが個室であることが分かった。

左右を見て親などがいなかったようなので、上を向いてあるはずの名札を確認した。

そこには自分の名前とちよつと違う『鳥栖とすこよみ』という名前が書かれている。

『私は鳥飼とりかいこよみだったのに、こつちだと世界線が大きく異なるから違うのかな』

そう思っていると看護師が入つて来て、意識を取り戻していることに気付いて急いで医者を呼びに行った。

しばらくすると小走りで医者のおばあさんがさっきの看護師と一緒に入つて来た。

「意識は戻ってるし、安定してるから人工呼吸器はもう必要ないね。

一時はどうなるかと思つたけど、無事に目を覚ましてよかったよ」

そう言いながらおばあさんはテキパキと作業を進めて、人工呼吸器を取り外してから聴診器を当てたりして診察した。

「うん。これならあと一ヶ月もしたら退院できそうだね」

おばあさんはそう言つてから看護師に後を任せた。

私はその様子を静かに見守っている。

「よかったですね。事故にあってから1週間も経ってますけど、助かったのが奇跡つてくらいの大怪我だったんですよ」

この一言で色々なことを理解した私は出せるか分からない声で言った。

「私の荷物はどこですか？それを確認したら休みます」

「ちよっと待ってて」

予想より高い声で自分は驚いていたけど、看護師はそんなことに気づかずに言われた通りに荷物を持って来た。

それは病室の隅っこに置かれていた。

今までに自分が見たこともないようなものすごいピンク色のカバンを目の前に置かれて軽く戸惑った。

しかし、中を確認するなと思って看護師に一人で確認したいと言った。

看護師がいなくなったのを確認して鞆の中を確認した。大きめのその鞆の中には無傷の着替えが1セット、財布、自分の通帳、ハンコ、スマホ、手帳、日記、それと予想通りにソウルジェムが入っていた。通帳には残高が300万ほど入っていた。その理由は日記やスマホで確認できた。

元々いたこの世界の私は2年前に両親を亡くしていたようだ。しかも、一人っ子で誰も引き取りたがらなかったから、逃げて親の遺産を頼って孤独に生きてきたようだ。

そして、その私が事故にあったのは通学中のことだったようだ。

「なるほど、この世界の私はずいぶん強かったみたいね。私なら引きこもりになつてるところだよ」

そう言いながら他のものも確認した。

他にないかとカバンをひっくり返して振っていると、手鏡が落ちてきた。ちよんどういと思つてそれで自分の顔を確認しようと思つた。

まだ少し体が痛いので最小限の動きでそれを拾って自分の顔を見た。

「あー、若い頃の私より随分と手入れしてるんだね」

言った通りで、私の若い頃のもろインキヤつてのと比べて随分と綺麗だった。私が貰うにはもつたないくらいけがすの美少女に育っていた。これを魔法少女の力で穢すのかと思うと本当に申し訳ない気持ちになった。

「まあ、仕方ないよね。多分だけどうしなかつたら死んでただろうし」

そう言った後にすぐに一言付け加えた。

「てか、私はすでに死んでるんだけどね」

そんなことを一人ですると、うまくいったかを確認しに来たキュウベえと途中で目があった。

いつのまにかこいつは静かに病室に入って来て、少女のプライバシーを覗き見していたのだ。

それを見て私は頬のあたりをヒクヒクさせて露骨に嫌そうな顔をした。

「そんな顔しなくてもいいじゃないか。僕の提案に乗ってくれたから生き返れたのに」

ぶりっこしているように見えるキュウベえを踏み潰したくなる気持ちを抑えた。

そして、イラつきを隠して対応した。

「それには感謝してるよ。しかも、この体になった時に魔法少女の力も入ったから、明日には抜け出せそうだしね」

感謝してるのは本当だし、抜け出すことを考えてるのも本当だ。

魔法少女にはグリーフシードがないといけない。あれがないと少しずつでも穢れが溜まっていつか魔女になってしまう。

それを回避するためと、おそらく魔法は魔法の操作だろうからそれが必要になる。

「さて、キュウベえ、これ以降私に近づくのはやめてちょうだいね。あなたの実験に付き合ったんだから、それくらい許されてもいいと思うんだけど」

「分かったよ。なるべく近寄らないようにするよ。でも、何かあればまた来るからね」

そう言っであいつは廊下の方に歩いて行った。

二度と会わないわよ。利用し終わったら、このあとは絶対に対立することになるんだからね。

そう思いつつ痛みと疲れで一眠りすることにした。

予想では翌日に動けるようになるだろうから、そこから行動を進める。

私の目的になったワルプルギスの夜捕獲計画のために。

第3話 最初の魔女はみんなのトラウマ

キユウベえが帰ってから翌日の夜になるまでの長い時間を使って私は回復と支度をした。

回復するために寝て、支度のために起きてを繰り返して、どうにかこっそりと抜け出せるまでには回復した。

だから、今がチャンスと思つて窓から飛び出すことにした。幸運にも病室は4階だったので変身すれば余裕で出られる。

「うわっ、意外と怖いな」

その高さを確認してから髪ゴムを取り出して、長くて綺麗な黒髪のロングヘアをツインテールに結びながらルートを確認した。

前髪の一部に白が混じってるのを気にしながら、150cmで40kgの体をどう使ったら安全に降りられるかを考えた。

「なるべくダメージを受けないからそのまま直で降りたくないんだよね。出来るなら30m先の木に飛び移りたいけど、初めての変身だしよく分からないな」

そんな感じで悩みながらもいつも通りに、「よし！後悔するくらいなら突つ走るのみ！」と言つてすぐに覚悟を決めた。

それで変身したが、夜で暗かったのでその姿を自分でもちゃんと見ることは出来なかった。

まあ、後で見る機会はあるだろうしその時でいいかな。

そう思つて窓から飛ぶ態勢に入った。そして、一気にジャンプして木に飛び移ることに成功した。そのまま枝を次々と飛んで降りて行った。

「案外変身してると恐怖も減るんだね」

そう言いながら変身を解いて、バッグの中に入ってたチェックのスカートと黒い長袖Tシャツとスニーカーとパーカーのファッションに戻った。

なんだかこのバッグにあつてない気がするが、元々ヒキニートだったのであまり気にしなかった。しかも、元がおばさんだからファッ

シヨンにも疎かった。

病院を抜け出した私は街中を散策した。その途中で、見滝原の主要メンバーである5人全員とすれ違った。

ただ、この時の暁美ほむらはメガネをかけていたので、まだそんなに繰り返していない頃だろう。

それから、まだあの5人に関わるべきではないと思った私は小走りで人気のない方に進んだ。

すると、魔女の反応を感じ取った。その瞬間、喜びと幸福に満ちた満面の笑みが溢れてしまった。

「アッハ！初めての魔女の反応だ。これが私の最初のおもちやになるんだね。どんな子なのか楽しみでしようがないよ」

そう言っつて、反応のある廃墟に向かって走った。その途中で変身してその廃墟に誰も近寄らないように結界を張った。

その結界は佐倉杏子を使うものより広範囲で頑丈だ。その結界を張った変身後の姿は月明かりに照らされると、不気味としか言いようがないものになっていた。

神浜のアリナの衣装をスカートを伸ばして全体的に黒を増やした感じだ。

中身まで少し若返った気がするよ。これなら少し恥ずかしい格好でも我慢して遊べるね。

当然、一番乗りで結界にたどり着いた私はなんでも出来る気がしていたから、強気に真っ直ぐ魔女の元へと向かって行った。

結界に入ると、一目でこれがお菓子の魔女の結界だと分かった。

しかも、どんな戦い方をしてくるかも分かっているからすごくやりやすく感じた。

「魔法は直感で使えばいいよね。さっきも直感で結界を張れたし」

そんな風に余裕ぶつっていると、すぐに魔女の方から呼びつけてき

た。

そして、1番奥に無理やり連れて行かれた。すると、目の前に小さい状態の魔女がちよこんと座って現れた。

「みんなのトラウマ、お菓子の魔女シャルロット。原作だとマミさんがパクツされたけど、私はそうはいかねえんだよ」

そう言っただけで私は外の結界を消して、指を鳴らして魔女を閉じ込めた。

それを突き破ろうと魔女は中身を出したが、その様子を滑稽だと言わんばかりに嘲笑ってやった。そして、サッカーボールを蹴る要領で思いつき壁に叩きつけやった。

それから結界を収縮させて押し潰した。

ストレスを発散することが出来た私は壁から落ちたグリーンフィールドを拾った。

それに対してキスをして私の物になるように魔法をかけた。これで魔女に戻っても私の言うことに従う。はず。

後で試してみることにした。

第4話 運命と魔女システムと私

お菓子の魔女を回収して魔女の結界が消えたから一安心していると、突然周りの時間が止まったようになってしまった。

それに驚いて辺りを見回すと、マギレコの最初に見かけるあの姿が私の背後にあった。

「運命を変えたいなら、神戸市に来て」

微笑むその顔を見て私は、ここがマギレコの方の世界なのだとようやく理解した。

それならほむらがまだメガネをかけてる頃なのも納得がいく。

そう思っていると、例の少女は姿を消して時間も戻っていた。

「この世界があつちの世界なら、ワルプルギスはここには来ないんだよね。なら、大急ぎで向かわないとウワサでの実験もできなくなっちゃう」

自分が何をすべきなのか分かっている私は、さっきの言葉を信じてすぐに移動することに決めた。

全ての魔女を操ることは、みんながそれと戦って死ぬ運命を変えることになる。

だから、私の役目は『その魔女を操ってみんなを守ること』だ。

「そうと決まれば即行動だね」

1人でそうしていると、限界まで来てるっぽい魔法少女が上から襲ってきた。

ソウルジェムがほとんど濁ってるのは、その殺人鬼のような目である。殺してでもグリーンフィードを手に入れたいのだろう。

その相手は呉キリカをもっと猟奇的にして、さらに真っ黒にした感じだ。

魔女を集めたい私でも、さすがにこの子を魔女にしたらいけないと思っただ。

「ちよつと、落ち着いてーこれを使っただけいいからー」

そう言ってお菓子の魔女のグリーンフィードを差し出した。

それを見て疑いながらも時間がないその子は、急いでそれを受け取

ろうとして手を伸ばした。

しかし、もう遅かった。

その子のソウルジェムは、グリーンフシードに手が届く寸前で砕け散った。その体は一気に力を失って倒れ、その目には涙が浮かんでいた。

その子から現れたグリーンフシードはすぐに魔女を生み出そうとしたので、私は急いでそれにキスをして支配下に置いた。

しかし、倒してもいない魔女を操るなんて、美国織莉子と呉キリカの信頼関係くらいないと出来ないんじゃないかと思った。

「あー、私ったら何してるんだろ」

よく考えてみたら、魔女になった彼女に情けをかける必要なんてなかった。

その子とは何の関係もないわけだし、時間切れになったのなら冷静に対処してグリーンフシードを回収すればいいだけ。

そのはずなのに、目の前で死んだ彼女を見て申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

だから、せめて誰も殺させずに痛めつけないで、私の支配下に置いて休ませてあげようと思った。

そのグリーンフシードからしばらく禍々しい力を放ってから、魔女の結果を生成してその中で影の魔女に似た魔女が誕生した。

その魔女の誕生を目の前で見ていた私に、そいつは一気に近づいてきた。

それで襲われると思った私は結界の準備をした。

しかし、そんなことはなかった。そいつは私の頬をつついてきたりしてじやれついてきた。

それでキスしたグリーンフィードは、どんなタイミングでも操れるという仮説が出来た。

「とりあえずはこれで良かったけど、抜け殻を普通に寝させてたら廃墟を離れようかな」

今すぐに逃げないと自分が次に来た魔法少女とかに、殺したと疑われると思った私はじやれてくる魔女をグリーンフィードに戻した。

もちろん、これも直感で試して出来た。

そして、結界を出たらすぐに死体を普通に寝てるようにしてから、その場を後にして今日のところは色々な場所を転々とすることにした。

魔女がゴールの魔法少女。その運命は変えられなくても、引き延ばすことくらいはマジウスの翼のように出来るんだろうか。

第5話 衝撃の神浜デビュー

翌朝、私は駅の近くにある公園に作った結界の中で目を覚ました。お菓子の魔女をグリーンフシードから出して結界を作らせて、その中で病院のベッドのようなものを使った。当然、魔女だけじゃなくて使い魔も操れるから、身の安全は保証されて快眠だった。

しかも、私の結界で入り口を囲んだから魔法少女に見つかることもない。

まさに、完璧と言うかもしれない環境を作ったのだ。

「とりあえず、今日はお金をおろして神浜を目指そうかな」

完全に目を覚ました私はベッドから降りて帽子をかぶった。

魔女や使い魔にじやれつかれると、生身だと耐えられない気がしたから変身して寝た。正直言って完璧な快眠ではなかった。

あの服で寝るのは結構辛い。

今の魔女達は言うことには従うけど、しつけられてない犬のように最悪なタイミングでじやれてくることがある。

まあ、これから魔女は増えるから根気よくペットのように扱わないとね。

てか、あの後に街中を歩いて弁当とか買ったけど、シャルロツテがチーズを欲しがったのは大変だった。

しかも、財布の中を見たら10万も入ってたし、それなら銀行に寄らなくてもいい気がするからやめとこ。

「シャルロツテ、出かけるから戻ってね」

出かける準備はすぐに終わったし、弁当もすぐに食べ終わったから両方の結界を消すことにした。

言われた通りにシャルロツテはすぐにグリーンフシードに戻ってくれた。そのタイミングに合わせて自分の結界を解いた。

そうすることで安全に外に出ることに成功した。

そして、真っピンクのカバンを持った普段のダサ服ファッションに

戻って、駅に向かって歩き出した。

その途中に自分のソウルジェムが、永久に使えるグリーンフィードのおかげで全く濁ってないことに気づいた。

普通ならグリーンフィードは穢れを貯め切るとまた魔女が出てくる。だから、そうならようにだいぶ吸わせたらキュウベえに与える。

だけど、私の魔法ならグリーンフィードは穢れを吸わせても、魔女を出してグリーンフィードに戻せばチャラになる。

これで永久にリサイクルが出来るのだ。

そんなことを考えながら歩いていると、そんなにかからずに駅に到着した。

目指すべき場所は多分あの駅だろうから、ちゃんと切符を買って電車に乗った。

しばらくして、魔法少女と魔女が多く集う街『神浜市』に到着した。電車を降りてその地を踏みしめた途端に『この子はすでに解放されている』と誰かに言われた気がした。

元々30年も生きてきたけれど、やっぱり正体の分からないものは怖かった。

「なんなの、今のは」

そう呟いていると、駅の外に魔法少女の反応を感じた。

しかも、こんな所で数人が固まってるようだったから、多分マジウスの翼だと思った。

「ちっ、まだこんな所で絡まれるわけにはいかないんだよね。だから、気配を殺させてもらおうよ」

そう言って、薄くなるべく見えなくらいにして結界を張った。

私の使える結界は、反応を消すものと攻撃を通さないものと攻撃に使えるものの3種類だ。

その中でも反応を消すものは使い勝手がいいから、こういう時には

楽々と逃げられる。

ただ、これを理解したのはシャルロツテの結界の中だったので、その前の逃走の時には使えなかった。

本当に駅の周辺にいるのがマジウスの翼だったので、私はそそくさと逃げて公園にたどり着いた。

すると、そこにちようど魔女が出現していた。

それを見た私は嬉しくてたまらなくなった。

『今度は魔女操作魔法で戦ってみよう』

そう思って入ってみると、そこにはバマミがいてゾツとした。

バマミはドツペルを発動した環いろはを人に化ける魔女と言って、いきなり攻撃を仕掛けるような頭の硬い一面もある危険な人だ。

本来ならどこかのタイミングで死んでるはずなのに、そのフラグを何本か折ったせいで普通に生きてここにたどり着いてしまった。

ここで魔女を使えば私は終わる。

そう思っただけで静かに公園を後にした。貴重なチャンスでも、あんなのがいたらさすがにお断りだ。

『魔女の回収の邪魔になる人は居なくなればいいのに』

そう思ったことを後で後悔することになるのだが、この時の私はまだそれを知らない。

第6話 奇跡的なウワサの対面

衝撃的な歓迎を受けて神浜に上陸した私はあの後で、立ち耳の魔女、屋上の魔女、羊の魔女の三体の回収に成功した。

本当は砂場の魔女も欲しい所だったけど、あんなのがいたら作業をできるはずがなかった。

最初にするべきことを終えた私は、お菓子の魔女の結界に入って簡単に情報の整理をした。

『この世界はマギレコの世界である』

『マギウスの翼が存在する』

『すでに巴マミが上陸を済ましている』

『私は魔女操作の影響でドツペルが適応されない』

『魔女が多いと言う割にはあまり回収できない』

『ウワサに接触する手段がない』

この世界で生きていくのに必要になるのである情報はこれらだろう。特にドツペルと魔女は問題になる。

マギウスの翼と戦うことになれば、手駒の少なさとドツペルが使えないのは痛手になる。

あれはいざという時には役に立つから無いのは辛い。

それでも、魔女化しないと考えればいいことではある。

「ウワサがどこまで倒されてるのが気になるわね。ミザリーウォーターまで行ったら最悪なケースも想定しないと」

最悪なケースとは、駒が揃わないうちにマギウスの翼と接触しなければいけないことだ。

接触する目的は魔女の回収において邪魔になるであろうウワサの排除。あれがいることで魔女を回収できなくなる可能性もある。

それと、アリナも魔女を飼ってるけど奪い取れる可能性は低いだろうから、倒せるだけの駒が必要になる。

なんで私がマギウスの翼と敵対する方向で考えてるのかと言えば、私の目的がワルプルギスを含む魔女の回収だからだ。

とりあえず、街を散策しようかな。

そう思っ変身を解きながら結界を出てみると、魔法少女とも魔女とも違う反応を感じた。

多分、これがウワサの反応なんだろう。

方角的に、ウワサが姿を見せたのは口寄せ神社だ。

原作で知ってるから地図さえあればその場所がわかる。

その反応がしてるならそこには環いろは達がいる。

それでもウワサにあってみたくてうずうずする。

でも、そこには巴マミが現れる。

悩んだ末に私はまだ動くべきではないと判断して、魔女狩りに出かけた。

「今はまだ干渉するべき時じゃない」

そう思っていたのに、運が悪かった。

隠れていたのはさつきとは別の公園で、今は噴水の近くに来たところだった。

そこでウワサに巻き込まれました。

アラもう聞いた？誰から聞いた？

神隠し公園のそのウワサ

午後3時ちように遊んでいると

突然何かに連れて行かれて

どこを探しても見つからなくなる公園サン！

噴水の近くにいないと連れて行かれないって、

神浜市の人の間ではもっぱらのウワサ。

ドコイツタノー？

という内容がゲームの中でもあった声で聞こえてきた。
ウワサの結界の中なら可能なだろう。

ただ、周りには本体に従う小さなウワサがあるけど、一体も私を襲ってこなかった。

もしかしたら、絶交ルールのウワサのように帰れなくなるから動く必要がないのかも。

と、思ったけど一向にウワサの本体が出てこなかった。

どうするべきかと悩んで、一応変身してから少し歩いてみると、途端に周りが騒がしくなった。

危険だと思った私は少し戻った。すると、また静かになった。

まさかと思って背後を確認すると、最初からそこにはウワサの本体があった。

あのウワサの内容にあったことから、この噴水が本体で神隠しの原因なんだろう。

確か、噴水の近くにいないと連れて行けなかったはずだから、この噴水から離れるのがいけないんだろう。

だから、噴水から離れようとすれば広い結界にいるたくさんのウワサに捕まって戻されるのだろうから、抜け出すのは難しいと思った。

「だったら、一気に本体を叩けばいいじゃん」

そう思って本体の噴水を結界に閉じ込めた瞬間、周りの神隠し番犬のウワサ達が一齐に騒いで襲い始めた。

さつきまで結界内が暗くて敵の姿もよく見えなかったけど、これならさらに実験ができそうだった。

「おっ、これはちょうどいいかも。試しにやってみようかな」

そう言ってグリーンフィールドから最初に捕獲したお菓子の魔女と暗黒の魔女を出した。

これがウワサとの初戦闘になる。

第7話 ウワサの実験と最悪の出会い

初めて見るウワサでも、ルールさえ分かっただけ。しまえば後はやるだけ。

そう、本体を叩きつつ雑魚を片付けるのみ！

「さあ、本体は私が結界を変形させてヤルから、そっちの雑魚は任せたよ！」

その声を聞いて魔女達は、本気になって攻撃を始めた。

お菓子の魔女は中身を出して食べ漁った。

暗黒の魔女は自分を囲む闇から剣を無数に作り出して攻撃した。闇を一本のロープのようにして、それを無数の剣につなげて振り回している。

魔女達が一気に雑魚を排除してる隙に、私は結界を変形させて一気に無数のトゲを上から落とした。

だが、簡単に壊れることはなかった。

それを見た私は結界の密度を上げたり、硬度を上げたりしながら、何度も変形させて何度も叩いた。

そして、10分後によく壊せるだけのダメージを与えられて、やっとなり散ってくれた。

すると、しばらくして全てのウワサも姿を消して私は元の世界に戻れた。

これがウワサなのだど理解して、本体をどうにかしたり、ルールに従えば外に出れる。

貴重な体験ができたのはよかったけど、時期が悪かったらしくマジウスの翼に目をつけられた。

「貴様！これ以上首を突っ込むな！後で後悔することになるぞ！」

黒羽根の1人がそう言ってるのを見て、私はちよつと昔の血が騒いできました。

そのせいで片付けた魔女達をまた出したくなってしまった。

「どう後悔することになるの？まさか、あんた達が束になって私を襲うの？」

首をカクツと傾けて目を大きく見開いて威嚇した。

そんなことできるの？と目で訴えかけたことで、黒羽根達はビクツとなつて一步引いた。

この様子を見た私は大笑いした。

「あはははーあんた達弱すぎだよ！その程度で私にこれ以上首を突っ込むなって言うなんて、ほんと私を下に見過ぎなんだけど」

と、笑いながら言つてから、黒羽根の1人に近づいてちよつと下からの目線だけど、相手が怖気ずくくらい威嚇はした。

「ほ、本当に後悔することになるからな！」

怯えた様子でそう言いながらその黒羽根は仲間と共に逃げていった。

そいつらが逃げていく中で、もう1人の魔法少女の気配を感じた。

多分、あの3人のうちの誰かだ。

アホの子達に絡まれた私は『調整屋』を探そうと思った。

この先で絶対に必要になるだろうから、今うちに見つけて関係を良好にしておく必要があつた。

なにせ、ここまで来ればもう時間はないのだから。最終決戦まであと数週間といったところだろう。

それに、私が戻ってきたときには口寄せ神社も終わったようだったから、次はミザリーウォーターのウワサであれに会うことになる。

その次ではアリナが姿を表す。

さらにその次でマギウスの翼と敵対することに決まる。

もう時間がない。

急がないとワルプルギスが来てしまう。

私は覚悟を決める必要があつた。

あの店の場所は分かつてるから、いろは達にも会えるだろう。それ

でマジウスの翼を潰すときに私が動けるようにする。

今のままではアジトの場所も分からないからいけない。

だから、情報を知れる状態にする。

あるいは、私があつちに潜入しておいてやれるタイミングで動く。

『イブ』が動き出すのも時間の問題だろうから、少しでも邪魔をする必要もある。

そう思ってたけど、私はあまりにも硬い噴水のウワサを倒すのに力を使いすぎたせいで動けなくなってしまった。

仕方なく今日はシャルロッテの結界に入って休むことにした。

第8話 マギウスからの危険な勧誘

私は大変な目にあった日の夜に夢を見た。

そこで私はキュウベえに言われたことを思い出した。

『君はきつと大きな運命を動かす事になる。それは何人もの魔法少女に影響を与えるような運命だ』

それを思い出したせいで嫌な予感がした。

もしかしたら、すでに影響が出てるんじゃないかと。

私はまたシャルロッテの病院のベッドの上で起きた。

でも、昨日とは違って使い魔も含めてみんなが私を心配していた。

なんでだろうと思つて色々確かめてみると、どうやらうなされてひどい寝汗をかいていたようだ。

いや、冷や汗の方が正しいだろう。

心配させてしまったから、大丈夫だよとシャルロッテの頭を撫でてあげた。

使い魔達にはその様子だけで十分だった。

それからまた準備をして外に出た。

すると、自分の持つ魔法は絶望の魔法だと自覚せざるを得ないようなことを見てしまった。

あのアリナ・グレイが目の前に立っていたのだ。

「黒羽を怯えさせるような子だつて聞いたから、もっとデンジャラスなのかと思つたら、意外とエレガントなんですケド」

そんな風に言われても、あのアリナから言われてると思うと正直喜べなかった。

次元の違うアートを作り出すアーティストの感性と自分達の感性はズレているのだから。

「そりやどうも。まあ、あんたみたいな人に褒められても、褒められた気

はしないけどね。アリナ・グレイさん」

ここで自分が地雷を踏んでいる事に気づかないのは間抜けとしか言えなかった。

「うーん、やっぱり聞いてた通りだヨネ。会ったこともないのに知ってるみたいだし、アリナと同じ結界の魔法まで使えるなんて、アナタはアリナの興味引くには十分すぎるんだヨネ」

元を知ってる人ならもう分かっているかもしれないけど、今アリナはあの美しく不気味な笑顔をしている。

「私の魔法を知ってるってことは、あのウワサとの戦いを覗かれてたのかね？」

「ウワサのことまで知ってるなんて、ますます興味を引かれるんですケド」

火に油を注いってしまった私はさらにアリナに気に入られたようだ。

正直、今すぐこの場から逃げたい。人を魔女の餌にできるような人とはそりが合わないに決まってる。

「ねえ、アナタもうちに来たらいいんですケド。そうしたらグリーンフシードもたくさん手に入るし、こつちからしても魔女を制御できる人が来たら楽になっていいんですケド」

やっぱりそうなるのかと思った。しかも、アリナ直々の勧誘となると、あつちは絶対にこの力が欲しいのだろう。

あのみふゆさんのように。

みんなの運命を変えるのに、これはまたとないチャンスなのかもしれない。

今まではあの3人が怖くて避けたかったけど、潜入しておけばしばらくは身の安全は保証されるだろうし。

何より私には住む場所もなければ、手持ちの魔女も足りない。

私の魔法を理解し切っていない今なら、このアリナから魔女を奪い取るチャンスだ。

「マギウスの翼に私を誘ってるなら、アジトのサラウンド・フェントホープの広い部屋を私にちょうだいよ。そこで魔女達を完全に操れるようにしてあげるから」

「うーん、それは相談しないといけないケド、多分OKしてくれると思うから大丈夫だね」

「なら、今日から私もマギウスの翼ってことだね」

「それどころかマギウスにだってなれると思うんだヨネ。なんならアリナから推薦させてもらってもいいんだヨネ？」

アリナは本気だ。本気で私を特別なポジションにして逃げられないようにするつもりだ。

でも、私にはみふゆさんと違って裏切れないものはない。

他の連中はみふゆさんに任せればいいから、いつでも私は気兼ねなく手を離せる。

あー、魔女を支配するとみんなの絶望の象徴になるから、なるべくみんなの前には立ちたくないだけだな。

裏から魔女を回収して守るのが私には合ってるんだよ。表はまた怪我させちゃう。

それなのにまた私は道を間違えちゃうんだ。

「それはあんたが勝手にして、イブのことを知ってるから役に立てるとは思うけどね」

「アッハ！やっぱリアナはアリナの作品に入れるのにふさわしいんだヨネ。これだけミステリアスでビューティフルな子ならベストアートをさせるのもいいんですケド」

興奮気味になってきたアリナをこのままにするのはいけないと思った私は、どうにか落ち着かせながらホテルフロントホープに向かった。

第9話 マギウスと最高の対面

あっさりともギウスの翼のアジトに入れた私は、拍子抜けしながら1番奥の2人がいるところに連れていかれた。

そこにはイブもいて驚いた。

実際に見てみると予想より大きかった。

これなら倒れて大きく揺れるのも納得がいく。

「例の子のスカウトに成功したから連れて来たヨ」

「ご苦労様。案外早く済んだみたいだね」

「ちゃんと味方にできたのは大きいよ。あれだけの力を持った魔法少女が敵になるのは想定外の被害を出すことになるからね」

今の会話から、あの時離れて見てたのはねむのようだ。

それにしても、長く魔女と一緒にいて慣れてるとはいえ、これだけの穢れは慣れるのに時間がかかりそうだ。

「ねえ、この子を無事にスカウトできたんだし、4人目のマギウスに推薦したいんですケド」

「アリナと同意見だよ。この子には何か特別なものがある気がするんだ」

「うーん、多分問題ないだろうからそれはいいかな」

「それと、この子に広い部屋と個室を用意したいんだケド」

「それなら空き部屋が2つあるからそれをあげるよ」

こうやってあっさりと話が進んだ。

どうやらこれで私はここでお茶を飲むことになりそうだ。

それにしても、なんで3人はこんなにもすんなりと私を受け入れるのだろうか。

「ねえ、あなたの名前を教えてくださいよ」

「私の名前は鳥栖こよみだよ」

その灯花からの問いかけに答えると、3人して私に笑いかけて「よろしく」と言った。

本当に仲間になって、マギウスになって、この3人の近くまで来て

しまった。

前世で味わえなかったゾクゾクを味わえて心は喜んでいる。本当にそっち側に墜ちてもいい気がした。

しかし、見上げればそこには自分にとつても敵でもあるイブが貼り付けにされている。

ワルプルギスの夜を奪い合う敵は邪魔でしかない。

そう思っていたのに、半魔女という半端で美しいその姿を見て、アリナの気持ちを理解して自分も見とれてしまった。

これを魔女にできるなら、私はその美しい姿をグリーンフィードに閉じ込めて、永遠にコレクションに加えていたい。

そんなことを全ての魔法少女に失礼だけだと思ってしまった。

「このイブが地上に立つ。そして、ワルプルギスの夜と出会って孵化する。状态的にその時はだいぶ近づいている」

私は見上げながらそんな独り言を呟いた。演技と本音を混ぜて。

「そう！このイブはワルプルギスの夜を呼んで集めた感情エネルギーで成長して、そのワルプルギスの夜自体も食べて完成する！」

「僕達の目的はそれで果たされて、すべての魔法少女は最悪な運命から救われる」

「それこそがアリナ達のベストアートワークなんだヨネ。このビューティフルなイブによってアリナの目的も果たされるし」

「私達はその目的が果たされるまで、このイブを守って育て続けなければいけない。ワルプルギスの夜が神浜に来るまで」

あたかも4人の目的がこの場で一致したように見せかける。

これで私もこの輪にちゃんと入れて、情報収集も含めてやりやすくなるだろう。

まあ、イブを守りたいと思ったのは本音だけだね。

そのあと私は与えられた部屋に連れて行ってもらいながら、3人に色々と説明してもらった。

それと、移動しながら羽根達に私のことを紹介してもらった。ついでにみふゆさんにも会えて、前世で好きなキャラだったから少し喜んでしまった。

移動しながら眺めてると結構普通の組織に見えたから、羽根達がなんでこんな人達の解放について行くのかを理解できた気がした。

ただ、この羽根達はワルプルギスの夜の本当の恐ろしさを知らない。

哀れな羽根達に幸せな運命が有らんことを。

いろいろなことを知る中で、環いろは達がすでにミザリーウォーターの被害にあい始めてることを聞いた。

つまり、明日には笛姉妹とみふゆさんが接触することになる。

本当にもう時間がない。

そう思っていると私の作業部屋に到着した。

「あなたの自室はここから三つ先の部屋だから、ここで魔女を操るための作業して、終わったらあつちで休んでいいカラ。それじゃあ、頑張つてヨネ」

そう言われて部屋の鍵とアリナの結界に包まれた魔女の結界を渡された。

それからすぐに3人はバラバラに分かれてどこかに行つた。

私はこれからが本番だ。魔女がアリナの支配にあるなら、私の完全支配で上書きできるかも分からない。

それに、時間がない以上は雑でも言うことを聞かせられる程度にはしないといけない。

時間とタイミングの勝負が始まった。

第10話 自分がすべきことを見つめ直して

私は作業部屋に入るとすぐに結界で囲った。

確かフェントホープは傷つけたらいけないはずだから、絶対に結界を解くわけにはいかない。だから、なるべく集中しながらアリナの不定形な結界から魔女を解放した。

そして、その中に入って私は結界をうまく使いながらキスをして支配した。

私の定型のある結界は魔女を従えてる分だけ、使える数と広さを変えられるようだった。

結界を連続して使えることに気づいたのは、今直感でやった時だった。

「ストップ！私を傷つけることは許さない！」

そう言うど魔女はすぐに止まってくれた。

この調子で次々と私は魔女を支配下に置いて、たった1日で20体に増やした。

しかも、アリナの魔女だから餌にされるような雑魚と違って、上質で力のある魔女だけが私の手持ちに入った。

作業を終えた私はシャルロツテと戯れていた。

私の魔女支配の絶望の象徴となる魔法は、シャルロツテのよううまく扱うことでその魔女の力を引き出すこともできる。

「あんたみたいにみんな言うことを聞いてくれれば、私はあんたみたいに戦い方をうまくさせて強くできるよ」

そう言いながらシャルロツテの頭を撫でた。

チーズを食べてるお菓子の魔女は自分の結界の外にいる。

それは、私の結界の中だから可能なことだ。私の結界は魔女の結界みたいなもので、そこに出てくる魔女は私の使い魔みたいなものだ。

あつ、これはアリナの被膜より面白い使い方が出来るかもしれない。

結界の中で魔女をずっと出せることに気づいて、私はみんなが絶望しそうなことを思いついた。

元のバッドエンドのさらに上のバッドエンド。

『最終実験、イブの結界内での永久支配』

私が居なくなっても永久に結界が持続されるなら、イブはその中でずっと猛威をふるえる。

その隙に被膜を使う余計な力を使わさせずに、最後のアリナのウワサを使った暴走をさせられる。

イブの猛威とワルプルギスの脅威とアリナの狂気、この3つを私のサポートがあれば暴れされらる。

これが私を軸にした最悪のシナリオ。私がいるから起こる最低最悪なバッドエンド。

私が堕ちればそれだけで世界は終わる。

あー、やっぱり私はみんなを傷つけるだけなんだ。

私は自室に戻って休憩することにした。

入ってすぐにベッドで横になって、自分がどう行動するべきかを考えた。

最悪なバッドエンドに、自分がマジウスの翼側にいる必要があるなら回避は可能だ。

みふゆさんのように裏切ればいい。

でも、自分はマジウスでイブに魅了されてしまっている。

ワルプルギスも手元におきたいと思うし、アリナの作品達を奪いたいとも思う。

「私は本当は何をしたいんだろ」

ベッドで横になりながら、私は自分の役目と魔法と情報を合わせ

て、自分が何者かを考えた。

そうしている時に、この世界の私の日記が目に入った。暇な私はちようどいいかなと思つて、座つてそれを興味本位に開いてしまった。

その日記の最後に書かれたページに、指に血をつけて書かれたと思われる記述があつた。

『私は親を殺した。その報いなのかな?』

私と違つてゴミみたいな人間じゃないと思つてたのに、この世界の私は親を殺していた。

しかも、それがバレることはなく。それから2年も生きてしまつた。

「親戚とかから逃げたのはこれが理由なんだ」

私は人をいじめて鬱まで追い込んだこともあるけど、殺しは怖くて一切したことがなかつた。

そんなゴミは見た目からゴミな人間だと分かるような状態になつた。

それなのに、この世界の私は見た目では分からないし、本当に殺しをするようなクズだと思えなかつた。

でも、ここに死ぬと自覚したから真実を残していった。それを疑うことは出来なかつた。

実際に両親は死んでいる。

これを見て私は自分がそこまでゴミじゃないことに気づいた。

それで、自分がするべきことが決まつた。

目的は、みんなを守るためにワルプルギスとイブを支配下に置いて、絶対に近づけさせないようにすること。

第1話 イブの支配と災厄の確認

自分の矛盾するような行動を変えるために、私はみんなの目を盗んでイブに接触することにした。

結界を使って完全に気配を消してるから誰にも見つからずに近づけた。

あとはキスをするだけだから、誰かが来る前に結界で階段を作ってイブの頬に近づいた。

そして、そっとキスをして支配下に置いた。

その瞬間、私はイブの力によって自分が強化されたのを感じた。

自分から溢れ出る魔力は、配下になっている魔女の数と力に比例する。

つまり、今ならベテランの魔法少女にも勝ててしまう。

その実感を噛み締めて、もう一つ気にしなければいけないワルプルギスのことを聞くために灯花のもとに向かった。

「灯花、入ってもいいかな？」

ノックしてそう聞くと、灯花が笑顔で迎えてくれた。

「何しにここに来たのかにやー？」

入って扉を閉めると、すぐに灯花はそう聞いてきた。

「ワルプルギスの夜の声を聞きたくて。観測したのは私も知ってるから」

そう言うと、灯花は一瞬固まった。

それから、困惑した表情になりながら機械をいじった。

すると、あのワルプルギスの夜の笑い声が響いてきた。

それを聞いていると、自分の支配下に置いているイブの魔力の部分に、ざわつきが広がるのを感じた。

「これは本物のワルプルギスの夜の笑い声だ。あの見滝原じゃなくて本当にこっちに来るなんて」

「これを聞きたがるなんて、魔女を操るだけじゃなくて他のことにも興味があるみたいだね」

ただ、ワルプルギスの夜の声を聞きたい。そう言っただけ嬉しそうにその声を聞いてただけなのに、灯花には何かを感じ取られてしまったよ。うだ。

「もし、私がワルプルギスの夜を欲しいと言ったら、邪魔者として私を排除するの？」

少しの沈黙の後に私はそう言った。
すると灯花は。

「どうせ、イブの方が気に入るよ。ワルプルギスの夜は次元を超えて到達していたようだけど、イブはそれを食べることで孵化して、さらに上の魔女になるんだから」

と、自信満々にそう言った。

私はその様子を見て、私がどういう人なのかもバレてるんだなと思っただけ、その場は笑って誤魔化した。

確かに、私はそのイブにも興味がある。

あの声を聞いてイブが反応してたのだから、本当にそれだけの呪いを持つていて、それと合わさることで世界は変わるのだろう。

「もしかしたら、本当にイブの孵化で世界は変わるのかもしれない。それこそがみんなの運命の変化なのかもしれない」

「そうだよ。イブが孵化することによって解放される。わたくし達のおかげで魔女にならずに済むんだよ」

そうかもしれない。

でも、もっといい方法が私の力にはあるはずなんだ。

結界を広げて私の『グリーンシードリサイクルシステム』をみんなにも使えれば、私の結界の中で私のグリーンシードを使えばこんなことは必要ない。

そうなんだよ！これが私による運命の変化なんだよ！

今更気付くなんて遅すぎた。でも、まだ間に合う。

ワルプルギスの夜の到着を待って、それも支配下に置くことで私はまた配下から得られる力が変わるんだから。

「そうだね。確実にワルプルギスの夜を得たいなら、私が支配して誘導する。それでイブは100%孵化出来る」

「それはいい考えだね！実際に魔女を操れるのは知ってるから、作業もうまくいくと分かかってて任せたんだしね。だから、ワルプルギスの夜のことも任せよう」

「うん。任せておいて」

裏切る気味でいるけど、中々に灯花から信頼されてるのは心が痛む。

だけど、イブを支配下に置いてる時点でこの計画は失敗する。私が行かせなければ孵化出来ないのだから。

灯花の部屋で用事を終えた私は自室に戻った。

イブを手に入れたのと、ワルプルギスの夜とイブが反応することを確かめられたのは大きかった。

今日の収穫の大きさを確認して、私はあの日記を読みながら数日間の休憩に入った。

魔女の支配と育成が私の主な役割になるだろう。

第12話 初めまして、みかづき荘の皆さん

数日どころか1週間以上も通常作業をして、100体の魔女を支配下に置いた私は、灯花に誘われて環いろは達に接触することになった。

そのタイミングは記憶ミュージアムの少し前、5人がそろってのんきにしている時。

そこで私が魔女を使つてご挨拶をする。

「少し近くで結界を出しておけば、優しいあの人達なら退治に動くと思うんだよね。そこで一番奥に鎮座してればあっちから来てくれるってわけ」

「なるほど。まあ、いずれは会うことになるだろうから、講義のお誘いの邪魔にならない程度で挨拶するよ。余計なことは言わないようにするから安心してね」

私は灯花の提案に乗って早速会いに行くことにした。
フエントホープを出てまっすぐみかづき荘へ。

ゆつくりしながら夜にみかづき荘付近で結界を出した。

使う魔女は、私に1番従ってくれる暗黒の魔女。

出会いがよかったから今でも私は申し訳ないと思いつながら仲良くしている。

一番奥の玉座に座って私は到着を待つ。その間、使い魔達には手を出さないように言っている。

だから、すぐに来てくれると思った。

その予想通りにすぐに来てくれた。

異質な魔女の気配が近くに突然現れれば気になるのは当然だ。

やってきた5人は白黒のお城のような結界の中で、大人しく玉座に鎮座する私を見て驚いた顔をした。

「魔女だけじゃなくて、魔法少女も居て驚いたでしょ」

「当然よ。使い魔も道を教えてくれたし、おかしなことが重なったんだから」

私がああ言うのと七海やちよは面白く返してくれた。

私に忠実な使い魔達は、私の意思をくみ取って早く5人を届けてくれたらしい。

なんてかわいいいちびちゃん達なんでしょう。

「あれは私に従う魔女のおまけよ。うふふ、魔女を操る魔法少女に会えてよかったでしょ。環いろは、七海やちよ、由比鶴乃、深月フェリシア、二葉さな」

私がそう言つてやると5人はさらに驚いてくれた。

その反応を見て楽しんだところで挨拶に移ることにした。

「申し遅れたね。私はマジウスの翼創設後にマジウスになった4人目のマジウス、鳥栖こよみだよ。以後お見知りおきを」

そう言つて玉座を降りて頭を下げてやると、七海やちよはいろいろと理解してくれた様子になった。

「なるほどね。ずいぶんと手の込んだことをしてくれるじゃない」

「理解してくれて助かったよ。あんなに準備したのに来てくれなかったら、ここまでの時間が無駄になるからね」

2人で会話していると、鶴乃以外は全くわからない様子だったから、私はサービスすることにした。

「つまり、あなた達がここに来るように仕込んで挨拶しようとしてたんだよ。そのためだけに魔女も出して、使い魔にも動かないように言つて、夜まで待ったんだよ」

そこまで言つてようやく理解してくれた。

「つまり、挨拶のために罫を張ったと」

「罫とは失礼だね。別に今日は危害を加えるつもりはないからね」

環いろはの失礼な言葉に反論すると、さらに言葉が飛んできた。

「なら、なんでこんなことをしたんだよ!」

「挨拶がしたかったただけなら、こんなまわりくどいことをしなくてもよかったよね」

「魔女を操れるとしても、ここまではするのは無駄だと思います」

フェリシア、鶴乃、さなからそう言われたから、こう返すことにした。

「私がマギウスであることと、魔女をいつでも出せることを教えるためにこうしたの。私がアリナくらいに危険だと思ってくれれば、この先で戦わなくて済むかもだしね。だから、まわりくどくても無駄じゃないの」

不気味な笑みを浮かべながら伝えることで、5人は私を警戒してくれるようになった。

これで内部に敵だと気づかれる確率は減っただろう。

「うふふ、そろそろ帰るね。次会う時は私の魔女達と遊ばせてあげるから楽しみにしててよ」

そう言っただけで私は一足先に退散してから暗黒の魔女に私の後を追わせた。そうして魔女を回収しながら5人を結界から追い出した。

私はこの日の第一接触到成功を感じて、ルンルンと鼻歌を歌いながら帰還した。

その様子を最初に見たアリナは「少し気色悪いですケド」と言っただけで私を少し傷つけたのだった。

第13話 講義後の処理の準備

私は魔女の飼育も任されていて、操作できる魔女達にグリーンフィードを与えている。

その作業をしている時に、灯花が講義に出かけた。

つまり、ここで記憶ミュージアムのウワサが使用されて、鶴乃、フェリシア、さなの3人が洗脳されて連れてこられる。

その時に2人の洗脳をみふゆさんが解くから、そこで私はヒントを与えようと思った。

そうすれば、なるべく傷つけずに鶴乃を返すことが出来るのだから。

「まったく、みふゆさんのヒントは少し足りないんだよ。だから面倒なことになって迷惑をかけてしまう」

そんな独り言を言っていると、部屋の外でねむが休憩に入ったという話が聞こえてきた。

多分、新しいウワサを使ったせいで疲れが溜まったのだろう。

「あの子も大変だね。目的のためとはいえ、命を削ってウワサを作ってもそれを破壊されちゃうんだから」

実際に一つは私が破壊した。

しかも、キレーシヨランダのウワサに到達されるまでにもたくさんのウワサが破壊される。

それなら、破壊される前に回収するのは当然だろう。命を削っているのだから。

私は魔女に餌をやりながらも、地味に仲良くなり始めていたねむが休んでいるのを聞いて、少し心配になった。

だから、私なりの気遣いとして花を送ることにした。

その花は私が出かけた時に買ったもの。

それを白羽根に預けて届けさせた。

しばらくして、灯花とみふゆさんが3人を連れて帰って来た。

チャンスはみふゆさんが洗脳を解きに行く時。
そこを逃せば私が味方であることを示せなくなる。
本来は中立だから、それを見せられないとこつち側になってしま
う。

タイミングを見逃さないようにして、待ち続けてようやくその時が
来た。

「行くのは洗脳を解いたその時」

私はヒントを書いたメモを持って、扉の隙間から中を覗いた。
意外と早く洗脳が解けたから、急いで入ることにした。

「中にいる3人が気になるのかにやー？」

独特の語尾をつけるその声に私は固唾を飲んだ。

入ろうとしたその時に、タイミングよく2人が来てしまった。

原作知識が欠けていたから、このようなことになったのだと自分を
責めた。

「例のベテランと環いろはの仲間だそうね。私は一度会っただけで気
に入っただけから見ただけよ」

「あんな連中のどこがいいワケ？」

「魔文化させれば必ずいい結果になるかも知れないし。あれだけ強く
て絶望しにくいなら、絶望した時に得られる感情エネルギーは想定外
になるよ」

私はそれらしいことを並べてどうか、自分が疑われるのを回避し
た。

それで納得してくれた2人は私に言った。

「なら、ちようどいいから一緒に選びに行こうか」

「次の計画に使うのを1人ね」

2人はなんの疑いもなく私を誘った。

「キレーションランドのウワサか。なら、もう決まってるから付き合
うよ」

そう言ったら、灯花が前に出て扉を開けた。

それで、3人して中に入った。

「ねーねー、まだみんな洗脳は続いているかにやー?」

そう言いながら3人を見ると、見た感じでは洗脳が続いているようだった。

ただ、私は言うつもりは無いけど解くのを見ている。

ここでマグウスの味方をすれば中立を失う。流石にそうするわけにはいかなかった。

「んーんーんー」

唸りながら灯花は誰にするか考えている。

私は結果を知ってるからその様子をただ守った。

「はい、最強さんで決まりっ!」

灯花は鶴乃の前に立ってそう言った。

「アリナ的にも賛成」

「私もその選択に異論はないよ」

3人の同意でキレーションランドの犠牲者は決まった。

「ちよつと待ってください。鶴乃さんに何をするつもりですか」

みふゆさんはよく分からないという顔でそう言った。

それに本来なら灯花が返答するのだが、ここでは私が答えてあげた。

「イブの孵化が近いのにウワサの破壊が止まらない。なら、一気に決着をつける必要があるから、鶴乃にはたくさん殺してもらおうだよ。それでチャラになるんだから」

私の返答に灯花とアリナは満足しているが、みふゆさんは驚きを隠せなかった。

「ほらっ、一緒に行こう最強さん!」

そう言って灯花は鶴乃を連れて行こうとした。

残りの2人のことがあるから私はここで口を開いた。

「そっちはさっさと済ませて置いて、こっちは私がどうするか決めておくから」

そう言うとアリナが反応した。

「その2人を使うのに、グッドなプランがあるワケ?」

「明後日、この2人をあの2人にぶつけるんだよ。仲間に反撃できずにボコボコにされる。そうしたら、魔女化してくれるかもしれない。私の結界の中ならイブの力は届かないから」

そんな提案をすると、アリナはとても楽しそうな顔をした。

「あのベテランと環いろはが仲間にやられて絶望する。それで魔女化してそれをアナタが支配して、今度はこっちの2人を襲わせる。アハッ！ナイスアイデアなんですケド！」

「なら、そっちはこよみに任せるよ」

「うん、任せておいて」

アリナと灯花は私のアイデアを聞いて、本気で私に任せてくれて出て行った。

みふゆさんはマジウスがいることで警戒した。

さて、ここからだ。

第14話 運命の変化とお遊び

灯花とアリナが居なくなつたところで私はホツとした。

そして、演技をやめて本音で3人に接した。

「さて、2人とも洗脳されたフリはやめていいよ」

そう言うと、2人はギクツとしながら演技を続けた。

「何言つてんだよー意味わかんねーよー」

「そんなことより、早く行かせてください」

2人の演技を見てまだまだだなど思いながら、そつと一言言つてあげた。

「私はみふゆさんが洗脳を解くのを見てたよ」

すると、3人して驚いた顔をして、まずいという雰囲気になった。

「安心して、あの時はあなた達の敵だと言つたけど、私は中立の立場で動いてるから。あなた達をこの場で消したりしないよ」

そう言うことでみふゆさんは少し安心してくれた。

「つまり、マジウスでありながらどちら側でもない」と

「そういうことだよ。でも、私はどちらかというところち側に傾いてるから、最後まで手を貸せるとは限らないけどね」

そう言いながら私は二葉さなに近づいた。

「これを受け取つて、次のウワサとの戦いできつと役に立つから」

そのメモを見てさなはうなずいてくれた。

そして、「ありがとうございます」と言つてくれた。

「みふゆさん、私はあまり下手なことをするべきじゃないから、後の手配はあなたに任せるね」

そう言つて静かに部屋を後にした。

自室に戻る途中でまたスリルを楽しんで心が躍つてるのを感じた。

私の今の生きがいは平均台をバランスをとりながら進むこと。

今回のようにバレそうになりながら、誤魔化して突き進むのは楽しくてしょうがないのだ。

「この達成感は、いいわあ〜」

そんなことを呟きながら自室に戻った。
そこで次に自分が動くのはキレーションランドであると予想して
休むことにした。

実際、私はその時まで出番は無かった。

あの後は原作にほぼ沿って進んだ。

そして、私も観覧車に行く時が来た。

正直、キレーションランドのウワサで人が死ぬのは怖い。だから、
早く終わって欲しい。

でも、今ちようど下に環いろは達が到着したばかりだ。

「あれ？私が知ってる状況と少し違う」

よく見てみると本来ならいろは、やちよ、フェリシア、さな、十七
夜、ももこ、この6人しか来てないはずなのに、すでにレナとかえで
が合流しているのだ。

たった一枚のメモが運命を変えて6人から8人に増やした。そう
考えると合点がいく。

そして、原作通りのタイミングで私達は降り立った。

「まさか、2人が逃げられるなんて思わなかったよ」

「アイツらがエスケイプしたのは、みふゆの責任だヨネ。魔女を従え
て容赦なく攻撃するこよみがそんなことするわけないカラ」

「うん、みふゆが失敗した方が可能性は高いよね。こよみなら今頃魔
女化させてるだろうからね」

2人はさなとフェリシアが逃げた責任をみふゆに向けた。

てか、2人の中で私はそんな風に見られてるんだ。

「確かに私の責任です。申し訳ありません」

みふゆさんは申し訳なそうにして謝った。

その様子を見て私は一言かけてあげた。

「みふゆさんを罰するなら私にもしてね。みふゆさんだけに任せた私

にも責任があるんだから」

「この言葉で2人は完全に許す方向に向けてくれた。

「こよみがそう言うなら今回は許してあげるよ」

「だけど、今回だけだから。今度はギルティーになったら許さないカラ」

みふゆさんはあの2人に許してくれるようにしたこと感謝した。

こうしてるうちにあの4人が中に向かおうとした。

それに気づいてアリナが攻撃しようとしたから止めた。

「何で止めてくれちゃうワケ？意味がわからないんですケド」

アリナはものすごく不満そうにして私に怒りを向けた。

それに対して私は不気味な笑みを浮かべながら答えた。

「あのまま行かせればいいよ。どうせ失敗するんだからさ。そうしたらあそこには私の結界も入ってるから、その中で絶望して魔女化するよ」

私は悪魔の笑みを浮かべてアリナにそう言った。

すると、アリナも素敵な笑みで返してくれた。

「アハっ！それはいいね！頑張っても仲間を救えずに絶望して魔女になる。それでビューティフルな魔女が手に入るなら素敵なんですケド！」

「こよみはやっぱりすごい考え方をするね。しかも、いつの間にか仕掛けをしてるしね」

2人はまた私を評価してくれた。

まあ、すでに裏切って場所と助け方をメモに書いてるんだけどね。だから、多分数分で出てくる。

第15話 ウワサの破壊と激おこマジウス

数分で出てくると予想しながらその他と戦っていると、環いろは達は本当に数分で出てきた。

「ウワサを倒して出てくることは想定してたけど、それより何倍も早すぎるー！」

「まさか、誰かが情報をリークしてたワケ？」

「そんなことが出来る人がいるわけないでしょ。あのウワサのことはマジウス以外に知らされてないんだから」

私が犯人だけど、それを棚に上げて演技をした。

まあ、当然内部を疑うだろうけど、そんなことが無駄であることは理解してるはず。

「さあ、これでウワサに巻き込まれた人は無事だよな」

3人であんなことを言ってる時に、環いろははムカつかせるようなことを3人に向けて言った。

「そうだね。本当に腹が立ってむしゃくしゃするよ」

「あれがこんなに早くやられるなんて、バッドすぎてベリーアングリーなんですケド」

「そんなに怒る必要もないでしょ。まあ、私も今すぐに魔女達を全て出したいのを我慢してるんだけどね」

ちなみに、今回はその他の相手をするのに結界だけを使った。

魔女を出すのは最終手段と決めたからね。

「もうこれでお前達の好きにさせないぞー！」

フェリシアがこのタイミングでそんなことを言うと、アリナはガチでキレて声を荒げた。

「黙れキンパツウ！その髪をむしって燃やしてアートのにしてやろうかあー！」

これまでにないほどにキレるその姿に、フェリシアもビビって震えてしまった。

「よしなよ。やるなら徹底的に絶望させて魔女化させるくらいにしな。親が殺されるシーンを幻覚で永久に見せれば、それだけで壊れて

絶望して魔女化するさ」

私もキレたような顔をしてそんなことを言っただけで、助けてくれたことを覚えてるから怖がってくれなかった。

だから、私が目で演技してくれと訴えかけた。

「さあ、もう観念しなさい！あなた達の目論見は崩れたんだから！」

「このまま戦ってもどっちにも利益はありませんよ」

やちよとさなにそう言われた私達は、ただ怒りを中で不完全燃焼させるだけだった。すると。

アラもう聞いた？誰から聞いた？

キレーシヨランランドのそのウワサ

ノンビリ、ダラーツとハッピーになれちゃう

ストレスフリーなテーマパークがグラランドオープン♪

帰りたくなること間違いナシで

いつまでもずーっといられちゃう！

だけど満員のときはアテンションプリーズ

出たくない人はこの世から退場させられるって

神戸市の人の間ではもっぱらのウワサ

まあイイジャーン！

って、ウワサさんの声が響いてきた。

その方向を見ると、久しぶりにあのねむがウワサさんと一緒に姿を現した。

「想定外の事態になって困惑してるみたいだね」

そう言ってからねむは観覧車から降りてきた。

「でも、こよみはこうなることも知ってて実行に移したんだよね。あっちの仲間を使えば確実に失敗する。それを知っててわざと知ってる運命通りに進めたんだよね」

私はねむと暇な時に何度かお茶会をしていたので、そこで問題なさそうな情報を話してしまっていた。

そのせいでねむには結構色々バレてしまう。

「その通りだよ。だけど、この運命通りなら確実にあの日を迎えられる。私達の目的はそこ以外では果たされない」

「だけど、ベストな手段は他にもあったよね。その手段をとっていれば、少しズレたとしても大惨事は免れたと思うんだ」

「そう言われても、この道は確実に目的に到達できるから、安全策を取るならもうこれしかないんだよ」

私とねむは互いの意見をぶつけて喧嘩を始めた。

これに終わりが無いことを知ってるからアリナが割り込んだ。

「平行線にしなければならないならストップだヨネ。それに、いくらなんでも敵の前で喧嘩するのはよくないヨネ」

「アリナさんの言う通りです。ここは一旦退きましょう。いろはさんも、話したいことはあるでしょうけど、ここは見逃してください」

アリナに続いてみふゆさんも援護してくれたおかげで私達はこのまま退くことができた。

ただ、環いろはに情報が渡らないのはデカすぎる。

後でまたサポートする必要があるだろう。

私が今度お茶会に招待しよう。

第16話 裏しかないお茶会

キレーションランド後、私は密かに手紙を書いた。

その時点で一つの運命が変わったことに、私はまったく気づかなかった。

私がすることの後のことだけど、バマミの件と羽根の凶暴化の件が私のしたことによって消えた。

まあ、バマミは後で必ず負けてくれるけどね。

私は環いろは宛にお茶会の招待状と、色々と邪魔してしまったことへの謝罪の手紙を羽根を持たせた。

これでちゃんと届いてくれれば、明日には全てが終わるための序章が始まる。

会場は万年桜のウワサの場所、環いろはなら時間的にそろそろたどり着ける場所。

そこに1人で来るように言った。

当日、その場所に無理矢理マジウスを揃えた。

みんな色々と文句を言ってきたけど、これで終われるならとしつぶ来てくれた。

「本当に環いろはがここに来れるの？」

「僕達しか知らないこの場所に来るなんて、不可能としか思えないことだけだね」

「でも、これで来たなら面白いメモリーを持つてるってことになるヨネ。それはそれで話を聞いてみたいんですケド」

3人は本当に来ると思っていないみたいだけど、私には分かる。

環いろはなら時間通りにここに来てくれることを。

当然、魔法少女に変身した状態で。

「時間通りに来たよ」

「ようこそ。万年桜の下で開かれたお茶会へ。招待状をチェックします」

私がふざけてそう言うと、環いろははそれを私に渡した。

「本物であることを確認したので、その席にどうぞ」

と、空いている席を勧めた。

環いろはは言われるままに導かれてそこに座った。

私は招待状を境界に入れてから収縮させて消した。

「改めて、私主催のマジウスのお茶会へようこそ。今日は楽しんでいってください」

私がそう言っても、やっぱり灯花は不満そうだった。

「なんで環いろははここに來れたの！」

「えっと、この万年桜は私が病院で作ったからだよ」

「そんなはずはないよ。ウワサは全て僕の創造物なんだから」

「やっぱり、環いろはのメモリーは面白いんだヨネ」

ここに揃えてもすぐにうまくいかないのは分かっていた。

だから、私からサービスで情報提供することにした。

「環いろは、私から色々教えるから聞いてほしい」

「はっ、はい」

私からいきなり声をかけられて驚いたみたいだけど、これは重要だから気にせず話すことにした。

「まず、灯花とねむはあんたが知っていることとずれた記憶をしている。その原因は不明だけど、おそらくイブが関係していると思う」

「やっぱりそうなんだ」

「それと、小さなキュウベえであんたは記憶が戻ったかも知れないけど、灯花とねむに触れさせても何の影響もない」

「そんな・・・」

「さらに言うと、妹さんは実在するけど簡単には手の届かないところにいる。私はこの目でそれを確認している」

私はこうやって、真実と不確かな情報を交えて伝えた。

そして、ここで私がしたかったことを仕掛けた。

「あんたが近くで見たいなら、うちに来てほしい。来てくれればさら

に色々教えるし、今まででのことはチャラにしてあげる」

私の勝手な勧誘に3人は私のすることだからと黙認してくれた。

みんな下を向いて。

「ういが居ることを保証してくれるなら、後は自分でそこまで行きま
す。そつちには入りません」

「マジウスになる価値があるあんたなら、すぐに見せてあげもいいの
にチャンス捨てるの？」

「はい。ここでお茶をぐい一緒にできたのは嬉しかったですけど、あな
た達の考えには賛同できませんから」

そうはつきり言われて振られた気分になった私は、少し笑ってから
お茶を環いろはに勧めた。

睡眠薬入りの紅茶をね。

しばらくして環いろはは眠りに落ちた。

「ほんと、バカだよ。私からのお誘いを断らなければ、普通の紅茶を
飲んで楽しくおしゃべりできたのに」

私は環いろはを見下ろしながらそう言った。

他のマジウスもそれを見ながら笑っている。

お膳立ては成功したから、後は最後まで進めればいいから簡単だ。
時間になったら今度は七海やちよ宛に、環いろはを誘拐したことを

書いた手紙が渡される手はずになっている。

それで、ホテルフエントホープに全ての駒が揃う。

そこでまずはバمامィに負けてもらって、役者も整える。

そんなことを考えていると、万年桜のウワサが背後に立っていた。

「悪いけど、ウワサの内容に反するわけじゃないからこのまま連れて
行くね。あと、枝も一本もらうよ」

私がそう言うと、万年桜のウワサは静かにうなずいた。

その枝を一本折って、それを環いろはに握られさせてから私達は彼女
を連れて行った。

第17話 私の活躍の時間到来！

私達はワルプギスの夜を呼ぶのに必要な電波を早急に用意することにした。

私はそれが容易であることを知っているから、最終戦のために用意を進めた。

例えば、私がこの数週間の間には味方につけた羽根達を使って、見滝原組と調整屋とみかづき荘組とその他にするべきことを伝えさせたり。

ホテルフエントホープの場所を七海やちよ達に教えるようにした。

さらに、万年桜のウワサにも仕事を頼んだ。

私は中間に居るからこそこんなことができる。

特に味方につけた羽根達は、色々と不安定になった子達を採用している。

解放とマジウスに不安があるなら私についてこいと言った。

「さあ、準備は万端だ。全てを変えるために、私はここでワルプルギスの夜を捕獲する」

最終戦の始まり、私は何もしなかった。

私が動いたのはフエントホープ戦、あそこでみふゆさんをケガさせないために、私が代わりに処理に出向いた。

もちろん。行ったのは私自身じゃなくて魔女達。

あの子達を全て解放してアリナの魔女とウワサを見境なく襲うように命令した。

「こよみさんの魔女達が、アリナの魔女を襲ってウワサの本体も攻撃している？ 一体、これはどういうことなのでしょう」

みふゆさんもさすがに驚いているだろう。

そうしてくれてる間に私は、原作通りに環いろは達が来るのを待つて、ようやくその時が来た。

「アハッ！ようやく来たみたいなんですケド」

「思ったよりも遅れての到着になったね」

「それは仕方ないよ。私も羽根を使って散々邪魔したからね」

「というわけで、わたくし達の聖堂によろこそ！」

私達は6人をお迎えしながらそう言った。

「みんなで一緒にイブを眺めながらお茶でいかがかにやー？」

灯花はお茶目にそう言った。しかし、それは無視された。

「やっぱりこれがイブなんだ」

環いろははそう呟いた。

ここからは、原作通りに長話が続くから私はその隙に処理に動いた。

それと同時に結界を広範囲に張った。

魔女達でも手こずるウワサ、私は集中して遠隔操作で魔法少女を避けながら攻撃させた。

それでウワサを排除すれば、みふゆさんを瀕死にさせずにイブを解放できる。

ていうか、このままいくとなんとなくなくだけど、私がラスボスになりそうでなんか焦る。

数分かけて順調にことを進めた私は、魔女100体以上と共にフェントホープの外にイブを出すことに成功した。

すると、イブは私を見つめて来たので、早く私の指示が欲しいのだと思った。

でも、まだ早い。その時じゃない。

私は手筈通りにワルプルギスの夜の支配に向かうことにした。

「行かせるか！」

そう言ってももこは私に攻撃を仕掛けてきた。

それをアリナ達が全力で止めてくれた。

「わたくし達の目的の達成は目の前まで来てるんだよ！」

「これ以上の邪魔だては許さないよ」

「こよみはベリービジーなワケ。だから、アナタ達の相手はアリナ達
がするんだヨネ」

アリナ達は敵を全て引き受けてくれて、私がワルプルギスの夜の
ところに行くための道を作ってくれた。

そう、これで全てが終わる。

最悪な運命は絶対に来ない。私が絶対にやらせない。

でも、もしも私がワルプルギスの夜とイブを揃えてしまったら、
気が狂ってやってしまうかもしれない。

イブだけで私は力を抑えないといけないくらいに強くなった。

だから、揃えたら本当にやばいかも知れない。

まあ、止められればいいから突っ走るけどね！

そう思って真っ直ぐにワルプルギスの元へ走っていった。

その間、イブが暴れたりしながらアイツらの足止めをしてくれた。

ただ、ワルプルギスの夜の姿が見えたところで、背後の参京の方で
イブが飛んだ時の揺れを感じた。

もう時間がない。

イブの使い魔にはなるべく穢れを集めないように指示してるけど、
イブ自体が持つ穢れは予想以上に集まって孵化可能な段階まで来て
いる。

そこに私以外の誘導とかでワルプルギスの夜と接触したら、それだ
けでバッドエンドになってしまう。

だから、瀬戸際で抑えないといけない。

第18話 災厄の捕獲と害悪の登場

私は環いろは達がイブと戦ってる裏で、あのワルプルギスの夜に接触しようとしている。

途中で走るのが面倒になったので魔女に乗せてもらって、その姿が確認できるところまで近づいた。

「予想以上にデカい。これじゃあ、私の支配下に置くために魔女達を使うけど、具現化のための結界の範囲外になっちゃう」

イブの使い魔達が動けるようにするのも、アリナの皮膜と私の結界を使用している。

でも、その範囲は高さも含めて決まってるから、十分に高くするとなるとイブの消耗はシャレにならない。

そう思った途端、イブの分の魔力が突然減少した。

多分、時間が結構かかったから、もう拘束されて攻撃が始まったのだろう。

「マジで時間がない。神浜中に結界を張ってるけど、イブがこれ以上やられたら上にあげられなくなる」

そう思った私は支配下に置いてる魔女達の目を使って様子を見ながら、イブを動かして危機を回避することにした。

イブの足りない頭を私で補えば少しは時間を稼げる。

それと同時に結界を広げてワルプルギスの夜を捕獲する。

することが多すぎて混乱しそうだけど、時間がないのだから多少の無理は仕方ない。

「こなクソが！みんなが命削って戦ってるのに！平和ボケしてた私が首突っ込むなら最後まで突っ走れや！」

そう言っ自分に入力ながらワルプルギスの夜を睨みつけた。

まだ少し離れたところをゆっくりと前進している。

それに私は魔女の力を借りずに突撃することにした。

大量の結界を使って道を作りながら、あのワルプルギスの夜を固定する。

動きが止まってる隙にキスをするために私は走った。

当然、ワルプルギスの夜は使い魔を呼び出して私を攻撃させる。それはかなりの広範囲を移動できるイブの使い魔で処理した。

そして、走りながらも次々とイブの操作と使い魔の操作と結界の操作を、切り替えまくってかなり体力と魔力を消費しながら、私は2、3分走ってようやく到着した。

あのワルプルギスの夜は結界を壊そうと暴れてはいるが、頑丈でその力でも壊せない結界によってずっと拘束されている。

だから、ようやくこの時が来た。みんなが大怪我せずに終われるこの時が。

私はゆっくりと歩いて階段状に使った結界を下って、ワルプルギスの顔へと向かった。

その途中でも使い魔に襲われたが、もはや私に群がるハエ。

その程度にしか感じず、余った結界を使ってガードしながら下を指した。

そして、ようやくその顔に到達した。

本来なら別の場所にキスをしてもいいんだけど、このクラスの魔女ともなると顔じゃないと効果が出ない。

それはイブで実は試していた。

だから、ここまで来るまでのみんなの苦労を考えながら、私はその顔に手を触れてからそつと頬にキスをした。

その瞬間、私の中で大変なことが起こった。

それは予想外で、かつてない危機をみんなにもたらすことになる。

「ヤバイッ！みんな逃げてー！」

そう言った次の瞬間には私の意識は薄れた。

そして、目の前に私が現れた。それは死んで消えたはずのこの世界の私。

「よく頑張ってくれました。はなまるですー！」

その私と話してる場所が精神世界なのだと気づいた時には、もう何もかもが遅かった。

「まさか、すべてはあんたとインキュベーターの計画のうちだったの

？」

私に変身したその姿でそう尋ねると。

あの私服姿の私は笑っていった。

「違うよ。すべては私の計画通りです！ 円環システムと悪魔システムとイブシステム、私が断片的にだけ魔法少女になって集めてた情報を使って最善策を導き出したのです」

そう言いながらこの世界のこよみは、黒板を用意してそこに色々と書き始めた。

「まず、あなたに知って欲しいのは、この体には今2人分の固有魔法が存在すること。私は完全消滅したのではなく、謎の力でこの世をまだ彷徨っているということ」

私でも知らないありえない情報が飛び出した。

円環と悪魔のどちらの力が作用しても、魔法少女が死ねば消えるはずなんだ。

それなのに、まだこの世にその魂が残留している。

そんなことがあるはずがない。

そこで、私が混乱していると、この世界の私は一度チョークを置いて私に笑ってみせた。

第19話 鳥栖理論なんてクソくらえ!

この世界の私は私を見つめて微笑みながら変身した。

その姿は白衣を纏った暗殺者のようだった。

「私は親が死んだあの日、キュウベえと契約して殺してもらいました。私の願いは『親が死んで私に親の物が手に入ること』です」

狂ったこの世界の私は微笑みながら、私なら出来ないし出来たら発狂しそうなことを言った。

「あのキュウベえは不運にも事故った私で、さらなる実験をして死者の魔法少女化と、魔法少女に別の魔法少女の魂を入れることに成功した」

そう言うと、また鳥栖は黒板に何かを書き始めた。

「殺しの願いと救いの願いを一つの体に共存させる。それはキュウベえにとつて最高の実験台になったことでしょう。これなら多重人格にも適用できるかもしれないのだから」

黒板に書き続ける鳥栖の表情は狂人のそれだった。

「ただ、あなたがあんな願いでこんなことをするのは予想外だったでしょう。こうなれば感情エネルギーの回収が難しくなる。商売あがったりでしょう」

そう言うってから書き終えたそれを私に見せながら説明に入った。

「鳥飼さん、希望からの絶望の相転移エネルギーがキュウベえが求めるもので、それをあなたなら手に入れられないように出来ることを知ってますよね?」

そう質問されて私は静かにうなずいた。

「でも、ドッペルシステムとグリーンフシードリサイクルなら、絶望のエネルギーを回収しつつ、希望を与え続けることもできます。宇宙を守るシステムはそこにあります」

黒板にはそれをわかりやすく図式した物が、はっきりと全体的に書かれている。

「ただ、ここにシステムの不具合をいくつも書いていますが、いくら考えてもこのシステム達で世界を救えません。なら、あなたが用意して

くれたイブとワルプルギスで終わらせればいい」

そう言う彼女の顔は狂氣的で美しい笑みを浮かべていた。

「もう気付いてるでしょうけど、イブとワルプルギスの夜の因果は結びついてしまいました。あなたの中で配下の魔力が少量入ってそれで結びつきました」

彼女の言う通り、あの時私の中で全ての終わり始まりを告げる鐘がなった。

それは、ワルプルギスの夜からの解放と、イブによる魔法少女の解放だ。

「そこで、結びついた瞬間に私と鳥飼さんの運命もつかまりました。それによつて私は今ここで体に戻ることができたのです」

鳥栖はすごく嬉しそうにしながら私に自慢げに言った。

「しかも、私の固有魔法『空間切断』とあなたの固有魔法『魔女支配』が同時に使えるようになった。これで私はもう無敵です。だから、あなたにはなまるの評価を与えたのです」

その言葉を聞いて本当にまずいと思った。

出会うはずのない運命を結びつけたせいで、出会うはずのない私達まで会ってしまった。

しかも、この体はもともと彼女のだから本来なら私には何の権利もない。

つまり、私の完全敗北で成果を持っていかれることになる。

「そんなのはお断りだ」

私がつつむいてそう呟くと、私はここでフラグを回収することにした。

最初に神浜に降り立った時に思ったこと。

『魔女の回収を邪魔する人は居なくなればいいのに』

本当に私はそう言ったことを後悔した。

なぜなら、目的達成をしようとするせいでこんな人と戦うことになったのだから。

「悪いけど、あなたは運命の結びつきで帰ってこれるのかもしれないけど、そうなる私と私は消えないといけなくなる。だから、あんたにはここで消えてもらう」

私は今までにないほどの怒りが自分の中から湧いてくるのを感じた。

このまま行かせればすでに人を殺してるこの子は、報いを受けてない状態で絶対に暴れ始める。

しかも、ワルプルギスの夜を絶対にイブの所に連れて行ってしまいうに決まってる。

それは絶対に阻止しないといけない。

「あんたみたいなクズは生きてる価値もない。しかも、あの日記も偽装の可能性が濃厚になった。なら、私を生き返らせたのもわざとの可能性が高い」

私はフラフラとしながらゆっくりと、でもしっかりと鳥栖に近づいて言っただけだった。

ちゃんと胸ぐらを掴んで。

「私はまんまとあんたの手のひらの上で踊らされたわけだ。キユウベえはどうせあんたの思惑を知らなかった。あんなのすらあんたは利用してこんなことをした。それを絶対に私は許さない！」

そう言いながら拳に配下達の数と力の分だけ込めて、思いっきりこのクズの顔面を殴ってやった。

その拳の重みは、こいつの思惑で私も含めて狂わされた運命の分だけ増した。

その一撃で鳥栖こよみは、この鳥飼こよみの前から消滅した。

第20話 ジ・エンド

私はめっちゃくちや怒って攻撃したけど、なんで怒っていたかと言うと。

私があいつになることは、キュウベえも元々は予想してなかった。でも、それは次元を超えることがまだキュウベえには実験段階だったからだ。

ちゃんと出来てなかったから、鳥栖こよみのことを把握できないまま私を入れて、入れた後に後悔と予想外の事態で様子を見に来ていたのだろう。

しかも、私が運命をいじることになったのは、この体に入れて日記で何かを感じたからだ。

あの子は最初から何かを知っていて、私をも利用するつもりでいた。

そうでなければ、都合よくあっちも魔法少女だったなんてことはあり得ない。

運命を利用したあの子は私を使って、みんなの運命をかき回した。私とキュウベえがあの子のことを知っていれば、こんなことにはならなかった。

だから、私は怒った。しかも、大切な時に邪魔までされたのだから、なおさら体を取り返そうとしたことに怒った。

「これが私があんたを消した理由だよ」

私はもう跡形もなくなった鳥栖こよみを、拳を握りながら見下ろした。

しばらくすると、私は元の現実に戻された。

すぐに集中してイブや、アリナの様子を確認した。

すると、イブからすでにういちちゃんが救出されて、みんなが記憶を取り戻しているところだった。

つまり、そろそろアリナが毛皮神のウワサを着て暴れ始める。

でも、もう終わり。

全てが正常に戻ったなら、アリナも戻るべきなんだよ。

「だから、イブ。今までありがとう」

私はそう言っただけでイブの命をその手に持って、ギュツと握りしめて終わらせてあげた。

その途端、遠くからイブの鳴き声が聞こえた。

私はそれを聞いていてもたってもいられなくなって、鳥栖こよみから手に入れた空間切断を使って、瞬間移動の要領で一気に移動した。

当然、ワルプルギスの夜はグリーンフィールドに戻してから。

全速力で移動してたったの1分だった私は、着くなりすぐに結界を張ってそこに立ち、イブに触れながら泣き声を混ぜて言った。

「今まで環ういを守ってくれてありがとう。私のために動こうとしてくれたのも嬉しかった。でも、私にはもうワルプルギスの夜がいる。それだけで十分だよ」

そう言っただけで、主人のために動きたいと思っていたイブは、暴れることなく静かに消滅した。

当然、アリナはその様子に激おこだ。

「ふうふうざけるなあああ！アリナのベストアークを消し去るだなんて、許すわけがないんですケド！」

その哀れな姿を見た私は、上からこう言っただけでやった。

「あんたとは仲良くなれそうだったけど、今のあんたを見て幻滅した。もう終わりなのにそれを受け入れられないのはバカのことだよ」

「アリナをあのフルガールと同じように扱うなんて、さらに許せないんですケド！」

そう言いながら、アリナは毛皮神のウワサを着込んで私の前に立ち塞がった。

これを倒せば全ては終わる。

だから、私はみんなにこう言った。

「みんな、私には謝らないといけないことがある。だから、贖罪のためにこいつは私に任せて欲しい」

私がアリナと同じ、あっち側のマジウスでないことをみんなは知ってる。

それで、みんなはアリナとは違うことを分かってくれたから、静かに黙認してくれた。

「みんなありがとう。アリナ！あんたはここで夢から覚めるんだよ！」

「アリナのドリームはまだエンドじゃない！エンドなのはアナタのライフなんですケド！」

アリナと私の力は歴然の差。それでも、私は手加減することなく魔女達を召集して、ワルプルギスの夜も呼び出して一気に終わらせた。すると、気づいたらアリナは皮膜を消して姿を消していた。

原作通りに居なくなるとは思わなかった。

でも、これで全ては終わった。

ういちちゃんも助かって、灯花とねむも記憶を取り戻して、被害も最小限に抑えた。

これで私の役目は多分終わった。

そう思って気が抜けた私は、力も抜けて結界から落ちてしまった。

その後の記憶はない。

第21話 最後の仕事

全てが終わった後、私は灯花の病院で目を覚ました。

その時、私はあまりみんなとは関わりがなかったから、誰もお見舞いなんて来てないと思っていた。

それなのに左右を見ると環いろは、うい、灯花、ねむ、七海やちよ、鶴乃、フェリシア、さな、来ないと思っていた人達がそこにいた。

私の目覚めに気づいた環いろはが医者を呼びに行った。

それで少し診察してもらってから、安静にするなら話すことを許可された。

「なんで、私はみんなと関係が薄いのに来てくれたの？」

そう聞くと、部屋の隅にいたみふゆが姿を見せて言った。

「あなたは何かを知ってるようでしたね。それで私達の運命を変えようとしてくれた。私達は感謝してるんですよ」

あの人がそう言うのと、フェリシアが続けて言った。

「それに、あの時は逃してくれただろ。それで悪い奴じゃないと思っただ」

その言葉にチームみかづき荘は揃ってうなずいた。

その後に灯花達も述べた。

「わたくし達も、あなたがすぐに終わらせてくれてなかったら、今頃どうなってたかも分からなかったし」

その言葉に私はもういいだろうと思っただけで言った。

「灯花達はなんの問題もなかったけど、私がアリナと戦わなかったら、ねむが限界まで戦って車椅子に乗ることになってたよ」

その言葉にみんな驚いてたけど、特に「僕が？」と呟いたねむが一番驚いていた。

「さらに言うなら、フェントホープのウワサを私が倒してなかったら、みふゆさんは今頃が回復した頃であそこには居なかったよ」

みふゆにもあるはずだった運命を伝えた。

「環いろはにも私が招待状を送ってなかったら、みんながあそこまで万全な状態で来ることは出来なかった。しかも、その前のキレーシヨ

ンランドもメモをあげてなかったら、鶴乃はもつと怪我することになつてた」

私は自分の仕事を終えた脱力感から、色々と仕舞い込んでた真相を話していった。

「ワルプルギスの夜もイブも私が早めに支配してなかったら、もつと被害が出てたしここまで楽には終わらなかつたよ」

こう言つていくと、まるで私が運命をいい方に持つていけたように聞こえる。

私にはそう思えなかつたし、あの時にもしも自分に負けてたら、バッドエンドは回避できなかったのだから。

でも、みんなは本当に私に感謝してくれた。

「まあ、私は自分の仕事を全うしたけど、別に善人だからみんなを助けたわけじゃないよ。私自身のゴミみたいな人生を脱却するためにやっただけだから」

まあ、私は前世で多くの子をいじめたし、私は大きくなって逮捕もされた。

だけど、これで許されるなら頑張った甲斐があるよ。

鳥栖こよみは報われなくても、私はこれで報われたらそれだけで満足だ。

私はあの後みんなと色々話した。

そのあとでみんなは帰つていった。

今後みんなは色々と頑張るみたいだけど、私はこの後の運命を知らない。

また私が動くとなると、今度はワルプルギスの夜達の力だけで突き進むことになる。

まあ、こつちで生きていくならそれも仕方ないことだね。

ただ、私のことも心配だけど、アリナと後輩が姿を消したのが気になる。

またどこかでベストアートワークを作りだそうとしてないといけど。

さて、私はイブのカケラを実はまだ保有してる。

そこから神浜の浄化システムを作れば、本来の3人が求めたものが完成する。

ただ、イブ自体の中心が小さいキュウベえになっても、そのシステムがある結界は場所がわからない。

それでも、やらないといけない。

だから、私は力を振り絞って窓に近づいた。

そして、私の予想通りに来てくれた小さなキュウベえに、それを託して完成させた。

このキュウベえがいる限りこの神浜で魔女が生まれることはない。

それに、私がいる限りグリーンシードを使った時の穢れを、私がその魔女を配下してれば私に集められるから、それを浄化して無限に使える。

「私はもう戦いに疲れたから、出来るならサポートだけをしてたいよ」

あんな二つのシステムを完成させてた私を、世界は見逃すはずはないけどね。

しかも、最近使えるようになった穢れの回収をすれば、キュウベえも黙ってない気もするしね。

私は回復したら、また何かをしようと思う。

それまでは静かにおやすみなさい。

第1. 5章 休憩時間 第2.2話 舞い降りた聖なる者

十分に休んだ私は病院から出る支度をしていた。

その途中で私に中から声をかけてくるガキがいた。

「退院おめでとうございませう」

前と違って暁美ほむらの部屋のようになってる場所で、そのガキは魔法少女の姿で大人しく椅子に座っている。

「なんでまだ居るの?」

私がそう尋ねると、鳥栖こよみは微笑んで言った。

「あんな出オチで終わってられないし、私にはまだ役目が残っていますから。このまま消えたらあの人に怒られます」

そう言いながら鳥栖は自分のソウルジェムを差し出した。

「この体には私の魔法が残っていた。なら、この日のために集めた全てをあなたに差し上げます。これが私の役目です」

どう考えたって怪しいけど、仕方ないから受け取ることにした。

そうしないと現実に戻れそうにないし。

「誰の差し金か知らないけど、仕方ないから受け取ってやるよ」

そう言っただけで受け取ると、鳥栖の一部が私に入ってきた。

いや、これは元々私が受け取った大きな力だったのかも知れない。

その力を受け取った私の意識は一時的にこの世界から切り離された。

「もういいんじゃないですか。神浜は終わったんだから、今度は見滝原で救済しましょう」

その声をかけられて私の意識は戻ってきた。

そして、私の本当の役目を思い出した。

「そうね。ここまで荷物を持ってきてくれてありがとう」

「あなたがダメなら横取りするつもりでしたけど、今なら頑張った甲斐があります。これから、この世界をよろしく願います」

役目を終えた鳥栖はこの世界から完全に昇天した。

鳥栖が旅立ったことで現実に戻った私は自分のソウルジエムを見た。

すると、鳥栖こよみから色々と受け取ったことで、私のソウルジエムは紅白に変わっていた。

それと同時に鳥栖こよみの通常魔法の『認識操作』を手に入れた。あと、絶対に他人には渡せない力。円環の理のほんの一部を取り戻した。

その力を返された時、あの日のことも思い出した。

それは私がキュウベえに願いを叶えてもらった後、始まりは意識を失った中での出来事。

「あなたには救える運命がある。私は干渉できないけど、あなたなら侵入できる。だから、私の代わりにみんなを助けてあげて。それは私が干渉できる宇宙のあなたにしか頼めないことだから」

通称アルティメットまどかと呼ばれる彼女は、そう言ってかすかな意識を持った私に力を授けた。

でも、意識がほとんどないから落としてしまった。

それは時を遡って過去の鳥栖こよみに預けられた。

未来に渡さないといけない人が居る。それを魔法少女になる寸前で役目として持った。

そして、あんな願いをして活動資金と邪魔者の排除をしてくれた。つまり、全部仕組まれていたのだ。

この私のために、命をかけて因果が繋がる時を待ってくれた。私の準備が整うのを待ったために、私に日記で認識操作の保険までかけていた。

全ては魔法少女の救いのために。私が役目を果たせるように。

私はすべてを思い出した。

あの子の苦勞の記憶も一緒に入ってきた。

「あなたに認識操作をかけられたせいで、本気で敵だと思ってたよ。ごめんなさい」

私はその場に崩れ落ちて泣いた。

渡すタイミングでないときに繋がった場合、保険で使っておいた認識操作で敵だと思わせて私を怒らせるように演技してさっさと行ってもらおうようにしていた。

そうすることで安全に渡せる今日を迎えたのだ。

そうとも知らないで、破滅の考え方を言う鳥栖こよみにムカついて殴ってしまった。

そんな私には円環の代理なんてできるわけがない。

それでも二人から託されたのだから私にはやりきる義務がある。

ひとしきり泣いた私は、鳥栖こよみの2年も待った苦勞を背負って見滝原に戻ることにした。

ちなみに、鳥栖こよみの記憶を見ると、事故ったときに魔女に襲われてソウルジュエムがほとんどひび割れたことで死にかけてたよ。うだ。

まあ、あそこまで割れたら助からないけど、すぐく間抜けな最後だからそこだけはあきれてしまった。

第23話 新しい住居と同居人

力と記憶を手に入れて退院した私は、神浜でお世話になった人達に挨拶してから駅に向かった。

それで電車に乗って移動してる途中で見える神浜の景色を見て、大変だったけど楽しかったなと改めて思った。

その神浜は少しずつ離れていく。

その電車の中で似合わない格好でフードを被るアリナと、そのアリナを心配する御園かりんがちよこんと座っている。

「なんでこんなところにいるのよ…」

そう思った私は何気なく移動して、御園かりんの横に座った。

彼女は突然移動してきた私に驚いた。

「ねえ、アリナ。久しぶり」

そう声をかけると、アリナは御園かりんを避けてこつちを見ながら。

「アナタ、誰なんですケド」

そう言った。

その言葉に私は驚いたけど、すぐにかりんが説明してくれた。

「アリナ先輩は記憶をなくしちゃったの。だから、今は少しでも責めつきそうな神浜から離れるの」

アリナを心配して慕って、それでいて困惑してる。

そんな様子が認識の操作という概念を操る私には、手に取るように分かってしまった。

「それはいい判断だよ。あのままあそこに居たらアリナは苦しむことになった。生死の芸術家は酷いことをしたのだから。まあ、後輩には優しくかったみたいだけどね」

何も知らない後輩には何も教えない方がいい。

私はそう思っている。

ただ、同じマガウスとして活動してた仲なので、アリナには助け舟を出すことにした。

「アリナ、かりんちゃん、よければうちに来なよ。見滝原だけど私が匿ってあげるよ」

2人は顔を見合わせてから「是非ともよろしくお願いします」と言ってきた。

しばらく電車の中で他愛もない会話かりんとしてるうちに、見滝原の私が最初に来た駅に帰ってきた。

鳥栖こよみの記憶を手に入れた私には、今なら自分が住める家がある。

それは美国織莉子達の通う学校からそんなに離れてない場所にあるマンションだ。

鳥栖の記憶を頼りに私はマンションに向かった。

そして、あの子が借りてた部屋の前に着くと、空間切断で壁に穴を開けてそこから鍵を取り出した。

誰にも入らせないためにこんなところにも魔法を使ってたらしい。壁に鍵をめり込ませるなんて、あの子ならなんとなくやりそうだ。

後で知ったことだけど、鳥栖には二つの口座があって、生活費に使ってるのが300万が入ってる口座で、私のために残したのが2000万も入ってる口座らしい。

後者の口座から家賃は支払われてるそうだ。

中に入った私は、まずリビングで2人に座るように勧めた。

「さて、アリナはどこまで覚えてるの?」

3人でリビングのテーブルを囲んですぐにそんなことを聞いた。

「アリナはかりんが気に入ってたことと、自分が絵を描いてて魔法少女なことしか覚えてないんだヨネ」

多分、あの時私が思いっきり攻撃したのも記憶喪失の原因だろう。

これだけしか覚えてないことを聞くと、私はとても焦った。

てか、認識操作で鳥栖が記憶自体への認識を消した可能性もある。

まあ、どちらにせよ。私が悪いのは目に見えてる。

「そっか。じゃあ、自分が何をしたのかも覚ええないんだ。それなら、記憶を取り戻す可能性も低いから、ずっとここに居ていいからね」

私は鳥栖の記憶の中を今すぐに検索した。

その結果、鳥栖が中から記憶を認識出来ないようにして消したらしい。

つまり、私が悪いのが確定したからなんか冷や汗が出てきた。

それを誤魔化すために私は、かりんの耳元でそっと囁いた。

「私は応援してるよ。記憶がないなら新しい思い出を作ればいい」

私の誤魔化すためのその言葉は、かりんの恋を成就させる手伝いになった。

かりんも変人だから、これでもよかったのかもしれない。

とりあえず、3人で暮らすことになるなら、ルールと戦いで陣形を考えないといけない。

私はまた苦勞が絶えなくなること覚悟した。

第24話 円環の信仰者

見滝原へと帰ってきた私はアリナとかりんと同居することになった。

2人とも私の言うことに従ってくれて、空き部屋が一つしかないので同室で我慢してもらってる。

まあ、かりん的には嬉しいのかも知れないけどね。

「魔法少女に救済を」

私は帰ってきた日の深夜、一人でベランダに出て形だけでも祈った。

それは軍人が無事に役目を終えるための祈り。今は入ってこれない円環の理のためのもの。

「私はあなたの天使です。役目を思い出した以上、私は最後まで突っ走ります」

そうしていると、魔法少女の反応が近くに現れた。

ママさんからメールで言われたけど、最近の見滝原は魔女が減りすぎて内部で戦いが起こってるらしい。

主に呉キリカを中心に戦いの輪が広がっている。

「はあ…せっかく役目を思い出して祈ってるのに。邪魔する人は容赦なく失せろ」

そう言っただけで私は魔女を放った。

作られた魔女の結界の中で、魔女を無視して呉キリカと雑魚が戦っている。

その様子を私は魔女の目を通して覗いた。

そして、アリナとかりんが寝静まつてるのを確認して出かけた。

魔法少女同士の戦いほど利益のないものはない。

だから、私が邪魔をする。

結界に入っただけで私は2人の間に入った。

「何のために戦っているの？これほど無駄なことはないんだよ」

ここで私は運命的な出会いをした。

ここで会った雑魚が後に私達の運命を変える。

「邪魔をするな！こいつは織莉子の邪魔になるから殺さないといけないんだ！」

「私が邪魔になる？くふふ、美国織莉子はどこまで愚かなのかな？」

お互いに暗い目をして戦っている。

そんな殺気溢れる空間にいるのは、正直言つて吐き気がしてすぐに帰りたくなった。

「はいはい！やめなさい！今日のところは私が仲介してあげるから早く帰りなさい」

私がそう言うと、雑魚の方が私に不気味な笑みを向けて言った。

「くふふ、このまま引き下がるなんて見滝原の魔法少女の名が泣くよ。

この小倉真由子、出来るなら最後まで戦うよ」

それに対してキリカも返した。

「見滝原の恨みを晴らすのに、君じゃふさわしくない。私の愛する織莉子こそがふさわしい」

この2人の喧嘩に呆れた私は、しょうがなくワルプルギスの夜を出した。

ついでに円環の力も使った。

「私という天使でも、さすがに救いを与えるのをためらうんだけど。でも、私はすべての魔法少女を救う役目をもらった。だから、助けてあげる」

最強の魔女と神々しい天使の組み合わせ。

さすがの2人も争いをやめて、私とこの子に釘付けになった。

私は普段より白い軍服風の衣装に薄ピンクの翼を生やして宙に浮いている。

その状態で3つのグリーンフィードを取り出して、2人に優しく微笑みながら渡した。

「小倉真由子、それで退いてちょうだい。呉キリカ、美国織莉子にもそれを渡して。そうすれば、私の結界を見滝原に広げて、その中にいる限り無限に使えるから」

私はそう言い残して全ての魔女を片付けて帰った。
天使の姿のまま。空を飛んで。

私が深夜にあんなことをしたせいで、見滝原の魔法少女の間で噂になつているとママに言われた。

ママも私だとは思ってないけど、3人を救ったから本当の天使だと言われてるそうだ。

「これを1人で部屋にいる時に聞かされる私の気持ちとは一体……」

その話を2人が買い物に行つてる時に聞かされた。

「まあ、悪い気はしないかな」

円環の理が見てるかもしれない空に向けて手を伸ばして、私はそう呟いた。

その時、ひらりと羽が落ちてきた。

「そうか、そろそろあの方が神浜の穴を塞がせるんだ」

自分の救済の力を与えてくれた主人に、私は今までならしなかった祈りをちゃんと捧げた。

「天使になるのも自分の内面を変えることがある。私はまた別人として世界に救済を与える」

その私の顔は今までで一番美しく、綺麗に見えたそうだ。

偶然通りかかった小倉真由子には、そう見えて私のことを好きにさせてしまった。

第25話 見滝原から見る神浜

私はあれから度々見滝原の魔法少女同士の戦いの仲介に入った。そして、3日で見滝原の全魔法少女に救済を与えた。

戦場に現れては適当にしながらも、みんなに救済を与えて戦いを終わらせるその姿から、私は『戦場の天使』と呼ばれるようになった。ただ、それでも見滝原の中での戦いは終わらなかった。

その場では収まっても、ママ達神浜擁護派と織莉子達神浜否定派によつて内部の争いが絶えない。

まあ、私達3人はみんながやり合ってる中で、ほとんど干渉せずに自宅でのんびりしてたけどね。

私は学校に行こうにも、別人になってるから行きにくくて諦めた。

そうしてるある日、私は見滝原の魔法少女だから中立派の代表として、それぞれのトップの会談にお呼ばれすることになった。

会場は手紙に同封された地図にある美国邸だ。

私は気が乗らなかったけど、仕方ないから2人を置いて行くことにした。

会場に着くと呉キリカが門番をしていて、招待状のチェックをされた。そして、本物であることを確認したキリカは、あの時のお礼を一言

言ってから私を奥に通した。

部屋にはバママミと小倉真由子がすでに着席していた。

驚いたことに、否定派の席に座るのは織莉子ではなく、突然存在感を強めてきた小倉真由子だった。

「これは謝った方がいいのかな？」

一番最後でしかもちよつと遅かった気がしたから、私は先に来ていた2人にそう尋ねた。

「別にいいわ。来てくれただけで嬉しいから」

「これであなただが来てくれてなかったら、わざわざ話し合う場を用意する意味がなかったよ」

2人はそう言ってくれた。

すると、美国織莉子が私の後ろを通って、空いてる4つ目の席に座った。

それを見た私は急いで自分の席に座った。

「本日は来ていただいてありがとうございます。この会談を主催した美国織莉子です。今日は有意義な話してください」

そう言う和美国織莉子は後のことを私達に投げた。

「とりあえず、肯定派5人の代表として、神浜は不幸な目にあつていたのでからこれはとがめるべきじゃないと言わせてもらおうわ」

先にバママが意見を言った。

それに続いて小倉真由子が口を開いた。

「私は否定派4人の代表として、見滝原も血が流れたんだ。それなのに許すのはおかしくないかな？と言わせてもらおうよ」

この一言に恨みと殺意が入り混じった感情を感じた。

それはとてもドス黒くて直視できないほどの物。

なるほど、これが織莉子を抑えて否定派のトップになった実力か。

「私は互いの意見をぶつけること自体が不毛だと思う。何の利益もないし、神浜とやり合っても勝てるわけもない」

私がそう言うと、2人の矛先が私に向いた。

「そんな意見で逃げられない状況になったのよ」

「私達は決着をつけないといけない。そう言う運命になってるんだよ」

2人が言う中で、真由子は私に火をつける単語を言ってしまった。

「今、運命って言った？運命は少しでも変えられるもの。やり合わない運命は必ずある。無いと言うなら私が書き換えてあげる」

私の威圧感と、変身してないのに見える気がする羽によって、2人は完全に黙ってしまった。

「神浜は放置すべき場所。守る必要も恨む必要もない。あそこに恨み

があるならここで言ってみろ」

その言葉によって真由子がしゃべらざるを得なくなった。

「私達は神浜に魔女を取られた。そのせいで私の親友も死んでしまった。あの廃墟で魔女化したのは間違いない。それはあいつらの仕業だ！」

真由子は震えながら少しずつ怒りの火を大きくして、最後には私にさえその恨みの視線を向けた。

「それはこの子のことかな？」

私は身に覚えがあつたから、その魔女を浄化された魔法少女の姿で出した。

「久しぶり、真由子と織莉子」

この子がそう言うのと2人は同時に立ち上がって驚いた。

その顔にはどうしてこの人がこの子を連れてるのって言う疑問が浮かんでいた。

「この子は私が2番目に味方にした魔女だよ。私の固有魔法が変わって『浄化魔女支配』になったから、今はこうして姿を変えてあんた達と再会させた」

「主人のおかげで今の私があります。奏流きさねにはこの方に使える義務があります。だから、お二人ともさようなら」

せつかく再会させたのに、きさねは暗黒の魔女のグリーンフシードに勝手に戻ってしまった。

それからは私の独壇場となり、私の意見でしばらくは内部抗争だけで済ませるように決まった。

ただ、真由子が見る目はいやらしく、私の全てを撫で回す見方のようになって、途中から気味が悪くなって帰りたくなつたが我慢して終わらせた。

第26話 何かがおかしい愛の始まり

戦場の天使によって見滝原の戦いが正当化された。

毎日のように無限に使用可能なグリーンフシードを使って、マミ達と真由子達がぶつかり合った。

その中で、双方が私を味方につけた方が勝ちみたいになって、毎日のように私の元に魔法少女が集まってきた。

時には買い物中にバママミが来た。

アリナの変化した画風を見学してる時も真由子が来た。

出かけた帰り道には織莉子が話しかけてきた。

自分のしたことだけど、面倒でかなわない。

それどころか、真由子は私をよくお茶に誘うようになったから、それも面倒だった。

そんな風に面倒な日々を過ごしてる中、何の気紛れか私がしつこい真由子のお茶に引っかけってしまった。

「私の誘いに付き合ってくれてありがとうとね」

誘ってきた真由子はとても嬉しそうだった。

ただ、白女の制服を着てることと、きさねを殺した相手を恨んでること、そのどちらも私が私を心配させた。

今の時間は午前10時だ。

「救済を与える私の見滝原での仕事は終わった。だから、休ませて欲しいんだけどな。結果とグリーンフシードで終わりだから」

私の見えない翼は今でも健在のようで、少しでも私が救済だの何だのというのを匂わせると、魔法少女達は感じ取れるらしい。

だから、この瞬間も真由子は少しビクツとした。

それでも、めげずに私にアピールしてきた。

「悪いけど、まだ休ませないよ。それに、私はあなたが好きになったからもう離せないよ」

さすがにこんな風に告白されたことはないので、これが告白に感じ

た私は戸惑った。

でも、あの方が許してくれるなら、死ぬ前につかめなかった幸せを手にしたかった。

「真由子、本気で私が好きなら幸せにしてくれることを条件に付き合ってあげるよ」

私が頬を赤く染めながらそう言うと、真由子は満面の笑みで「はい！」と返答した。

出会ってから1週間で私は、この子に惹かれていたらしい。

面倒だと思ってたけど、それは自分の気持ちに正直になれないだけだった。

その後、私は真由子と初デートを少しだけして帰った。

ただ、今思い返すとこれはまずかったのかも知れない。

私を味方にした方が勝ちになっていたのなら、今はまだその思いに答えるべきじゃなかった。

このせいで織莉子達が神浜に喧嘩を売ることになるかもしれない。

「まあ、どうせ返り討ちにあうさ」

って感じで私は軽く考えた。

でも、事態はこれから悪くなる。

それだけは変えられない。

真由子は帰る途中でとある廃墟に立ち寄った。

そこで巴マミと待ち合わせをしていた。

「早く来すぎたかな？」

真由子がそう呟くとすぐにマミが現れた。

「用事って何かしら？くんだりないことなら帰るわよ」

そう言うマミに真由子は勝利宣言をした。

「こよみが私の恋人になってくれたよ。互いに百合好きだったのが功を奏したよ」

マミはこよみの活躍を知ってるだけに驚いた。

その驚きは半端な物じゃなかった。

「証拠を見せなさい！見せてくれるまでは信じないわ！」

バママミがそう言うので仕方なく、さつき二人で撮った写真を見せた。

「これで信じてくれたかな？これから私達は神浜に復讐する。もう終わりだよ」

そう言いながら魔法少女に変身した。

その姿は真っ黒な着物に真っ黒な刀、セミロングの赤毛、こめかみの辺りに二本の角、そんな鬼だった。

恨みを原動力にしてる分、その力は天使にも多分劣らない。

「さて、静かに放心状態になったところで悪いけど、私はこれから復讐に行くよ。神浜は私で十分だからみんなはおいてくけどね」

そう言つてママミを放置して奇襲を仕掛けに行った。

時間的に早く着いて準備する余裕はあるだろう。

そういえば、真由子はデート中に血の誓いをしていた。

自分を内心では止めてほしいという気持ちがあるのかも知れない。

その血の誓いによって、こよみと真由子は互いに裏切れなくなっている。

例えば、誰も殺さないと約束すれば、それを破ったらすぐにバレるようになっている。

しかも、誓いだから拘束力が意外にある。

これを頼ってるのかも知れない。

でも、今は神浜を目指している。

魔法少女ストーリー 真由子

これは2ヶ月前のこと、真由子は愛や恋が嫌いで他人の恋路を邪魔していた。

しかも、親からの愛も嫌いで全てはじいていた。

愛を受けられない人がいる中で、自分はかなり恵まれてるのにそれを拒否した。

そんな自分が嫌いで変えたいと思った。

そう思っていると、突然目の前に白い生き物が現れた。

そいつはキュウベえと名乗って私の願いを叶えると言った。

それと引き換えに魔法少女となって、魔女と戦う運命になる。

「私はそれでもかまわない！だから『私を愛に素直になれる人』にして！」

その願いで真由子は和風な魔法少女になった。

固有魔法は『ルールを実現させる』というものだ。

その願いが叶った真由子は戦うことと引き換えにして、周りのみんなから向けられる愛を素直に受けられるようになった。

でも、女の子しか愛せないから男子の告白は全て断った。

そのせいで変わってからは撃沈した男子がこよみと付き合うまでに、12人にもなつてそういう経験を積むことができた。

最初の魔女狩りをしたとき、あまりにもトロいせいで助けがないと死んでいた。

その時に親友となることになったきさねと出会った。

きさねは魔女と戦うことも、魔法少女からグリーンフィールドを奪うことにも抵抗がなかった。

真由子には自分にはできないことを彼女から学んだ。

そして、見滝原の中心に立つ4人と風見野の1人がいない時、お互いの市の魔法少女が戦った。

私はきさねの紹介で織莉子達と共に戦って、勝利して風見野の佐倉

杏子と千歳ゆま以外を入れないようにした。

見滝原と風見野はこの時にはすでに神浜のダメージを受けていた。だから、魔女を狩らせないために侵入を防ぐ必要があった。

「私は別にいいと思うんだけどな」

その戦いが終わった時に私がそう呟いたら、見滝原側の魔法少女達はみんな驚いた顔をしていた。

「真由子はあまい。そんなんじや生きて行くことはできない。織莉子もそう思うでしょ？」

「きさねの言う通りよ。あなたの力は素晴らしいんだから、生きるために躊躇することはないわ」

2人にそう言われてもその頃の真由子には、魔女の奪い合いを受け入れることができなかった。

ただ、一緒に戦った1人がグリーンシードを手に入れられなくて、真由子達の目の前で魔女化した時。

真由子はそので何かが変わった。

その子をとむらうために魔女を倒してあげて、そのグリーンシードは形見として真由子が預かることになった。

それ以来、一緒に戦った7人はバラバラになった。

最終的には真由子と織莉子とキリカだけがその中で生き残った。残りは織莉子に殺されたか、魔女化した。

真由子はここまでにかくさんの経験をした。

そして、今では織莉子達とも戦うこともある。

それに、グリーンシードは恨みを募らせながら、容赦なく狩りまくるようになった。

そんなある日、真由子は魔女の減少の原因が神浜であることを知った。

その時、あいつらがいなければ多くの魔法少女が死ぬことはなかった。

た。

そう思ったせいで穢れが一気に溜まった。しかも、大親友のきさねの死も重なっているから、余計に溜まりやすい状況にあった。

その状態でキリカとやり合った時、真由子は鬼になった。

その頃は制御出来てないから完全体じゃないけれど、今ではその力も支配して鬼と魔法少女を行き来できるようになった。

まあ、天使に会った後に完全に鬼になったけどね。

これが真由子に今までであったこと。

第27話 奇跡も拒絶される『ルール』

鬼の真由子は夕方に神浜についた。

神浜はいつも通りに平和だったが、その様子に真由子は反吐が出る思いを抱いた。

所々で魔法少女の反応があるが、そのほとんどが笑顔で楽しそうだった。

街が夕闇に包まれて行く中、真由子は何気なく歩いて神浜の様子を見回った。

そして、人気のない場所で仕掛けることにした。

「私の血を持ってルールを決める。『私が魔法少女を殺したら1人につきグリーンフシードを1つ捨てる。私が殺し損なったら私の天使に救いを求める』実行開始」

真由子は自分の腕を切って血を流して魔法を発動した。

その瞬間、結界のようにルールという概念が神浜の全体に広がった。

それから真由子は鬼の姿のまま、新しいマジウスの翼の1人を殺した。

真由子の真つ黒な刀身は、その血で真つ赤に染まりながらソウルジェムを砕く。

「まずは1人、ルールに従ってグリーンフシードを捧げる」

そう言って真由子はグリーンフシードを細切れにした。

「残り7個。私の死の可能性を上げながら、織莉子達に殺させて、魔法もさせたみんなのために、この恨み後7人にぶつけてやるわ！」

さつき決めたルールはこのためのもの。

人を殺す勇氣より、自分を殺す方が何倍も難しい。

だから、魔法少女を殺すために、自分が魔女になる可能性と引き換えに、殺しをキリカのように簡単にできるようにした。

魔女化するという自殺より、殺しの方が何の躊躇いもないようにした結果が最初の殺しだ。

次に真由子は一気にハードルを上げて、東のトップである十七夜に喧嘩を売った。

「私はドツペルシステムに入らないように、ルールで適応外にする代わりにグリーンフシードを獲得した。覚悟を持って切る私にあなたは勝てるの？」

人氣の無い工事跡地で真由子は本気で戦っている。

「そんなことに何の意味がある？ただ無駄に血が流れるだけじゃ無いか」

至極ごもつともな意見だ。

真由子にも恨みの感情がなければ、こんな無意味な狩りはしなかっただろう。

「その無駄な血が見滝原では流れた。今はこよみのおかげで平和になったけど、私はこの自分の血に誓って恨みを晴らすと決めた。神浜に魔女を取られたせいで私の親友は死んでいったんだ！」

真由子は十七夜に本気で気持ちをぶつけた。

神浜の歴史を恨んだ十七夜には、恨みを抱くということがどういうことなのかを分かっている。

だから、その気持ちに応える気で相手することにした。

「そうか。自分達が気にしていなかった間に、知らぬ間にこちらの人間が傷つけてしまっていたのか。すまなかった」

「そんな軽い謝罪ごときで私が許すわけないでしょうが！」

「本当にすまなかった。自分も神浜の歴史を恨んでいる。だから、恨みたいという気持ちはよくわかるぞ。だから、落ち着いて話し合おう」

ちよつとだけ話して真由子は、十七夜の『神浜の歴史を恨んでいる』という言葉で気持ち揺らいだ。

そのせいで自分が殺し損なったことになって、ルールで戦場の天使を呼ぶことになった。

だから、もう戦えないと思った真由子は、十七夜との話に集中する方向に切り替えた。

「ねえ…もう戦いは終わりでもいいから聞かせてよ。歴史を恨んでるつてのを」

一瞬で戦意を失ったことに気付いて十七夜は武器をしまった。

それは相手が攻撃してこないと信じての行動だ。

そして、心を落ち着かせて今の言葉に返した。

「自分達が住んでいる神浜の東側は、東というだけで忌み嫌われている。それは大人だけでなく子供にも根付いている。今では変わりつつあるが、ただ東出身というだけで嫌ってくる神浜の歴史を自分は恨んだ」

この話を戦意をなくした真由子は静かに聞いている。

その間に日は完全に沈んだ。

「だから自分は神浜の歴史の破壊を願ったんだが、あの頃はまだ青かったんだ。今ではその願いに後悔も感じている」

そこに戦場の天使が降り立った。

和泉十七夜のその背後に。

十七夜が恨みと後悔を語った瞬間に現れた。

「あらら、なんで呼ばれたのかと思ったら、デート中に教えてくれた魔法のルールだったみたいだね」

そう言いながら素早く十七夜に触れた。

それからゆっくりと真由子に近づいた。

「恨みがあるから鬼になったんでしょ。でも、私がいる限りは恨みなんて晴らせない。永遠に恨みを背負いながら私を愛し続けなさい」

今私が真由子に言ったのは、お互いの血の誓いでつけられた認識操作とルールを発動させるための言葉だ。

今ので真由子は復讐できなくなった。認識も変えられたのだから。

「分かったよ。私のかわいい天使さん」

「誓いを守ってくれてありがとう。私の素敵な鬼さん」

ゆがんだ愛で幸せを感じる2人は、あのほむらでも引くような恋愛観を持っている。

そんな2人は戦っても強すぎる。

十七夜は黙って2人を見守った。

そして、真由子は私にお姫様抱っこをされながら空を飛んだ。

「和泉十七夜、私達はあなたの願いは間違っていないと思う。だから、神浜を滅ぼしたくなったら真由子を頼るといいよ。うちに来ればすぐに会わせるからさ」

少し高いところからそう言ってあげた。

その声を聞く十七夜は、悪人のような笑みを浮かべていた。

魔法少女ストーリー　こよみ

付き合うことになってすぐにした初デート。

そこで私はあることに気付いた。

それは私が面倒だと思っていた相手を突然恋愛対象に入れたのが、相手のルールの実現に成功したからだということだ。

相手の魔法を知ってればわかることだけど、デート中に聞かされて魔法を知って理解した。

『お茶に誘えたら付き合える。10回誘ってダメなら永遠に諦める』

みたいなのをルールとして使って、私がついついOKしちゃったからこうなったんだ。

まあ、この子は話してみると悪い子に思えないから、結果オーライかな。

でも、真由子がかもつときついルールを用意していれば、賭けにもなるけど簡単に相手を倒すこともできる。

私の四つの魔法と合わせると、もはやチートなんてものじゃない。

『自分の指一本につき魔法少女を無差別に10人消す』

なんてルールを使われたら認識を操作しても回避できないだろうから、私でも相手するのが難しい敵になる。

ただ、これが対象を決めてルールの難易度を上げたら、確実にターゲットだけを処理することもできる。

なんなら、私の魔法よりチートかもしれない。

私がデート中にそんなことを考えていると、真由子が突然とんでもないことを言った。

「ねえ、私のルールでお互いに守って欲しいのを縛ろうよ」

私は相手が浮気したりしないようにできるなら、やってもいいかなと思って軽い気持ちで乗ってしまった。

デートで寄っていた喫茶店を出て、私と真由子は人気の無い公園で

それを行うことにした。

「私のルールでも縛りきれないものもある。だから、今回はより強力なルールである血の誓いを使うことにするよ。これは、義姉妹とかに勝手になろうとする時にも使われるものだよ」

そう言いながら笑顔で真由子は短刀を取り出した。

それを見て聞いて、私はこの子が私を離す気は無いけど、絶対に守りたいと思ってることを理解した。

だから、その誓いを結ぶ覚悟をした。

「そのメリットは予想がつくけど、デメリットはどんなの？」

そう聞くと、真由子の顔は途端に険しくなった。

「デメリットは、誓いを一方的に破ろうとした時、破ろうとした側と道連れにされて破られた側も死ぬこと。それ故にこの誓いは強力な呪いともいえるんだ」

なるほど、運命共同体となるから、みんなを救う使命がある私を縛れないと思っ、そんな顔をしたんだ。

私は寛容だからそんなことを気にしないで、お互いのために誓いを結ぶことにした。

「その程度のデメリットならなんの問題もない。だから、ここで永遠の愛だっ、て誓いたい気分だよ」

冗談まじりに明るくそう言う私を見て、杞憂だったかなと思いがら真由子は支度を始めた。

「なら、人が来る前に始めよう。これは腕を切ることになるからね」

すぐに準備を終えた真由子は、誓いを結ぶための言葉を教えてくれた。

「さて、始めようか」

真由子のその言葉で誓いの儀式が始まった。

私と真由子は同時に変身して、魔法少女から天使と鬼になった。

そして、私は真由子の短刀を、真由子は自分の刀を、使って自分の右腕を少し切った。

刀と短刀を収めて私達は互いの右腕を前に突き出し、その血が出る

ところを掴みあった。

「我が名は小倉真由子である。あなたに互いに殺し合わないことと、どちらかが助けを求めたらすぐに来ることを誓っていたきたい」

「あなたの求めることを守ると誓います」

これで真由子の求めるものは守られる。

次は私の番だ。

「我が名は鳥栖こよみである。あなたに、裏切りがあればすぐにわかることと、ルールと認識操作による誓いの補強ができることと、互いの愛がいつまでも覚めないことを守ると誓っていたきたい」

私が出した誓って欲しい内容に真由子は固唾を飲んだ。

あまりにも自分より厳しい内容に、真由子は誓いが成功する可能性が低くなったんじゃないかと危惧した。

それでも、これを受け入れないと成功も何も無いのだから、真由子は意を決してあの言葉を言った。

「あなたの求めることを守ると誓います」

そして、互いの手を離して、その手につく血を舐めた。

これでなんの影響もなかったことから、真由子はバランスが上手く取られたと安堵した。

そして、目に見えないけど2人は今誓いの鎖で互いに繋がってる状態だ。

この2人鎖が切れることは互いの死の意味する。

だから、2人とも誓いの内容を守りつつ、生きるところをここで運命に刻んだ。

これが2人が結んだ血の誓いだ。

第28話 怯える鬼と神浜を滅ぼす者

空からベランダに帰宅したこよみは、夕飯のことを2人に任せてから真由子を家に送るつもりだった。

そのつもりだったのに、真由子が袖を掴んで。

「誰もいない家には帰りたく無い」

と言ったので、このまま帰すわけにもいかなかった。

仕方ないから中に入れて話を聞くことにした。

その間はアリナとかりんには買い出しに行ってもらうことにした。

「それで、誰もいない家ってのはどう言うこと？」

誓いの補強でルール『質問には嘘でも答えなくてはいけない』が追加されているので、真由子には黙ってやり過ぐすと言う選択肢はなかった。

「家族は誰もいない。私が気付くのが遅かったから、魔法少女になった一週間後に殺された。飛沫しぶきの魔女の手によって」

その魔女は私の配下の中にもいない。

なら、すでに討伐されたのだろう。

この感じからして、名も知らない誰かの手で。

「それで、今は心細くなったんだ」

「しようがないじゃん。ちようど殺されてから2ヶ月経ったんだから」

私はちようど2ヶ月が経過したというのを聞いて、だから今日は家にいたく無いんだなって理解した。

確かに、親が殺された日に1人で家に居たら、自分が気付かなかつたせいで死なせたと思って、自責の念に絡め取られて苦しんで呪いに飲まれてしまうかもしれない。

だったら、私がすべきことは一つだ。

「ならさ。うちに居なよ。その方が私も安心できるし、毎日すぐに会えるからさ」

私の提案は当然のことながら、流れでそう言ったとはいえ同棲しよ

うと言ってることになる。

だから、本来ならすぐに答えは出ないだろうが、家族の死に責任を感じている真由子には、断るなんて選択肢はなかった。

「家にいると私が呪い殺されそうで怖い。だから、その申し出を断る理由はないよ」

そう言ってくれて（後でアリナとかりんにも許可を取らないといけないけど）一緒に暮らすことになった。

帰ってきた2人にも許可を取れたので、明日にはここに真由子が引越すことになるけど、今日のところは一緒のベッドで寝ることになった。

夕食を終えて少しのんびりして、それから寝る支度をしてベッドに入った。

それで、夜中に気づいたことだけど、寝てる時の真由子は何かを恐れて悪夢を見てるようだった。

恨みを持つて鬼になるよう人が何かを恐れて悪夢を見るなんて、本来ならあつてはいけないことなんだろうけど、私にはその姿が守ってあげたくなるほどに幼く見えるだけだった。

それから数日は何事もなく過ぎていった。

全員学校は登校拒否だけど、アリナの絵とかりんのバイトと親の遺産？で生活を切り盛りしている。

「うーん、最近の出費一番でかいのは、やっぱり真由子の存在だね」
「えっ？私がお荷物状態？」

この家の家計簿をつけていくと、アリナは絵を描いて売るのに少しお金がかかって、かりんは欲がそんなにないからお金がかからない。それで、私は魔女と恋人と仲間がいればいいから何もいらぬのに、真由子はよく買い食いするし意外とお金がかかっている。

「この家で暮らしていいけど、私達の迷惑も考えてよね」

私がそう言うと真由子は頬を膨らませて、ブーってしたきた。子供かな？

まあ、私と真由子には血の誓いがあるから、互いに何かやらかせばルールと認識操作でいじれるんだけどね。

2人で家に残ってそうしていると、ピンポンとインターホンが鳴ったので、私がダサイ私服の姿で出ることにした。

玄関の扉を開けると、そこには十七夜が立っていた。

「言われた通りに、滅びのために頼りに来たぞ」

彼女によく似合うかっこいいファツションで、ダークサイドみたいなセリフ言われると、よりその姿がクールに見えた。

「中に入って、他の魔法少女に見つかつたらまずいから」

中に入ることを勧められた十七夜はそれに従ってなんの躊躇いもなく入っていった。

それでリビングまで案内すると、さっきまでぐでーとしていた真由子が、正座してしつかりと待ち構えていた。

「ようこそ。こちら側の世界へ」

そう言つて真由子は十七夜の話聞く前から、あっちの世界に入るつもりなのを理解して迎え入れた。

その時の2人の顔は、どちらも何かの覚悟を決めた顔をしていた。

第29話 第一回神浜滅亡会議

和泉十七夜が来て、私はお茶を入れながら2人の話を聞いていた。

「やはり神浜は何も変わらない。あんなことの後でも東の待遇が変わらないなら、いつそのこと全てを終わらせるべきだと思った」

「それには賛成だよ。まあ、私がルールを使えば和泉十七夜さんだっけ？あんだでもやれるようにできるけどね」

「いや、自分より君に前に出てもらいたい。その方がみんなを上手く動かせると思うんだ」

「いやだね。私はもう仲間とかはこりこりなんだよ。また仲間や親友が居なくなるなんて耐えられないからね。それに、神浜の東をまとめて戦いを挑むなら、トップのあんだが前に出るべきだ」

私はキッチンで作業しながら聞いてたけど、ずいぶんと物騒な話をしてるなと思った。

本来なら止めるべきなんだろうけど、私にそんな資格は存在しない。

「自分が前に出るといいのはいいが、どんなにまとめあげても東が束になった態度では崩せないぞ」

「そこは私が暴れてやるよ。見滝原を苦しめた神浜には、綺麗さっぱり消えてもらわないとね」

恨みの力で殺気を放つ真由子に、十七夜は内心ビビった。

しかし、私がすぐに出て真由子の頭を小突いたから落ち着いてくれた。

「はい。お茶が入りましたよ」

私はそう言って2人の前に置いた。

私も自分の分を真由子の隣に置いて座った。

「すまないな。すぐに帰るつもりだったんだが」

「本気でやる気ならその程度で来ないでくれる。私は恨みを自分で晴らせないから、あんだにその役目を託すつもりでいるんだから」

まあ、この2人が手を組んでそんなことをしても、戦場の天使が舞い降りて止めるんだろうけどね。

「重ねてすまない。覚悟が足りなかったようだ。だが、今改めて覚悟を決めた。自分にはもう神浜などどうでもいい。だから、君の意思を受け継いで滅ぼすでしょう」

ゲームでありそうでなかった展開。

和泉十七夜が敵になるという最悪なシナリオ。

それが今ここで解放された。

「具体策は？」

「まず、マジウスの翼にいた東のメンバーを自分が集める。それで目的を神浜の歴史への復讐にして、自分が皆に言葉で復讐の火を灯そうと思う」

「真由子より神浜のことは詳しいけど、十七夜さんなら東側のみんなが信頼してるから、先頭に立って動いてくれるならすぐにやってくれと思うよ」

2人の復讐の会議に私は口を挟んだ。

まあ、そうしなくても2人は成功させるんだろうけどね。

「なるほど。なら、その戦いでドツペルを使おう。あれは神浜にとつての希望だから、それを使って攻撃すれば陥落するのに時間はかからないと思う」

「自分の解体のドツペルを存分に活用しろということか。なるほどな。それなら今のドツペルに抵抗のある連中ならすぐにやれるだろうな」

「言っとくけど、それに見せしめは必要ないからね。そんなことしたら奴らが無駄に怒らせて被害を大きくするだけだから」

「うむ。それは十分に承知している」

2人の方向性が決まりそうになってきたので、私も奥の手を貸し出そうと思った。

「2人とも、今回は目をつぶってあげるから、アリナを貸し出してもいいよ。あの子なら今はそんなに戦いたがらないだろうけど、ご褒美に新しい画材を買ってあげるとでも言えばやってくれるよ」

私がそう提案すると、何も知らない和泉十七夜がアリナがこっちにしていることに驚いた。

「驚いたな。あのアリナ・グレイが味方になってるなんて」

「記憶はないけどね。ソウルジェム自体をいじられてるから永遠に思い出すことはないよ」

「それならその行為を素直に受け取ろう」

この後少し話してから、第一回神浜滅亡会議は幕を閉じた。

私と真由子で十七夜を見送ると、姿が見えなくなったところで真由子が声をかけてきた。

「ねえ、どうやって十七夜さんを引き込んだの？」

「真由子が初対面した時にスツと触れて認識操作したんだよ。神浜のみんなが自分を見る目が、嫌ってくる人達と同じように感じるようにしたの」

「たったそれだけで心を揺さぶってこっちに落とすとはね」

「これも私の魔法の一つだからしょうがないよ。それに、魔女を武器にするのはほとんどやめたから、これしか手がないのもあったからね」

「何にせよ。最初からかき乱して遊ぶつもりだったんだね」

「うふふ、そうだね」

私達はそんな話をして2人が帰ってくるのが見えたから中に入ることにした。

第30話 悪夢と神浜合戦

全ての人が救われるべきじゃない。

裁かれるべき人や場所や物があるなら、私はゲーム感覚でそれを裁くために力を使う。

魔法少女はあの方の意向があるから、どんな悪い人でも最後は救われる。

でも、私は円環の使いの1人だから、救う側であつても救われる側じゃない。

それで絶望したいのにできない。

私自身も環わから外れた魔法少女なのだから。

私は夢の中で真っ白なワンピースを着て、水の上に横になりながらソウルジェムを両手で口元に置いている。

その状態で夜空を見上げながら、あんな風に考える。

私はこんなことを考えるべきじゃないのに。

ただ、ここは夢の中。

ニヤリと笑って悪事を企てようとも、あの方にもキュウベえにも咎められない。

だから、いくらでも文句を吐いてやるわ。

私が全てに飽きるまで。

夜があけて目を覚ますと、今日はしっかりと寝れている真由子が横にいる。

私には役目がある。それなのにこんなに幸せでいいのかな？

私がそう思うと、一瞬だけ頭の中に映像が流れた。

それは真っ黒な姿に真っ黒な翼の悪魔だった。

「なんだってこんな時に黒い悪魔が見えるの！」

私は寝起きだけで混乱した。

この世界に彼女が現れる確率は低い。

ただ、キュウベえは『叛逆の物語』で新しい概念が生まれたと言った。

なら、見えない形で動き始めてるのかもしれない。

「せつかく別人になって幸せを掴んだのに、あの方にも悪魔にも私の幸せは奪わせない！」

私は天使になって初めて誰かを憎んだ。

その憎しみが募れば天使も闇へと落ちる。

気をつけなくてはいけない。

「まあ、誰であろうと概念の一つである認識を操る私に、他人が認識できないものは触れることを許されないけどね」

幸せの邪魔をする人は、双葉さなのように他人に認識されずに孤独に朽ち果てろ！

その時の私の顔は、呉キリカのように狂人の顔をしていた。

それを認識した私は、すぐに天使の笑みに修正した。

この子に嫌われたら私は飛べなくなる。

私はそつと真由子の頭を撫でた。うるさいのが隣にいるのに熟睡できるこの子は普通にすごいと思った。

この日の朝、神浜でたった一夜が明けるまでに十七夜は準備を終えて、指揮をとって東からそれ以外の神浜へと攻撃を始めていた。

「全員進め！少人数であろうと、容赦することなければこちらに負けない！」

全体の前に出てそう言いながら、南と西の魔法少女を相手していた。

「もう自分が青かったなんて思わない。絶好のチャンスである今しかやれないのだからな！」

十七夜が先頭に出て戦うことで全体の士気が高まった。

そのまま押し切るつもりでいる。

「二気に行くぞ！」

十七夜が勢いつけてそう言うと、ドツペルを発動して一気に雑魚を狩った。

十七夜達は中央で一般人に見つからないようにしながら戦っている。

他のグループも西と南に侵入して戦いを繰り広げている。

他のグループは大東学院の眞尾ひみかと工匠学舎の千秋理子が率いている。

2人とも十七夜の言葉で操られている。

しかも、この2人も東側でドツペルを使ったのが狙われた理由だろう。

「私達の生活が苦しいのが歴史のせいなら、その程度で人を苦しめる町なんて消えちゃえ！」

「私の夢を壊す可能性があるなら、先に壊しちゃえてアドバイスされたからやります！」

十七夜の正論に聞こえる話術で2人は色々と吹き込まれた。

そのせいで強者として七海やちよや都ひなのと対峙している。

ただ、今回の件には調整屋も深く関係してるから、簡単に負けることはまずない。

しかも、ここで神浜を完全に解体できたらみたまの願いも叶ったことになる。

彼女が手を貸したから神浜が崩れたということになる。

これが正しくないのかは分からない。

でも、東の人間が少なからず他を憎んでるのは事実だ。

そうでなきゃ十七夜も動かないし、七海やちよも本気で相手するはずがない。

ただ、バックには神浜を簡単に救ったこよみがいる。

この真実があれば話は変わるかもしれない。

第31話 アリナのニューアート

神浜での崩壊のための戦い。

中央、西、南、この3点でぶつかり合いが起きている。

始まってから2時間後にアリナとかりんが到着した。

「アリナ！なんで、あの時わたくし達の目の前で確かにやられたのに」
この戦いで西側に加勢している灯花は、突然現れたアリナに驚きを隠せなかった。

「アリナ、アナタのことなんて知らないんですケド」

「そんなはずないよ。わたくし達は確かにマギウスとして一緒に行動してたんだもの」

「マギウス？それも知らないんですケド。もしかして、昔のアリナの知り合いだったりするワケ？」

灯花はアリナのこの反応と英語を使わないことに混乱した。

「アリナ、この人は前に仲間だった人なの」

「そう。あんな絵を描いてた頃のお仲間に出うなんて最悪なんですケド。今はあんな暗い作品は描かないで、生命に満ちた明るい絵を描くんだヨネ」

「だから、恋人のアリナとアリナ先輩を一緒にしないで欲しいの！」

ますます灯花は混乱した。

あんなことをしたアリナが心を入れ替えた？

いや、そんなことがあるはずがない。

つて感じで頭の中を思考が回り続けたけど、その途中で答えが見つかった。

「まさか！アリナの記憶がなくなっちゃったの！」

「ご名答。アリナはかりんのそばで目覚める前の記憶がほとんど無いんだヨネ。残ってるのは名前がアリナ・グレイで魔法少女で絵を描いてたってことくらいなんだヨネ」

「信じられない。神浜を破壊で作品にしようとしてたあのアリナが、記憶をなくしたら恋に素直になって、誰かの言うことも聞くようになるなんて」

アリナは本当に記憶をなくして別人となった。
そのせいで戦い方だけじゃなく、自分を反映するドツペルにも影響
がでている。

「うるさいんですケド。昔のことなんて一切思い出したくない。あんなの黒歴史以外の何ものでもないんだヨネ。だから、それを知るアナタ達は邪魔なワケ。私の熱情に焼かれて心を壊すといいんですケド！」

そう言いながらアリナは新たなドツペルを神浜での発現させた。

それは熱情のドツペル。その姿はチョコレート。

主の中に目覚めた愛を象徴するこのドツペルは、バレンタインのよ
うに愛に溢れた日が増えることを一緒に願っている。そして、死に過
剩に反応して愛の無いものを徹底的に排除しようする。

そのドツペルは出されると、溶けたチョコをばらまいて攻撃をし
た。

愛が足りない相手には高温の熱情でその体をやけどさせた。

しかも、チョコがまとわりついて動きも悪くなる。

「ここで焼かれるようなら愛が足りない証拠なんだヨネ。さあ、アリ
ナが愛をテストしてあげる」

広範囲にチョコをまいて多くの魔法少女が、長くその高温で苦しめ
られた。

だが、このチョコの雨の中で灯花達はまったく攻撃を受けなかつ
た。

「どうしてわたくし達には当たらないの？」

アリナの近くにいるのは、灯花、ねむ、みふゆ、うい、笛姉妹とそ
の辺の雑魚だった。

「なるほど、アナタ達は一定以上の愛を持ち合わせてるみたいだヨネ。
一体に何に対して愛を持つてるのか気になるところだけど、前のアリ
ナと違って優しいカラ。絵の題材になれるアナタ達は何があっても
傷つけないと約束するんだヨネ」

「だから、わたしとアリナはここを離れるの。他の人達は容赦ないと
思うけど、わたし達は元々南の魔法少女だから言われなければこんな

ことはしてないの」

2人は伝えたいことを言うと灯花達を放置してどこかに行ってしまった。

それを見送ることしかできなかつたけど、これ以上の被害が出なかつたのはよかつた。

ただ、アリナの冷めることのない熱情のチョコレートを浴びた他の子達は、一部は死ぬ前に脱出できて重症でも助かつたけど、半分以上がそれで苦しんであの世に行った。

アリナは前よりも中身が良くなつた分、力が増したような気がする。

それを空から見ていたこよみも思っていた。

第32話 神浜への救済と逃走劇

一般人にはあまり被害が出ないように、私の魔女結界も貸して戦いがより激しくなる。

今の和泉十七夜にとって一番邪魔なのは魔法少女達。

その排除は私にとって良くない。

でも、やる気を出させたのは私だから何もできない。

「手を貸すんじゃないやなかつたかな。キュウベえに頼んだ願いは回収するべきと思ってるんだけど」

十七夜の願いを具現化すると神浜の滅亡になる。

それ以外で彼女の願いが叶うことはない。

私が空から見てる間にも次々と被害が拡大していった。

さすがにこれ以上はダメかなって思った時、相手側の七海やちよ達も仕方なくドツペルを使い始めた。

しかも、使えない人達は例の仲良し3人組の『回収』『変換』『具現』の力によって穢れがなくなり、また戦えるようになって一気に攻めていった。

「へえー、やるね」

私が感心していると、ものの数分で決着がついた。

今回の戦いを起こした十七夜はやちよ達によって捕らえられた。

「くっ、まさか自分がしくじるとはな」

武器に囲まれて身動きが出来なくなった十七夜は、テレパシーで助けを求めた。

すると、八雲みたまがすぐさま出てきて彼女を回収して逃走した。

逃走先はこの戦いで目立ち始めた謎の魔法少女のところ。

その子は十七夜の近くにあるビルの上でワープ用の魔法陣を展開している。

「すまない。八雲」

「これは私達の願いを叶えるための戦いよ。戦える主犯がいなくなったら終わりだから、私が助けるのは当たり前でしょ」

そのビルの屋上に着くと、みたまは抱えていた十七夜を降ろしながらそういう話をした。

そうしていると、謎の魔法少女が近づいて言った。

「みたまー！十七夜ー！ゆかりのワープは準備完了してるんよ！見滝原で匿ってもらうなら急ぐんよ！」

巫女みたいな衣装の金髪少女、倉野ゆかりの魔法は長く持続できない。

だから、早く来るように促して、空から降りてくる私にも使わしてくれた。ついでにアリナとかりんもそれで帰宅した。

このゆかりは『瞬間移動』が固有魔法で、戦場でも短距離を移動しまくって攻撃していた。

逃避のドツペルを使えるので、本来はこの程度の人数以上を逃すことができるが、居場所がハッキリと分からないと出来ないので諦めた。

今回の戦いで神浜をやらなかった十七夜とみたまは、多分今後はアリナのように指名手配みたいな状態になるだろう。

まあ、これも私の認識操作を十七夜にして、それをみたまにも影響させたせいだから、責任を取って全力で匿うことにした。

まあ、私にかかれば全魔法少女がおもちゃになるんだけどね！

概念の一つ、認識を人は認識出来ない。だから、概念と呼ばれて存在するけど見えないものとなる。

「さて、ここは4人で既に狭いから、3人は別の場所を探そうか。私の責任もありますから、最後までお付き合いするよ」

私の借りてる部屋に7人が揃ってるところでそう言った。

真由子はみんな少なくとも擦り傷くらいは作っているので、何が

あつたのかを理解してテレビを見ながら放置してくれた。

十七夜とみたまはあまり知らないゆかりの方を見てから、仕方ないねって感じで顔を見合わせてうなずいた。

「自分達のミスでこうなったのに、すまないな」

「まあ、この子が全ての元凶なわけだし。匿ってくれるのは当然だと思っただ方がいいわね」

私は気がついたらみたまにソウルジエムを触れられていた。

これで記憶を読み取って私が何をしたのかも知ったのだろう。

「あつ、これはマジでやばい？」

「ううん。別に気にしてないわ。それどころか私達の願いを腐らせないでくれたから、ありがとうの方が大きいわ」

やっぱり八雲みたまさんはくえない人だ。

私が認識の操作でアリナを壊したこと、十七夜さんの憎しみを増幅させたこと、そのついでにみたまさんも憎ませたこと、その全てを知ってなお認識を変えることなくそんなことを言う。

これは身近に最悪な敵が出来た気分だよ。

まあ、すぐにアパートでも探せばいいか。

魔法少女ストーリー　ゆかり

倉野ゆかりは東の魔法少女の1人。

今回の神浜での戦いにおいて初めて表舞台に姿を現した。

元々は神浜の外で魔女との戦いで危険になったときに助ける仕事をしていた。

フェリシアのように契約成立したら、魔女が強かったりするときにはワープで脱出させる。

当然、自身も戦えるので戦闘にも参加する。

そんなやり方をしてるので『脱出屋』と呼ばれている。

今回の戦いにゆかりが参加したのは、十七夜に復讐のための戦いが始まると言われたからだ。

最初は断ろうとしていたが、自分も東の扱いに不満はあったので、永久に雇ってくれることを条件にバックにいるこよみと契約した。

「私に逃げられない場所なんてないんよ!」

これが口癖で、キュウベえに頼んだ願いもこれにつながる。

『私を大嫌いな全てから逃して』

これによつて魔法少女になったせいで、今では家族からも逃げて、学校からも逃げて、家の当主の座からも逃げた。

全てから逃げられるようになったけど、二つのことから逃げられなかった。

こよみの天使の目と、神浜の歴史の2つ。

まあ、大東学院の生徒である以上、みたまと十七夜の2人からも逃げられなかっただろうけどね。

全てから逃げて逃したゆかりの過去を見るなら、魔法少女になった2年前の出来事。

仲の良かった子が目の前で魔女になったことが重要だろう。

当時は一般人だったけど、友達の魔女化を目の当たりにしながら、この子を助けたいと思つて魔法少女になった。そして、たった1人で挑んで退治に成功した。

その後は神浜を転々とした後に外に出て行つた。

イブの問題が起きてる時は、風見野で活動していた。

そこで佐倉杏子ともすれ違つてはいる。

ただ、自分がこのまま逃げ続けるのはいけないと思つてしまったのが運の尽き。

結局は友達の前見のグリーンフシードを持って、神浜に帰ることになつてしまった。

そこで神浜の若い魔法少女達を助けて回つた。

でも、やっぱり魔女化の運命からは逃げられず。

仕事中に何人かの魔法少女の魔女化に立ち会つてしまった。

「これしきのことではくじけんよ！」

と言つて、冷酷に対処して魔女化した子の仲間の前でも、平気でぶっ倒してグリーンフシードをわざと渡した。

「魔女化するのが私達の運命なんよ。それでも生きなきゃいかんよ。それで、それは仲間の失敗の象徴だから、その子の十字架を背負つて生きる覚悟をせんよ」

て感じで独特の喋り方でみんなにゆかりが失敗を背負つてると同じように、自分達が助けられなかった仲間の分まで生き続けろと伝えている。

傭兵みたいな存在ではあるけど、悪い人ではない。

ただ、グリーンフシードとかを報酬で提示すれば、満足がいく量を提示されればどこにでも行つてしまふのが悪いところ。

それでも、ゆかりはその辺の何も知らない魔法少女と違って、真実を知りながらそれから逃げて2年も生き続けたベテランなのだ。

2年前の友達の魔女化、ここまで何度か体験した依頼主の魔女化、神浜の東の待遇、大東学院の希望との共闘、それらが今のゆかりを形作っている。

今後はこよみのもとで活躍することだろう。

第33話 準備完了

私は今背後に十七夜、みたま、ゆかりの三名がいる状態で不動産屋に来ている。

この3人は一緒でもいいと言ってってくれるので、うちからそんなに離れてないところで、十七夜さんの手持ちで払える家賃で探している。

それはすぐに見つかったから、後は3人に任せて私はアリナの様子を見に行くことにした。

アリナは神浜での戦いでドッペルを発現させた。

それは、その魔法少女の感情が限界を超えたと言っても過言ではない。

だから、過去の自分の作品を破壊しようとするかもしれないから、今は注意深く様子を見る必要があるのだ。

「かりん、アリナは大丈夫？」

アリナは自分の工房で絵だけじゃなくて、彫刻とかにも手を出している。

過去の自分の絵にはそれを買うだけの価値があった。

ただ、1人は心配なので空いてる時間に様子を見るようになりんに頼んでいる。

バイトはニート生活をしようとした真由子に無理やり行かせている。

「今のところは問題なさそうなの。でも、前の先輩よりアリナの方が危なっかしいの」

ずっとそばで作業を見てきたかりんが言うんだから、そうとう価値観で悩んだりしてるんだろうね。

こうなったのはぶちまけた熱情と、今の自分より命がテーマの前の絵の方が価値があると言われたこと。

今の作品と昔の作品を出品して、オークションのサイトで今の自分が負けた。

アリナ・グレイを抜きにしても、異常な命の絵が愛溢れる奇抜な絵に勝ったという事実が、今のアリナを深く傷つけて没頭し続ける状態にしたのだ。

神浜での戦いに行く前に、自分の作品が売れたからチエックしてあの結果だった。

その腹いせに熱情のドツペルで大暴れした。

それからあんな調子で、あれから丸一日経ったのにまだ引きずって描き続けてる。

「どうしてなんですケド！アリナの絵の方があんな狂気に負けるはずがない！まだまだ愛の探求が足りないなら、お前ら人類全てを盲目にして、アリナの愛の素晴らしさを焼き付けてやるんですケド！」

完全に前のアリナと一緒にだ。

自分が作りたい物を作って、壁にぶつかると何をするか分からなくなる。

「落ち着きなさいな。それじゃあ、前のアリナと一緒にだよ」

そういうと、アリナは固まった。

「納得がいなくて暴れるのは前と変わらないワケ？」

「そう、全く変わらない」

私がそう言っただけだと、アリナは落ち着きを取り戻した。

「それはそれでムカつくんだヨネ。だったら、落ち着いて自分の表現の幅とかをよく考えた方がいいヨネ。前のアリナにはないものが今のアリナにはある。それが愛と理解なんだカラ」

前と違うのはそれだけじゃなくて、自分の間違いを認めて直せることだね。

それが前のアリナとは大きく違う。

直感で動くのではなく。何が自分とかりんにとって最適化を考えて絵にするようになった。

「うーん、絵に詰まったら版画か彫刻に変えようとかな。このままやってもらちがあかなそうなんだヨネ」

そう言っただけ、全てを片付けて彫刻に切り替えた。

ほとんどのタイプの作品を作れるようになったのも、前のアリナとは全然違うところだ。

作品の幅が広がるのは、表現の幅が広がることに繋がる。今のアリナなら、すぐにでも前のアリナを越すだろうさ。

安心した私はかりんにまた任せて帰ることにした。

次に自分達がすべきことはまだ分からない。

でも、今回までで色々なことの準備はできた。

神浜の崩壊、見滝原の滅亡、他にもやらないといけないことがあるけど、とりあえずは安心できる場所と仲間と家族の確保ができただけで満足だ。

私の認識操作ならみんなが離れることはない。

まあ、明日以降はしばらく何も無いといいな。

幸せは長続きしなくても、短期間でも平和が続けばいいと思うよ。

私の今の目的はみかづき荘的なものを作ることだったんだよね。

これで一応は一旦の区切りだね。

次はこのメンバーで何かしたいところだよ。

第2章

第34話 新たな問題の予感

走馬市には死神と呼ばれる魔法少女が存在する。

その街は神浜から見滝原からも電車を使って30分はかかる場所が存在する。

その死神が自分の縄張りを出て見滝原にやってきて、バママとやり合っている。

「この強さ。一体あなたは何者なの？」

「私は死神。それ以外に死にゆく者に名乗る物はない」

ボロボロになったママに死神は、黒いロングヘアとスーツのような衣装と大鎌を持ってそう言った。

満月の夜に月をバックに立つその姿は、座り込むママにも美しく見えた。

「さあ、ここで死ぬか情報を吐くか、斬る前に決めてもらおうか」

口を覆う大きなマスク越しにそう言う死神の目は、まるでそこにいるママの死が見えなかった。

その理由はすぐに分かった。

「悪いけど、ここで死ぬわけにはいかないのよ。大切な後輩達が待ってるからね」

ママが下から笑みを浮かべてそう言うと、死神は大鎌の刃をママの首に当てた。

「これでも逃げられるというのか？」

死神らしい低音で澄んだ声はママへの殺気と共に届けられたが、残念ながら裏に隠れている彼女には届かなかった。

「その程度なら楽勝よ」

ママがそう言うと、次の瞬間には死神の目の前から姿を消した。

そして、今度はママの方が離れて月をバックに立った。その隣には暁美ほむらが立っている。

「言ったでしょ。大切な後輩達が待ってるって」

その声と一瞬で消えた事実には驚きながら、死神は振り返って言った。

「なるほど。君一人ならダメでも、仲間を頼れば死なないわけだ。うまく考えたものだ。しかたないから最後に名前を聞かせてほしい」

「私はバママミよ。あなたも名乗りなさい」

「私は川越ヒガンだ。ひさしぶりに獲物を取り逃がしたからな。できるなら覚えてほしい。そのうちリベンジさせてもらうからな」

「覚えておくわ。私も助けがなかったら死んでたからリベンジしたいからね」

互いにそう話すと、その場を去る前に火花を散らしていった。

ママミはその後すぐにほむらの時間停止を利用して遠くに離れた。

死神のヒガンはそれを確認してから電話をかけた。

「あつ、申し訳ございません。久しぶりに取り逃がしました。でも、どうやら噂の天使はここにいます。グリーンフィードを相手が使ったとき、その穢れがどこかに飛んでいましたから」

この戦いで得た情報をヒガンは誰かに報告している。

「はい。はい、分かりました。引き続き見滝原で情報収集いたします。この調子で必ず天使を見つけて我々の助けになってもらいましょう。消えた走馬市のために」

意味深なことを電話相手と話し終えると、大鎌を右手に握りしめて夜空に跳ねた。

魔法少女特有のあり得ない身体能力で月夜を跳ね回って、ヒガンは目的の天使を求めて見滝原を捜し回った。

ただ、遊び人の天使でもそう簡単に見つかることはない。

なにせ、夜は静かに休んでいるのだから。

こんな幸せな夜の邪魔をされないうために結界を張っている。

何重にもなってる結界の中の天使がばれたら、鬼との連携で邪魔者を排除することになっている。

それにしても、神浜の戦いから二週間が経ってまた問題が起きた。

魔法少女、特にこよみはこのようなことに巻き込まれないといけな

い運命なのかも知れない。
また起こる問題にこよみはどう動くのだろうか。

第35話 死神襲来!

走馬の死神は今日も暴れる。

少なくなつた見滝原の魔法少女達を次々に襲つて、大きな翼を持つ天使を探すヒガンは、ついにその天使に接触する。

「その魔法少女、私の質問に答えてもらおうか」

アリナのところから帰る途中で、私は電柱の上から声をかけてきた死神と鉢合わせしてしまった。

「悪いけど、そんな気分じゃないんだわ。他をあたつてちよ」

そう言つて通り過ぎようとする、スツと降りてきた死神に後ろから大鎌を首に当てられた。

「そういうわけにはいかないんだ。天使を探してるから、見滝原の魔法少女全員に聞かなければいけない」

自分がその天使だけど、これはバレない方がいいと思つて真由子を呼んだ。

そんなに距離は離れてないからすぐに来てくれるはず、血の誓いの追加で互いに危険を感じたら呼べるようになってる。

「答えてもらおうか。貴様が天使の居場所を知ってるか」

「答えたくない。てか、私に答える義務はない」

「なら、仕方がない。殺しの許可は出てないから怪我だけで済ましてやる」

そう言つて死神が大鎌を振りかぶると、そこに真由子が間に合つて攻撃を受け止めた。

「私の彼女を傷つけようとするなんて、勇気あるじゃない。正体を知らずにやったのなら、ただの命知らずだけどね」

笑顔の真由子はほつといたら余計なことを言いそうだったから、テレパシーで正体について言わないように釘を刺した。

「なるほど、死なない未来が見えたのは、邪魔が入つてかわされるからか」

『死なない未来が見えた』こんな言葉を天使の前で言つてはいけない。

キュピーンとアンテナに引つかかれば、面白そうなことが起きるま

でしつこく付きまとう。

それが今の天使だ。つい最近そうなった。

「アハハ！面白そうな聞いちゃった！」

そう言うのと、ついさつき真由子にバラすなど言ったのに、自分から変身した翼を出して見せた。

「お探しの天使は私だよ。それと、あんたが頼れる鬼もそこにいる」
楽しそうな天使がそう言うので、仕方なく真由子は隠しているツノを出した。

最近では見つかるのはやばいと思つて、真由子はツノを隠して、こよみは翼を隠すようにしている。

ツノはルールで条件が揃ったら出るようにして、こよみは自力で通常状態と天使状態を使い分けている。

「ほう、私を騙して逃げようとしていたのか。まあ、相手の正体と探す理由が分からないと怖いだろうからな」

正体が分かったヒガンは大鎌を下げた。

そして、天使と鬼に頭を下げて言った。

「頼む！無礼は謝るから助けてほしい！消えた走馬市を探し出して、消した犯人を懲らしめてほしい！」

長身の魔法少女が頭を下げるその姿に、真由子はこれはまずいと思つたけど、ワクワクが止まらない私は話を聞きたくなくなった。

固有魔法とセットで聞く価値があると思つたのだ。

こうなったら戦場の天使はたまらない。

家に死神を入れて、アリナとかりんが帰ってくる前に話を聞くことにした。

時刻は午後4時だ。

「それじゃあ、話を聞かせてもらおうか。固有魔法と事情をね」

私は天使なのに悪魔の笑みを浮かべながらそう言った。

すると、死神には自己紹介とついでにとあることを言ってきた。

「私は川越ヒガンで『相手の死の未来』が見える。それで、私達の産まれて住み続けた走馬市が突然消えたんだ。それで各地を回って情報

を集めていたら、神浜の事件と見滝原の天使の話聞いて、あなたなら助けてくれると思ってきた」

私はそれを聞いてよく分からないことが出てきた。

それは神浜の事件、消えた走馬市、この2つだ。

神浜の件が外部に出る確率は低い。関係者が当事者が言わない限りドツペルが噂で出る程度のはずなのだ。

さらに、走馬市なんて場所は这个世界に来てから一度も聞いたことがない。

これはとても楽しめそうだ。

「言っておくが、私には主がいる。その方の命令も受けているが、そろそろアリナ・グレイに勝手に接触してる頃だ。でも、悪いようにはしない」

私はアリナの名前が出るまでは楽しそうにしていたが、今調子がよくないアリナ接触されるのは嫌だったから、私は苦笑いになってしまった。

そんな状態でもヒガンの話を聞くことになった。

第36話 アリナのスランプとお嬢様

1人で絵を描き続けるアリナ。その工房に1人の少女が現れた。「あれれ、アリナさんが一人にいるよ。最近のスランプっぽかったのにそれでいいのかな？」

集中してたアリナも侵入者がいたら排除するしかなかった。

それで入り口の方を向くと、目の前にその相手が移動していた。

「あなたの傑作、スランプが治って出来たら買わせてよ」

「アナタ、誰なんですケド」

「これは失礼。私は走馬市の魔法少女、霞原シノブと言うのよ。ちよつと用事があつてここに来たの」

スランプのこと、魔法少女のこと、仲間にしから教えてない工房の場所、まだ納得のいく傑作が出来てないこと、彼女を怪しむには十分なくらい知りすぎている。

アリナ専用アトリエである『愛の工房』には、入り口に一般人侵入禁止と書かれているボードが立てられている。

それなのに入ってくるのも怪しい。

そんな怪しむアリナを置き去りにしてシノブは勝手に話し始めた。「あなたの作品はいくつか落札したんだけど、まだ自分の世界を作り切れてないと思っただよね。それで、あなたのところの天使とお仲間とあなたに有意義な時間をあげようと思っただの」

この話も怪しきはあるが、自分の作品評価してくれてる人だから黙って話を聞くことにした。

「消えた走馬市の搜索を天使に依頼して、あなたには求める愛をドツペルで探したらどうかと思うの」

アリナは他の情報には食いつかなかったけど、ドツペルには反応した。

「詳しく聞かせて欲しいんですケド」

アリナがそう言うと、シノブはうつすらと笑みを浮かべてから続けた。

「私達十数人の出身地である走馬市は突如として消えた。そこにはキユウベえから力を盗って神浜の真似をした魔法少女がいたんだよ」
そこで一度切って自分が座るための椅子を取りに行った。

ある日のこと、キユウベえから三人の少女が力を奪った。

お嬢様が『増殖』の力を。

天才が『規律』の力を。

片目の少女が『連携』の力を。

奪った後は神浜と同様に小さくなってからキユウベえは行方をくらませた。

そんなことを気にせず三人はみんなのために力を使った。

まず、増殖の力で二人の魔力を増やして、それを受けた片方が規律で土地とその出身の魔法少女に魔女化を消してドツペルを組み込み、もう片方がそれを走馬市全体に連携して広げた。

それによって走馬市は救われた。

しかし、数日後にその三人は意味深なことを言って姿を消した。

『私達がしたことはパンドラの箱を開ける行為だった。そのせいで他の街に迷惑をかけた。だが、箱には希望が残っている。それを忘れてはいけない』

それを片目の少女が連携で伝えた。

その翌日に私達は気がつくまで走馬の外にいた。

私と親友のヒガンは見滝原の親戚の家で目を覚ました。

そして、私達はネットで走馬市のことを調べて、SNSで他の走馬の出身も大半が外に追い出されたことが分かった。

でも、あれは夢じゃない。実際に私達にはドツペルがあるのだから。

そこであつたことと、なぜドツペルがあるのかを話してくれた。

そして、シノブは自分の執念のドツペルを出して見せた。

その姿はメイド。主の整理つかない感情を引き受けて、主の求める世界を完成させるために執念を燃やし続ける働き者。でも、行き過ぎる時があるのがたまにキズ。

「こういうことがあってドツペルが使えるの。すでに天使にも頼んでるんだけど、あなたの作品はお気に入りだからスランプから立ち直ってもらうために、走馬市の搜索とドツペルの使用を頼みたいんだよ」ドツペルを背後に控えさせたままそう言うシノブは、意地悪っぽくアリナに笑みを向けている。

それに対してアリナは真剣な顔で返した。

「アリナはその依頼を受けてもいいんだヨネ。実際スランプだし、アリナの熱情のドツペルをどこで知ったか知らないけど、そこを見つかるついでにスランプから立ち直れるなら一石二鳥なんだヨネ」

「それじゃあ、走馬の搜索と最高傑作の作成をお願いしていいんだよね！」

「ここまで聞いたからには受けてあげるカラ。明日までには準備を済ませるから、明後日にここに来て欲しいんだヨネ。一応ここがアリナ達のアジトみたいなものだから」

そう言いながらアリナは立って戸棚に近づいて開けて、その中にある色々な資料と大量のグリーンフィードを見せた。

調整屋の物とこよみのコレクションをしまっている。

「それと、今度来るときは隠し事をしない欲しいんですケド。走馬のお嬢様」

アリナは隠し事である物を見せながら、予想はついていたことをシノブに微笑んで言った。

そう言われてシノブは「善処します」と言ってから、席を立ってアリナに頭を下げて出て行った。

これで準備ができた。

走馬組は天使とアリナに接触できたから、これで天使組の7人を動かせる。

こよみは神浜の戦いの後に正式に3人を味方につけたから、天使が

動く決めたら全員が動く。

死神とお嬢様が上手くできたらこそ得られた結果だ。
ちなみに、ヒガンはシノブと同じくらいの時にこの話をした。

第37話 走馬市への侵入作戦！

走馬の2人組が接触してから2日後、アリナの工房に9人が揃った。

それまでにみたま達にも事情を説明して、こよみのアンテナに引っかけたからという理由で、天使組が満場一致で首を突っ込むことになった。

しかも、全員が色々な目的で参加するから、ただの人助けにはならないのがこいつらの特徴だ。

「2人のことは聞いたけど、一応ソウルジエムを調べさせてもらうわね」

みたまがいつもの調子でそう言うと、シノブとヒガンは許可してくれた。

それであたまが触れると、いつも以上に濃い記憶が見えた。

「確かに走馬市は存在するみたいだけど、正確な場所は記憶から消されてるわね」

これで位置が分かればいいと思ったけど、やっぱり当事者でもダメだった。

「私は自分が走馬市で希望を作った3人の1人なのは覚えてるんだけど、後の2人が突然私に別れを告げて消えたんだよね」

「シノブ様、政清様まさきさま、コトハ様、この三名が走馬市でドツペルを広げた張本人ではあるのですが、私もお二方の行方については記憶にありません」

2人の記憶はあてにできないと思ったこよみは、仕方なく天使の認識操作で一時的に記憶を認識させて、それをみたまに読み取らせた。「場所は分かったわ。途中から歩きにはなるけど、駅は見滝原からでも行けるみたいよ」

その場所を詳しくみたまに聞くと、ゆかりがそこならワープできると言っただけに変身して発動した。

走馬市の一番近くの駅に移動すると、みたまは読み取った記憶に従って道を歩いて行った。

そして、走馬市に続く道の手前に行くと、道は途切れてその先が森になっていた。

「この先にあるはずなんだけど」

「八雲の記憶違いじゃないか」

「まあ！かなちゃんそんなこと言うなんて信じられない！」

こよみ達は消えた道を見つめているが、その端っこでバカップルが喧嘩を始めた。

みたまと十七夜はゆかりを証人にして、あの後新しい住処で勝手に付き合ひ始めた。その詳細は三人とも恥ずかしがって教えてくれなかった。

「これならこよみがどうにか出来るの」

「これはかりんの言うとおりでヨネ」

「こよみ、彼女からの頼みじゃなくてもやってくれるよね」

「ここは頼むんよ」

走馬の二人は静かに見守り、バカップルはみたまの機嫌を取って、残り四人はこよみを頼った。

これはやるしかないと思っただこよみは、天使の姿になって認識操作を自分達にかけた。

すると、今まで森だったものが街に変わった。

「これは私以外の誰かに認識を歪められてた。そのせいで森に見えてたみたい。しかも、私以上の力で世界から隔離してたみたい」

みんながこよみの方を見て驚いた。

あの超危険な天使以上に存在を消せる者がいるなんて。

そう思っているのもつかの間、走馬市の内部から複数の魔力が感じられた。

「行っておくけど、この先は私の認識操作をかけてなければ森に見えてるよ。だから、私達に何かあっても助けは来ない。しかも、ここまです出来るやつがいる。それでもやれる自信があるなら私達について来て」

こよみが真由子と走馬組と一緒に一步前に出るとそう言った。
その背中を見て、自分達は覚悟が出来てるといふ様子で残りも一步前に出た。

9人が先に進むと、一切人気ひとけのないシノブ達の故郷に着いた。

二人には記憶があるからその景色を懐かしそうに見つめている。

「あれからそんなに経ってないけど、ようやく帰って来れたんだよね」
「はい。私達の世界から消えたふるさとです。二度と戻れないと思つたのに、こんなにあつさり戻れるなんて」

二人はここに戻るまで1ヶ月もかかっている。だから、帰れたことに感動している。

だが、天使組はあつさりとしすぎているから警戒した。

しかも、入り口より魔法少女の魔力が強まった。

警戒を解くわけにはいかなかった。

「とりあえず、ここから近い方の家に案内して。そこでこれからどうするか考えるよ」

そう言われてヒガンの方が近いからと、彼女がみんなの前に出て案内してくれた。

そこは普通の家だった。そこに9人が揃った。

そこを拠点にすることに決まった。

第38話 神浜の問題は大きなものだった

あっさりとは走馬市に着いてヒガンの自宅を拠点にした一行は、次にどうすればいいのかを考える必要があった。

外には複数の魔力反応があるから確かめる必要もあるし、ドツペルの用意をした3人のうち2人も探してみる必要もある。

「走馬市の魔法少女達に伝えた政清の最後の言葉は、私にも知らされずに言われた言葉なんだよね。その真相を確かめに行つて私も姿を消したことになったんだ」

「だから、もしかしたら今回の犯行理由には、元々仲良くなかった走馬市の内部の問題があるのかもしれない」

次の行動に迷っていると、走馬組はそう言った。

「元々仲良く無かったワケ？」

「自分達に詳しく話してくれ」

アリナは自分の作品のために知るべきことがある。

十七夜は神浜でのことがあったので、同じように分かれてるんじゃないかと思つて聞いた。

「シノブ様の代わりに話しますが、走馬市は元々『葬魔市』と書くように魔法少女と魔女が多く倒されていました。それを直球な字から同じ音の『走馬市』に変えたのです」

ヒガンはシノブの顔色を見てから、代わりに詳しい説明を始めた。

「ここは北、中央、南に元々分かれていて、今では魔法少女の願いで仲良くなっていますが、昔のあの人がいなければ今もぶつかっているはずです。ドツペルをここでも使用できるようにした3人はこの三つ全てに分かれていました」

「ただ、中央の走馬中央学院は優秀だったので、出身に関係なく入る人が多かったんだ。そこで私達は出会つて、ある日学校の屋上でキユウベえから力を奪つた」

「北の政清様、中央のコトハ様、南のシノブ様、三名が揃つて希望のマギアという組織を魔法研究部で作りました。活動目的は魔法少女にとってより良い世界の実現方法を探ることでした」

ここまででは2人とも少し笑顔で話してくれてたけど、突然2人の顔が曇った。

「だけど、私達は途中でその目的を達成したらどうなるのかを理解してしまったんだ。パンドラの箱は政清が勝手に言ったことだけど、まさにその例えがぴったりだったんだ」

「私はよく知りませんが、全ての魔法少女が魔女化の運命から解放されたら、キュウベえは敵になるかこの星を捨てるかとかの数パターンの行動をとることが予想されました。それは里見灯花いわくよくないそうです」

「だから、希望のマギアはマギウスの翼と連携しようとした。でも、残念ながら絶望の魔法少女によってその道は閉ざされた。これが原因で内部のぶつかり合いが戻ってきて、自分達の意見を通そうとし始めた。それ以降は思い出したくもない」

2人の口から出たあり得ないこと、出てこないはずの人の名前、こよみが悪いように言われていること、謎が余計に増えてしまった。

「なるほど、つまり内部の問題は魔法少女の行く末で、私とうちの灯花も悪いことをしたわけだ。それについては謝るよ。ごめんなさい」

当時はマギウスで魔法少女の救いの邪魔になってしまったなら、こよみにも非があると言える。

しかも、ドツペルやキュウベえのことを教えてくれた灯花との繋がりも消してしまったことになる。

恨まれても仕方ないからこそよみは真剣に頭を下げた。

2人は理解できてなかったので、みたまが捕捉した。

「この子がその絶望の魔法少女で、4人目のマギウスで灯花ちゃんの仲間だったのよ。内部に潜入しながら徐々にダメージを与えて潰したの」

そう聞いてヒガンの方が変身して大鎌をこよみの首に当てた。

「そうか。全てを引っ掻き回すのが貴様のやり方か。随分と酷いじゃないか」

その目は憎悪で真っ黒に染まっていて、いつでも殺せると意思表示

している。

だが、その手をシノブが震えながら握って止めた。

「この人は確かに憎い。でも、神浜をあれて救えたのなら、私達も最後の希望にすぎるしかない。魔女を使って内部からむしばむのも、天使の力で人を救うのもこの人の勝手なんだから」

そう言うシノブの目にも、こよみへの憎しみがあつた。

マジウスの翼がなくなって、灯花の記憶も戻ったから走馬との繋がりが消えた。それは神浜を救うために偽善的行為をしたこよみのせいだ。

こよみさえいなければ、キュウベえから奪ったいくつかの力で世界を変えられたかもしれない。

キュウベえが居なくても宇宙を救えて、魔法少女も救えたかもしれない。

2人が神浜と見滝原と違って恨むのは仕方ない。

でも、本当に消えた走馬市を元に戻したいなら、こんな天使でも頼るしかない。

「悪いと思ってるから言わせてもらうけど、今回の一件に南は関係ない。やったとすれば北か中央で、共犯の可能性もある。友達が敵でも耐えられる覚悟がないならやめな」

正体もバレたことだから天使の皮をかぶった化け物は普通に進めることにした。

主のくれた役目は全うするけれど、その過程に関してはマジウスの時と同じように進めようとしている。

2人はこの人を信用として、首を縦に振った。

第39話 助っ人ママミ!

走馬市の問題に影響を出していたのかと思うと、妙に自分が悪人ように思えるようになったこよみは悩んでいる。

「確かにキュウベえそのものなら世界を変えられる。回収、変換、具現、増殖、連携、規律、この6つならそもそもキュウベえが必要なくなる。まあ、その繋がりを無くした私のせいで出来なくなっただけどね」

自分が悪いんだよね。分かっているよ。つて感じになつて完全にヘソを曲げてしまった。

「でも、まだどうにかなるかもだからね。政清つて人が言つたパンドラの箱の絶望は『魔女化が無くなるとその分他の場所でキュウベえが動くこと』で希望は『キュウベえの力を奪つてるからまだ可能性があること』だと思うんだ」

責任を取ろうとして機嫌を悪くしながら、こよみはこういう考え方をした。

それで何かを思いついた。

「あつ、そっか。また私がいけないんだ。私は何をするか分からないからシノブを安全な場所に避難させる必要があつたんだ」

その言葉で走馬組以外は理解した。

この天使は死神のヒガンでもどうにもならない存在で、もしもこの天使の目的の邪魔を無意識にして怒らせたら、走馬市が魔女で更地になる可能性もある。

この天使ならやりそうだからこそみんなが警戒する。

それを分かったアリナ達は呆れた顔をこよみに向けた。

「この件はこよみにすつこんでもらつた方が良さそうなんですケド」
アリナがそう言うのと仲間達は全員で賛成した。

これでこよみは今回の一件から外されて、この家で様子を見るだけになった。

こよみは内心で寂しいとこの時久しぶりに思った。

ポイ捨て状態になったこよみを抜きにしていくつかのチームに分かれることになった。

様子見のチームと、例の2人の捜索チームと、調べ物をするチーム。それに分けようとした時、外で銃声が聞こえた。

窓を開けてみると、少し離れたところで戦いが起きていた。

その銃声に聞き覚えがあった真由子は大急ぎで加勢しに向かった。

行ってみると巴ママミが雑魚に絡まれていた。

「雑魚みたいだしさつきと片付けなよ」

真由子は大丈夫そうだと思うと、屋根の上から見下ろして偉そうに言った。

「言われなくても分かってるわ。だから、これで決める！」

助けに来た真由子を気にしながらママミはいつものものを出した。

「ティロ・ファイナーレ！」

いつもの一撃で雑魚を一掃すると、真由子の近くに来说言った。

「どうせ大人数できたんでしょ。隠れ家に連れて行きなさい」

その様子から後輩を連れてきていないことを察して案内することにした。

アジトに戻ると、一応ママミは歓迎された。

ベテランで油断しなければかなり強い。

本気の天使とも全力でやっていいなら、手数も使って互角にやりあえる。

「そんなママミが来た理由は分かってるよ」

部屋の隅に追いやられたこよみは、その体を小さくボールのようにしながら言った。

「ヒガンに一目惚れしたんでしょ。私には経験があるから分かるよ」

凶星を突かれたママミは頬を赤く染めて恥ずかしそうにした。

「へえ、私のことが好きになったのか。なら、死神の目に死の予兆を見せないと約束できるなら、気に入ってから付き合っただけよ」

普通ならそんなことを言わないが、まるで紳士のような死神女だからそんなことが言えた。

月夜の戦いを忘れられないマミは「はい」と言ってしまった。てか、どう考えてもストーカーだよね。

ここまで盗聴してついでにきた可能性が高いんだから。そう考えるとこよみはゾツとした。

そのマミも入れて3チームに分けることになった。

相変わらずボールのこよみは隅っこにいる。

「アリナがチーム分けするけど、真由子、かりん、シノブが様子見。マミ、ヒガン、アリナが搜索。みたま、十七夜、ゆかりが情報収集。これで決定だから」

アリナがそう言うと、いきなりそのチームごとに分かれてアジトを素早く出て行った。

こよみは気配を殺してここに潜むことになった。

今回の件はできることなら早く終わらせたい。

だから、一気に進める。

第40話 走馬の天才魔法少女学者

アホの子を置いて行った3チームは、それぞれ近くにいる魔法少女の偵察と、例の2人が居そうな場所の搜索と、この街の歴史や調整屋がないかの調べ物で、南の外に向かって走った。

アリナチームは最初っから大本命の走馬中央学院に向かった。

あそこで色々が始まったのなら、その希望のマジアの部室が怪しいと考えたのだ。

ヒガンの案内で部室に入ると、誰もいなかったがかすかに魔力を感じた。

「どうやらここに誰かが居たみたいなんだヨネ」

「説明は受けたけど、いまだに信じられないわ。こんな風に魔法少女が学校で部活を作って活動できてたなんて」

真面目に調べるアリナと、見滝原中学ではあり得ないことに困惑するママと、何かを考え込むヒガンでバラバラになった。

「まさか、走馬を守るためにこんなものを用意したのか？」

ヒガンは部活の活動記録を見つけてうなづいている。

それが気になってアリナも覗くと驚くことになった。

「えっ？部活の活動記録なのに、コトハの規律変更内容が記載されているワケ？」

意味不明な行動にアリナは頭を抱えた。

そんな様子を無視してヒガンはその内容を指差した。

「走馬は無いものとして扱い、南と私達に反発する魔法少女は外に出す。そして、一般人は記憶を変更して外に出す。と書かれている」

いきなり不穏な空気が流れた。

やっぱり共犯で走馬市を隠したのかもしれない。

「この土地は私達によって魔法少女の希望となった。神浜の浄化システムと違って動かせないので、隠さなければ天使以外に見つかっても厄介なことになる。とも書かれているようだ」

さらにヒガンは部活の活動記録から不穏な記述を見つけた。

「なるほど、これはもしかしたら別の終わり方もあるかもしれないヨネ。こよみの予想だと自分だけが敵になりかねないと言ってるけど、これだと他も敵になるみたいなんだヨネ」

アリナは冷静に考えてそう言った。

「つまり、私達のような魔法少女も解放の外にいるから、それを求めて土地を奪いに来るかもしれないと思ってるってことね」

マミも理解してそう言った。

「でも、走馬市の魔法少女は外に出てもドツペルに変更されてるはず、なのにこの街を守るってどういうこと？」

ヒガンのこの言葉で2人も確かにとまって悩み始めた。

これだと共犯かもしれないけど、何かを守ってるようにも見えてくる。

うん？何かを守ってる？

それを守るのにこよみとシノブとその他が邪魔だとすると？

これを考えてマミの頭には、マギウスの翼のイブが思い浮かんだ。あれもマギウスが必死になって隠していたものだ。

同じように隠していたとすると、非常にまずい状況なのかもしれない。

「誰かの命を犠牲に何かを得ようとしてるなら、止めるべきだと思うんですけど」

アリナがそう言うと2人も賛成してくれた。

3人が完全に敵になる発言をすると、空間が歪んで学校の地下と思われる空間に連れてこられた。

3人が驚いて辺りを見回すと、突然目の前にパツと玉座が現れた。そこには、ヒガンが尊敬する人の1人、規律のコトハが鎮座している。

「ちよつとここまで来るのに急ぎすぎじゃないかな？もつとゆっくりしていきなよ」

そう言うコトハは玉座から立つと、生活感たっぷり謎の地下室の棚に近づいて、小さな背で背伸びしてティーカップを取り出した。

そして、すでに沸かしているお湯を用意して3人に尋ねた。

「紅茶は飲めるよね？」

3人は無言で見つめているだけだったが、コトハは気にせずにお気に入りの茶葉で淹れ始めた。

「まあ、普通のテーブルと椅子もあるし、お茶でも飲んでゆっくりしていきなよ」

天才と言われるコトハは玉座のある自室がそういう本で埋まっていた。

だから、誰でも一眼で彼女がコトハだと分かる。

「おっと、ヒガンは知ってるけど客人は知らなかったね。改めて挨拶しよう」

コトハは礼儀正しく2人の方を向いて挨拶した。

「私は走馬市一しのめの天才と言われている『東雲コトハ』だよ。シノブとヒガンがお世話になったようだね。これにはサービスしないといけな
いかな」

コトハは柵ねむのようなゆったりした話し方でそう言った。

その笑みは里見灯花の方に近い。

コトハ扉の無い換気されている空間で、3人を閉じ込めて話を始める準備をした。

逃げられないと悟った3人は話を聞くしかなかった。

第41話 走馬の眼帯女剣士

みたまチームは例の3人の家を搜索していた。場所は途中で鉢合わせした仮面をつけた魔法少女から聞き出した。もちろん、聞き出したのは十七夜だ。

最初に訪れたのは南のボスのシノブの家。

豪邸ではあったけど、残念ながら聞いた話以上の収穫は無かった。

次に行ったのは中央のボスのコトハの家。

普通のマンションではあったけど、様々な資料が乱雑に置かれていた。

その中にはワルプルギスの夜に関するものや、キュウベえの過去からの資料や、半魔女に関する資料もあった。

それらをみたまは何かの役に立つと思って回収した。

次に行ったのは北のボスの政清の家。

名前が蔽ついただけに家も古い感じだった。

その家の奥に進むと、魔法をかけて守られている襖ふすまがあったので、チヨチヨイといじって開けて中に入った。

すると、真つ暗な部屋の中で1人、蠟燭の火だけを灯して本を読む少女がいた。

神浜の魔法少女は他よりも察知するのに優れていたりするので、みたま達はすぐにそれが片目の少女『伊藤政清』だと分かった。

「おっ、ようやく最初の侵入者が来たか。うちの仮面をつけた手下から聞いているよ。ドツペルも使いこなしてるそうじゃないか。さすがは神浜の魔法少女と言ったところかな」

政清は変身した姿で本を読んでいたので、その本を閉じて刀を取った。

左利きなので右手で持って左手で抜けるようにしている。

七五三のよう可愛らしく小さな体で着物を着るその姿は、みたまに

は痩せ細って弱々しく見えた。

「貴様が政清か」

「ほう、誰から聞いたか知らないが、よくぞこの暗闇で判別できたものだ。褒めてつかわす」

時代劇でしか聞いたことのないような言葉を使う彼女から、シノブ達が言っていたような言葉が出るとは思えなかった。

しかも、片膝ついて刀を持つ姿は、もはや武士のそれだった。

「褒美をやるわけにはいかないから、かわりにこれで我慢してくれ。私の秘密の一つだからな」

政清はそう言うのと右目の眼帯を外してその有様を見せた。

それはみたま達では理解できないような沢山の傷をつけられた拳句に、医者に縫い付けさせて封じられた目だった。

「これを見て吐かないとは。もう少し蠟燭の本数を増やすべきだったかな。まあ、死にゆく貴様らには無駄だけどね！」

冗談を言ったから刀を抜いて仕掛けてきた政清は、一直線にみたまの首を狙った。

その攻撃が当たる前にゆかりが2人を掴んで瞬間移動した。

「おっとっと、取り逃したか」

政清は小さいながらも素早く斬りつけていたので、これで瞬間移動がもう少し遅ければ完全に切れていた。

「あの瞬間移動の子。私が標的を瞬間的に変えた時、すぐに対応してたけど、こういう相手との経験もあるのかね。まあ、一瞬のことだったし、そう遠くへは行ってないか」

そう言いながら政清は自分の刀についた血を、指でスツと拭って舐めた。

その目は殺人鬼の目に似ていた。

どうにか逃げ切ったゆかり達は瞬間移動で距離を取るのをやめて、隠れられそうな廃墟に身を潜めた。

「ちっ、まさか瞬間移動で負けるとは思わなかったんよ」

そう言うゆかりの右腕から血が流れている。

それを見てすぐにみたまが止血したおかげで、大量出血で倒れなくて済んだ。

「まさか、探していた人が敵として現れるとはな。しかも、聞いてたのと全然違う雰囲気で」

「それも気になるけど、ゆかりは私達の家族みたいなものよ。ここで死なせるわけにはいかないわ。一旦戻るわよ」

ゆかりをみたまが背負ってそう言うと、突然背後に魔法少女が現れて気絶させられた。

十七夜も当然の如くやられた。

そして、3人はその魔法少女達によって何処かへと連れ去られた。

第42話 走馬の腹黒お嬢様

真由子チームは様子見で走馬市を見て回っていた。

仮面をつけた魔法少女は、希望のマギアに手を貸してくれる『下っ端』と呼ばれる協力者らしい。

その下っ端は全部で100人はいるようだ。

これはシノブの下っ端を抜きにした。あの2人のを合わせた人数になる。

「あの下っ端がいるとなると、あの2人は敵なのかもしれないね」

シノブは悲しそうな目で下っ端を見つめている。

そうしていると、下っ端に見つかってしまったのでシノブが危機を回避してくれた。

派手なドレスの衣装で屋根の上から、増殖の魔法で分身を作って相手の目を誤魔化した。

大量の分身の紛れて3人は退散した。

様子見ついでに走馬市で一番重要な場所に向かった。

そこはかつて希望のマギアの三大将が話し合いに使っていた場所。

今は潰れた元プラネタリウム。そこは収入が激減して潰れることになった。

そこをお嬢様のシノブが大金を支払って買ったのだ。

だから、営業はしてないけれど、今でもプラネタリウムは使える。

「ここには私達の覚悟がある。魔法少女を救おうと決めた覚悟が」

そう言うシノブの目は、憎しみに揺れる瞳よりおぞましい憎悪に染められていた。

「アハハハ！こんな簡単に行ってくれてよかったよ！これで分散できた！後は天使を捕獲するだけだ！」

真由子とかりんの前に出ていたシノブは、振り返ると狂気に取り憑かれたような顔で笑っていた。

「どういふことなのか説明してもらおうか」

かりんは困惑して何も言えなかったが、冷静な真由子は真っ直ぐシノブを睨みつけながらそう言った。

「そうだね。準備は万端だから話していいかな。まあ、簡単に言えば、一部嘘を交えて話してここに連れてきたんだよ。天使の力は素晴らしいからね。世界中の魔法少女を救うための生贄になつてもらうの」シノブのこの言葉でハッキリした。

ここまで上手いきすぎていた。

何かの目的で全てから場所を消したとして、記憶が残ってたら戻ろうとするのが普通。

記憶から完全に走馬市を消せばやりやすいはずなんだ。

それなのにそうせずに走馬に招き入れた。

しかも、天使をわざと探していた。

こよみを頼ったところでどうにかなるとは思えないし、頼るならもっと大人数に声をかけた方が効率がいい。

それもしないでこよみ達の元にやってきた。

他の魔法少女には目もくれないで。

ああ、全てが仕組みまれてたんだ。

この走馬市の3人のボスによって。

「あー、なるほどね。最初っからこのために探してたわけだ。私達を分散させて取り押さえれば脅威では無いし、天使を孤立させておいて味方の振りをして近づけるようにしたなら、簡単に誘拐してその計画に使えるもんね」

かりんが横目で真由子を見ると、今にも殺しにいきそうなくらい怒りで煮えたぎっていた。

その目は野獣のように獲物を狩る側の目だった。

刀を抜いて握りしめているその手は力が入りすぎて震えている。

その刀身も主の怒りが伝わって黒から燃えるような赤に変色している。

「理解してくれてるようでよかったよ。何も知らせずに潰すのだけは嫌だったからね。これで心置きなくやれる」

シノブがそう言って手を前に伸ばした時、我慢できなくなった真由

子はその腕を切断した。

「こよみを支配するつもりね。そんなの許さない！」

怒りで完全に鬼の力を発揮した真由子は、愛と怒りと恨みで別物に変わった。

目の下のくまはよりハッキリして、さつきまで怒ってたのが嘘みたいに落ち着いている。

「どうせまだ生きてるんでしょう。出てきなさいなあ」

進化した鬼の殺気と魔力は天使と同等になったので、そのせいでシノブは一切を押し殺して隠れた。

だが、相手はルールを使う鬼。逃げられるわけがない。

「分身は消したんだから、さつきと出て来なよお」

そう言いながら腕を切られて倒れてる分身を容赦なく突き刺した。

それでも出てくる気配がないので、刀を腕に当てて少し切り、呪いのようなルールを展開した。

「呪詛ルール、1分ごと範囲を狭める。最初はこのプラネタリウムで、その範囲から出たら死ぬ。スタート」

このルールはソウルジュエムに溜まった穢れと自分の血を使って発動する。

発動したらターゲットの手に真由子の鬼の紋章が浮かぶ。

そのルールの拘束力は元々一番だった血の誓いを遥かに超えて、命を簡単に奪えるくらいの強制力がある。

このルールの発動で逃げられなくなったから、後は出てくるのを待つだけ。

だから、かりんそつちのけでプラネタリウムの席に座って待ち始めた。

これが怒りの先に到達した鬼だ。

愛も憎しみも表裏一体。

さて、どっちが先に折れるのか。

第43話 中央のボスの戦闘タイム

みんなが奮闘してる中、魔女の結界を多重に展開して身を守ってるこよみは、魔女達を守る必要もあるから動けなくなった。

その天使を目指して雑魚達が束になって、次々と魔女を倒して進行していった。

政清の連携とコトハの規律で全力を出せない今がチャンスだから、絶対に逃すまいと50人掛かりで一番奥の天使の結界を目指す。

こよみも大変なことになってる時に、アリナ、ヒガン、マミは勧められるままにのんびりとお茶をしながら話を聞いていた。

「私達の目的は天使を捕獲してその魔力を使うこと。天使の魔力を規律で変換できるようにして、それを増殖させてから彼女の魔力をさらに規律で移せるようにルールを作る。それを渡せたら世界中に連携でドツペルを与える。それが私達のやり方だよ」

他人から見ればどうでもないことかもしれないけど、天使のこよみを知ってる人からしたら、その目的を達成するために利用されるなんて皮肉としか言えなかった。

「そんなことをしたとして、みんなは救われても里見さんが話してくれたエネルギーの回収はどうする気なの？」

マミが真面目にそう尋ねると、コトハも真面目に返してくれた。

「それはいけないことだと分かってはいるけど、何人かの魔法少女に定期的に生贄になってもらって、半魔女という形で生み出してその子の中で感情エネルギーを出せるんだ」

コトハは今回の件に関わってはいるけど、他の2人とは違って悪いとは思っている。

あの2人は殺そうともしてくるし、キユウベえの考えを大きく逸脱するようなことを簡単にする。

でも、天才は何も考えてないお嬢様と人斬りと比べて、まだ引き返そうと思えばできる立場にある。

「コトハ様、私はそんなことを考えているのに気づきませんでした。」

ずっとお側にいたシノブ様もそんな計画を立てている素振りを見せませんでした。どうして私達には隠すのですか」

同じ走馬市の魔法少女なのに仲間外れにされたヒガンは、尊敬する3人がこんなことをしていることに怒っている。

「南は今のままでいいなんて言うからだよ。北はキュウベえに復讐するためにドツペルを広げると言って、中央は世界を救うために犠牲を出してもやらないといけないうって思ってるんだ」

「つまり、南は現状維持の考え方だから邪魔になったというわけですか」

「私は不本意なんだけどね。あの2人は神浜との繋がりを絶たれたことに怒っていた。だから、広げることに対する人を追い出して、好奇心に負けた私も参加したんだよ」

「南は全員を追い出して、他もこつちと同じ考えの人を追い出したとして、なぜシノブ様も追い出す必要があったのですか」

「シノブは天使の誘導役だよ。記憶を規律で条件が整うまで忘れるようにしたけど、これは上手くいくか分からない賭けだったんだ。まあ、南だけだと怪しまれるし、シノブが居ないのも怪しまれる。だから、こうしたとも言えるんだけどね」

ここまで話を聞いてヒガンは、とんだ茶番に付き合わされていたことを理解した。

それを受け入れて主人達を捨てる覚悟を決めた。

「それ以上は何も聞きません。私はこの走馬を捨てることにしましたから、ただ世界を救う発想は素晴らしい。後でこよみ様に利用されように気をつけてください」

完全に乗り換えたヒガンは席を立った。

それに合わせてアリナとマミも席を立ったけど、すぐにしゃがんで姿勢を低くした。

ヒガンは大鎌を振りかぶって一気に一回転切りをした。

すると、コトハの部屋の壁が一切なくなつて、その先にある半魔女の実験室が見えるようになった。

「今までお世話になりました。これからはこの死神、天使に忠誠を誓って働きます」

アリナとマミを横に立たせて、ヒガンはかつこよくそう言った。だが、壁を全て破壊したのはまずかった。

「それはいいけどさ。知ってるよね？私の大切な研究施設に勝手に入られるのが、私は一番我慢できないってことを」

前髪で目元が見えなくなったコトハは、誰が見ても怒ってるようにしか見えなかった。

つまり、ヒガンはとっさの行動で地雷を踏んでしまったのだ。

「あつ、これは逃げないといけないやつだ。とりあえず、上に登るための階段かハシゴはあると思うから、それぞれ見つけたらそれで逃げるように。それじゃあ、解散」

やばいと思ったヒガンは2人にそう伝えて鬼ごっこ開始の合図をした。

すると、土足で入っていく3人に我慢できずにコトハが追いかけていった。

捕まったら半魔女化実験に使われるから3人は必死で逃げた。

第44話 天使の目的達成への一歩

午後2時、相馬市内で四つに分かれて戦いが始まっているところに、あのキユウベえが姿を見せた。

キユウベえは迷うことなく北の政清の所にやって来た。

「やあ、政清。僕があげた情報は役に立ったかな？」

真つ白なキユウベえは暗い部屋の中でもある程度見えた。

「おかげさまで順調に進んでおります。天使を利用できればこちらとしても一石二鳥になりますから」

「それは良かった。僕としても彼女はおかしかったから邪魔になるところだったんだよね」

暗闇に紛れてキユウベえと政清はそんな話をしているが、忍び寄る影には気づかなかった。

「私をどうにかできるとでも？」

汗びっしりで疲れた様子のこよみが現れた。

こよみは足元にいるキユウベえも魔女の餌にした。

魔女は美味しそうにキユウベえを丸呑みにして喜んでいる。

「おやおや、すべての元凶の方から来てくれるとはね。下っ端はどうしたの？」

「あんな雑魚は魔女に任せたわ。私が一番奥の結界にまだいるように見せかけて出てきたからまだ踊ってるでしょうよ」

やっぱりこの天使はとんでもない怪物だ。

こんなのを前にして、初めて政清は自分達がやばいことをしてるのに気づいた。

その政清にこよみは近づいて目をよく見せた。

「ここまで苦労したんでしょうけど、あっさり終わってもらわよ」

その目には認識操作がある。

それによって数秒で政清は、自分が天使側であるように操作されてしまった。

「さて、あなたは誰の仲間なの？」

「もちろん、こよみの仲間に決まっている」

これで楽に終わらせられる。

こよみは汗を拭いながら電話をした。

相手は灯花だ。

「もしもし、ちよつと頼みたいことがあるから来て。場所は大体の位置をメールで送るから、それで急ぎめに来て。よろしく」

うい、灯花、ねむに電話をして準備を整えた。

メールも大急ぎで送った。

「さて、政清。連携で私の魔力をみんなに送って」

そう言うこよみの目は真剣そのものだった。

その目を見て、認識操作で仲間だと思っている政清は容赦なくこよみの腕を掴んで渡した。

そこに中継役の灯花が間に合った。

移動方法はゆかりがこつそりと残っていた魔法陣。

「ストップ！そのまま送るのは危険だよ！わたくしが間に入るから手を離して！」

そう言われて政清は静かに手を離して、今度は2人の間に灯花が立って2人の手を握って魔力を変換して流した。

そして、それを味方全てに渡した。

こよみの目的は全ての魔法少女の解放。

そして、自分の恋愛の永遠の成就と、全ての魔法少女の共存。

こよみの目的はもうすぐ成就する。

だから、天使は味方全てに翼を与える。

魔力を突然受け取ったプラネタリウムの真由子とかりん、学校の地下施設のアリナとマミとヒガン、伊藤邸の地下牢に入れられたみたまと十七夜とゆかり、この全員が背中に円環のまどかや天使のこよみと同じ翼を生やした。

ただ、鬼の真由子だけは一瞬で消えてしまった。

「さあ、一気に終わらせるよ！みんな走馬の魔法少女を一気に倒しなさい！」

こよみはこの事情も分かったから、自分ではやらなくてもサポートで攻めに行く。

それを政清の連携で通信だけでなく、自分の考えも一緒に乗せてみんなに伝えた。

やることを終えたこよみは地下牢から3人が出てくるのを待った。ついでに灯花が途中で置き去りにしたういとねむの到着も待った。

しばらくすると、双方が同時に政清の部屋に入ってきた。

「あら、あなた達はこよみに呼ばれたのね」

少し元気そうなみたまは神浜の3人組をみてそう言った。

「こよみに来れば魔法少女が解放されるってメールが送られたからわたくし達は来たんだよ」

「そう言われてきてみれば、随分と面倒なことに首を突っ込んでるんだね。僕なら自分から行くことはないね」

灯花とねむは返答しながらこよみに文句を言った。

文句は言われたけど、これで準備は整った。

後は残りの二人も味方につければこよみの力で魔法少女を救える。

終わりは近い。

第45話 半魔女は魔女無き世界の悪夢

地下施設で逃げていた3人は、逃げることをやめてコトハと戦い始めていた。

「ちよつ！いきなり攻撃に切り替えるのはやめて！被験体を入れてる容器が割れたらどうするの！」

コトハは自分の半魔女化実験の被験体を心配した。

そんなことは知ったこつちやない、と3人は攻撃を続けた結果。

アリナが狙いを間違えてそれらに当ててしまった。

その攻撃が当たった瞬間、コトハは青ざめて焦り始めた。

「そ、そんな。まずい、まずいまずいまずいよ！魔女化は存在するんだから、こんな呪いをため込んだのを解放したら…」

アリナのせいでコトハが危惧していたことはすぐに起きた。

割れた物の中にはソウルジェムが入っていて、その中で半魔女は育っていた。

それが外部からの遮断から解放されれば、真由子とコトハに縛られていなければすぐに魔女化する。

「あー…なんでこうなるかな！天才と言われたら私でもこれはまずいよ！」

コトハは一番焦ってるけど、さすがに三体もワルプルギスの夜級が出てきたらヤバいのは、アリナ達でも理解できている。

そこに、ゆかりの瞬間移動で助けに来たういとねむが到着した。

ねむはそれを見るなり背後に立たせたコトハに向けて一言投げつけた。

「まさか、僕の従姉いとこがこんな愚かなことをするとは。尊敬してたのにがっかりだよ」

それを言われたコトハはうつむいて黙ってしまった。

それを見て完全に失望したねむは、従姉の尻拭いのために新しいウワサをその場で作り出した。

これはホーリーアリナ戦で使い果たすはずだった力を、魔法少女の本当の解放のためにこの場で絞り出して作ったものだ。

それは『ウワサ女王のウワサ』と言って、命令で全てのウワサを内容と行動も全てを操るといふ内容のウワサだ。

そのウワサも神浜聖女と毛皮神と同じく纏うタイプになっている。

「僕の最後の作品だ。未完成な魔女達もこの力には覚悟しておいた方がいい」

そう言うと、ねむはそのウワサを着込んだ。

その途端、ねむは尋常ないほどのオーラを放った。

そして、本を開いて大物から小物まで全てのウワサを呼び出した。

「これで一気に終わらせる。僕の脳髓に宿し想像の子供達。今は広大な世界に足跡を残す機会だよ。盛大に暴れて堪能しておいで」

普段より多数のウワサを呼び出して、女王の命令で魔女を攻撃させた。

一部は内容を変更しているの、簡単に魔女を倒した。

その中で毛皮神のウワサと神浜聖女のウワサも復活しているの、その場にいたアリナとマミに無理やり取り憑いた。

「ちよっ、なんで終わったのに着なきやいけないの」

「それは決まってるんですケド。アリナのせいで他の半魔女にも影響を出して解放しちやっただからなんだヨネ」

アリナの言う通りで、さっきの魔女達は结界を作る前にここで出てきたので、物理的に割って他の被験体も解放してしまったのだ。

「アリナ、毛皮神のウワサを着てる時だけ前のアリナを着れるようにしたから、嫌だとは思うけど魔女を10体の殲滅に力を貸してもらって」

ねむがそう言うと、アリナは嫌そうな顔をしながらその力を借りることにした。

目を閉じるとそこには前のアリナがいた。

前のアリナはマグウスの時のアリナではなく。

御園かりんと一緒にいる時のアリナだった。

「初めましてだヨネ。まあ、アリナはリメンバーしてもらえてないけど、こつちからはいつも見てたカラ」

「アナタが前のアリナなワケ？」

「そう。アリナは命を題材に作品を作り続けるジーニアスアーティストだったんだヨネ。でも、スランプが治ればアナタの方が上になる。それは保証するんだヨネ。だから、アリナができなかったことを全て託すカラ。頑張つてヨネ」

前のアリナは今のアリナを認めていた。

同じアーティストとして、自分には描けない絵を描ける今のアリナを応援していた。

一方的には嫌ってたけど、賞を取れるような価値あるアーティストに認めてもらえて、今のアリナ・グレイは内心で喜んでその力を受け取った。

次の瞬間、アリナの背中にあつた翼は薄ピンクから緑色に変わった。

「アリナが温めてあげる。ウワサ通りにウワサを超えて！」

そこからは一方的だった。

完全体になればワルプルギスの夜級の魔女も、今の状態ならういの回収のサポート込みで余裕で倒せた。

ねむ、マミ、アリナの3人の力で。

第46話 全てが片付いて解放される

プラネタリウムのシノブ戦。

真由子は恋人の力を吸収できても、そのサポートを得ることは出来なかった。

それでも、誰かに捕まることなく逆に利用してると感じて、満面の笑みでとても嬉しそうにした。

「シノブウ、もう諦めなあ。ルールでだいぶ範囲も狭くなったんだし、ついでに連携の子も終わったみたいだからさあ」

真由子の余裕のあるゆったりした口調は、隠れるシノブへのプレッシャーになった。

少し前は怒りに身を任せてるだけだったけど、今は静かな怒りで冷静に対処できる。

しかも、ただ冷静になったのではなく、容赦なく鬼として魔法少女を切れるようになった。

「やれると思ったのに、結局ダメとはね」

そう言いながらシノブが隅っこから出てきた。

どうやら空間も増殖させられて、壁と壁の隙間を広げてそこに入っていたようだ。

「大人しく諦めて自首するよ」

そう言ってシノブは大人しく両手を差し出した。

「分かった。しばらくは拘束させてもらうけど、その状態でこよみがいる政清の家に案内してくれるう」

「それくらいならお安い御用だよ。こっちは負けたんだからさ」

完全に諦めたシノブが案内すると言ってくれたので、真由子は軽めに持っていたロープで手を縛った。

「なんかあつさりしてるの」

「こんなものよお。こよみが動いたのならあのチート魔法で楽々やつて見せるだからあ」

かりんが困惑してるところに鬼の真由子はゆったりとそう言った。

そして、真由子はプラネタリウムを出るために歩き出し、そのあと

を縛られたシノブと緊張の糸が切れたかりんが付いて行った。

学校の地下組は半魔女の残りも完全な魔女になる前に終わらせてあげていた。

他にもソウルジェムの中で魔女化したのが沢山あったので、一つ一つ丁寧に破壊して砕けたソウルジェムと体を後で埋めることにした。

アリナ達を迎えにゆかりが来て、その遺体はここから外に出してくれることになった。

それから全員をゆかりが連れて政清の家に移動した。

しばらくして全員がここに揃った。

一番日の当たる部屋で、少しずつ日が沈むのを見つめながら、こよみは最後の仕事をすることにした。

「シノブ、悪いけど敗北者のあんた達には手伝ってもらおうからね」

「一体何をするの？」

こよみは覚悟を決めた真剣な目をしてるけど、何も知らないシノブ達は疑問符を浮かべた。

「魔法少女を救うのが私の役目だから、ここに揃ったキュウベエの力を奪った6人と天使である私の力で世界から魔女化を取り除くんだよ」

そのセリフで灯花、ねむ、シノブ、コトハは理解した。

「なるほど、7人でやればできるかも」

「わたくし、大急ぎで準備するね」

理解できてる4人はすぐに行動を始めた。

理解できてないという政清にはこよみ自身が詳しく説明した。

魔法少女の救済。

その準備が整ったので7人が伊藤家の庭で必要な位置に立った。

「みんなはここで見ててね。それじゃあ、始めるよー!」

まず、シノブがこよみの背中に触れて魔力を増殖させた。

それをういが回収して、ういから灯花がそれを受け取って変換した。

変換された魔力は、本来ならすり減る命の代わりにねむとコトハが利用して、ドツペルシステムを魔法少女に与えるウワサと規律にして作り出した。ついでに自動浄化システムも作った。

作られたものの効果が世界に広まるように政清が連携して、地球全体に届くように魔力を借りて使った。

これによって世界中の全ての魔法少女が、魔女化の絶望から解放された。

本来ならこれでいいが、キュウベえがいる限り危険なのは変わらないから、増えるこよみの魔力を真由子がもらってルールを使った。

『呪詛ルール、キュウベえはこの星から出て他の星を探しにいかなければ、3日以内に全滅する。スタート』

その内容も政清の連携でキュウベえに伝えた。

これで実質解放されたことになる。

ハッピーエンドを掴んだこよみは、天使の力を真由子とコトハの二重で封印した。

もう、これ以上の戦いがないことを願って、自分の大きな力を封じることによってそれがなくても生きていけることを見せるのが目的だ。

全てが終わったあと、魔女は全てこよみの管理下に置かれることになった。

走馬市は完全にも通りになって、今度は見滝原や神浜とも仲良く

やっつけていけることになった。

アリナはどっちの作品も描くようになって、いまだに記憶が戻らないまま有名になっていった。かりんを横に連れて。

まだ世界は完全には変えられない。

でも、少しずつならキュウベエの呪縛から解放できる。

だから、こよみは見滝原のボスになって、ここから魔法少女同士の戦いを無くせるように進めて行った。

鬼の真由子が神浜に行くのを抑えながら。

最終話 マギアレコードを聴く者

全てが終わった後、宇宙では神と悪魔が会っていた。

「ほむらちゃん、2人の合作のレコードだけど。これにノイズ入れたのほむらちゃんでしょ！」

こよみのいる世界を見ながら円環のまどかは悪魔ほむらに文句を言った。

「愛や憎しみ、恨みは絶望の果てに希望となれば力になる。その子に対する愛を表現しただけよ」

あれが必要なノイズであることをほむらは主張した。

でも、まどかは納得がいかなかった。

「だからって、私の力を貸したこよみちゃんに近づけることはないでしょ！」

「仕方ないことよ。私とあなたは今も敵同士。そうである以上、あなたの天使の私の鬼はいつかぶつかることになる。それを回避する方法がこれしかなかったのよ」

世界を守る二つの概念は互いにぶつかりながらも仲良くしている。

だから、こんな喧嘩も日常茶飯事で、すぐにお互い落ち着いた。

「とりあえず、このレコードは歪だけどハッピーエンドだね。ほむらちゃん」

「いえ、確かにハッピーエンドだけど、問題は山積みになっている。だから、まだ終わったわけじゃないわ」

「それもそうだね。これを維持できるかが問題だもんね」

2人は真面目にこの宇宙を見て色々と考えている。

全ての裏にしながら。

「私達にできなかつたことを望む」

「それは私達がバラバラなら永遠にできないこと」

『光と闇を抱えても残り続ける最高の世界の完成。それができる日まで私達は見守る』

宇宙で2人が地球を抱くようにした。

干渉はできずとも見守ることはできる。
これからも永遠に。

パラレルワールドがある限り、レコードはいくらでも作られる。
あそこが違えばなんていうものも集まれば、また円環の理も悪魔も手を出せない世界が増えるかもしれない。

いろはが魔法少女になるところから変わった。

このレコードから複製されれば、また新たな天使や魔女や鬼が出るかもしれない。

キュウベえも干渉できない世界が出来れば、それもまた変わった音を奏でるだろう。

この世に無数に存在するレコードは不協和音を奏でる。

世界を作り出した概念でも無い限り、ちゃんとしたレコードは作れない。

「でも、適当なレコードは概念であれば作れるよね」

「世界はそうできている。私の概念の存在を超えた力も作れる」

『天使と幽霊は世界の理から外れてるから』

天使の状態で概念となった場合のこよみと、新しいレコードから生まれた概念が、円環の理と悪魔から見えないところで手を繋ぎながらそう言っていた。

天使はそこから手を離して消えた。

「またね」

そう言い残して、幽霊とは別の天使のレコードの管理に戻っていつ

た。
そして、平和な自分を見ながら微笑むのであった。